第４章　まとめ

１　岩鼻岩陰遺跡出土縄文土器について

1

本遺跡では、縄文時代前期から弥生時代早期の土器が出土した。これらはⅡ0層、Ⅱ1層、Ⅱ2層、Ⅱ3層、Ⅱ4層から層位的に出土するが、後期初から前半については削平や攪乱のため良好な包含層が残存せず、河川堆積層（Ⅳ層）や他の時期の包含層に混在するかたちで出土している。ここでは、出土土器の編年的位置づけを検討し、岩陰の利用された時期を明らかにする（第162～164図）。

2

(1)　前期

量的に少なく散発的な出土状況であるが、5区と7区から完形ないしは全体の器形が分かる程に復元できる資料が出土している。

前期1類（333）は二枚貝条痕を地文とし、外面口縁下に刺突文が3段にわたりに施されるもので、復元口径20cmの小型品である。

前期2類（334）は、内外面に条痕が施されるのみである。334は口径25.8cmと比較的小型である。333と同じ5区のⅡ4層から出土しているが、334の方が333よりも明らかに上層に位置する。

前期3類（453）は6区のⅡ4層から出土したもので、外面に綾杉文状の文様が浅い沈線により描かれる。

以上のうち、口縁下に刺突文を有する前期1類は、東北九州を中心に分布するもので、県下では国東市羽田遺跡（宮内克己編　1990）、杵築市エゴノクチ遺跡（高橋信武編　1993）、大分市横尾貝塚（高橋信武編　2012）などで出土している。羽田遺跡のものは、波状口縁を呈し、口径40cm前後の大型品もある。また、刺突文に加えて、波頂部下に浮文や隆帯を付す例もあるなど、333とはやや異なる様相を呈する。宮内克己はこれらを、瀬戸内の羽島下層Ⅱ式の影響を受けたもので、羽田遺跡で多く出土する轟B式に伴うとした（宮内克己　1990）。しかし、宮本一夫は同様な刺突文をもつものを、磯の森式から彦崎Ｚ１式にかけて併行するという見解を示した（宮本一夫　1993）。また、山崎真治は口縁部の刺突文は曽畑式前半期で盛行する要素であるとし、曽畑式との係りを示唆するとともに宮本と同様な編年的位置づけを行っている（山崎真治　2013）。前期2類の位置づけは明確ではないが、前期1類の333よりも上層から出土することから、時期的には後出すると思われる。前期3類は小破片のため明確ではないが、轟式の最終段階である野口・阿多タイプとの関連が考えられる。

(2)　中期

Ⅱ3層では、1区から2区を中心とした中期集中部①、3区から4区を中心とした中期集中部②を確認した。これらを中心に出土した中期の土器は、以下のように分類できる。

中期1類（172）は口縁部内面が帯状に肥厚するもので、肥厚部には縄文が施される。外面は全体に縄文がみられ、口縁部下に2条の沈線が施文される。口縁端部は、比較的浅い刻みが連続して施される。器形的には、キャリパー状を呈するものと思われる。

中期2類（20、42）は内面が無文で、外面に刻みを有する突帯を付すものである。外面口縁下に断面三角形あるいは低い突帯を付し、突帯と口縁端部に刻みを加える。

中期3類（18、19、44）は縄文地の外面に、断面三角形の素突帯が直線的に横方向に付される。口縁部内面の文様の有無などによりa、b、cに分けられる。3a類（44）は口縁内面に縄文が施される。3b類（18）は内面無文で、頸部屈曲部の内面は稜をもたず緩やかである。3c類（19）は口縁下に断面三角形の突帯を2条付す。突帯の上方に連続して貝圧文を施す。

中期4類（327）は頸部に屈曲部をもたず、外面には縄文地に弧状の素突帯を付す。

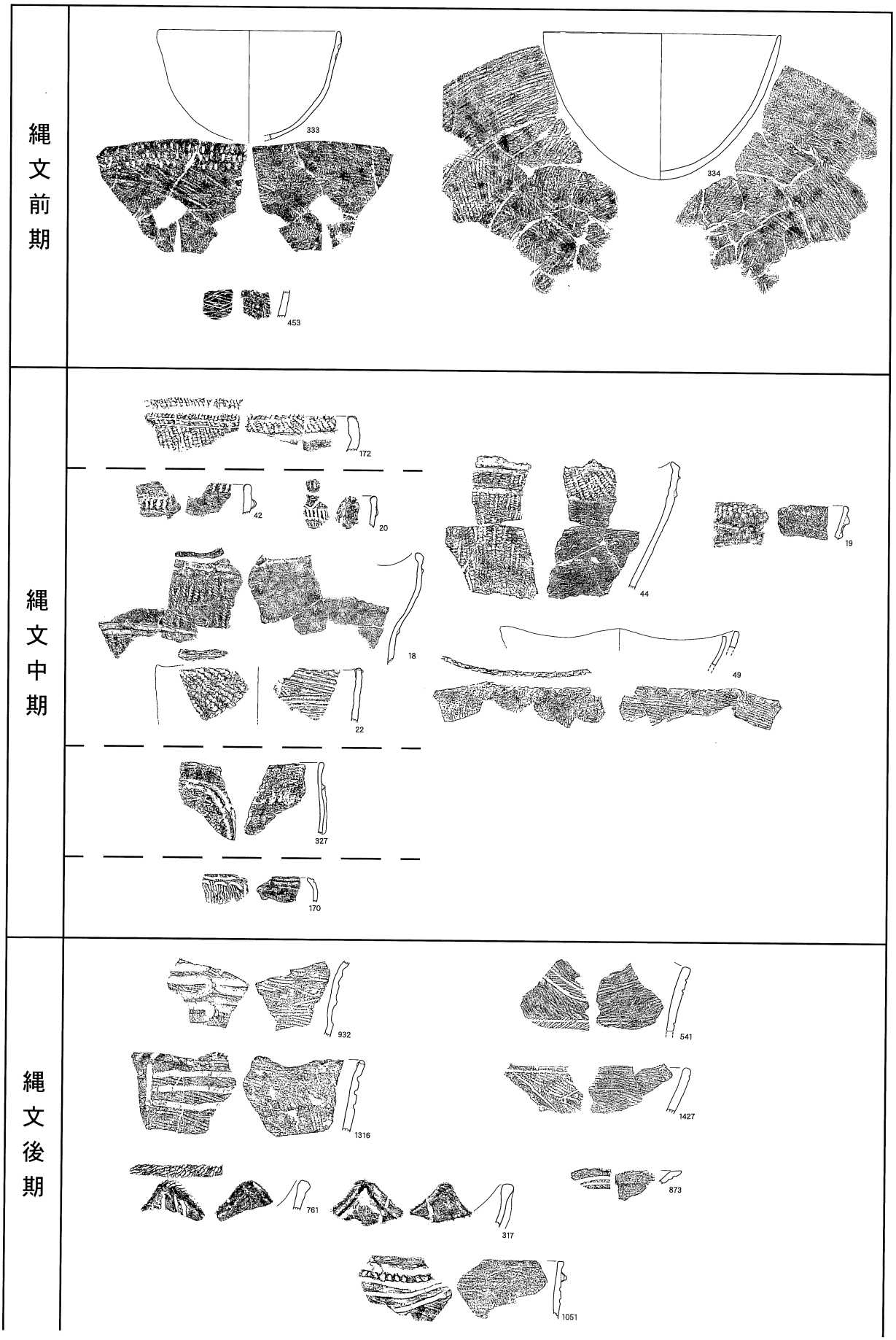
中期5類（22、49）は外面が縄文のみで、内面は条痕が施される。頸部に屈曲部をもたないものと、頸部からくの字状に折れるものがある。

中期6類（170）はキャリパー状の器形を呈するものと思われる。口縁部外面には撚糸文地に沈線が施され、内面は無文である。

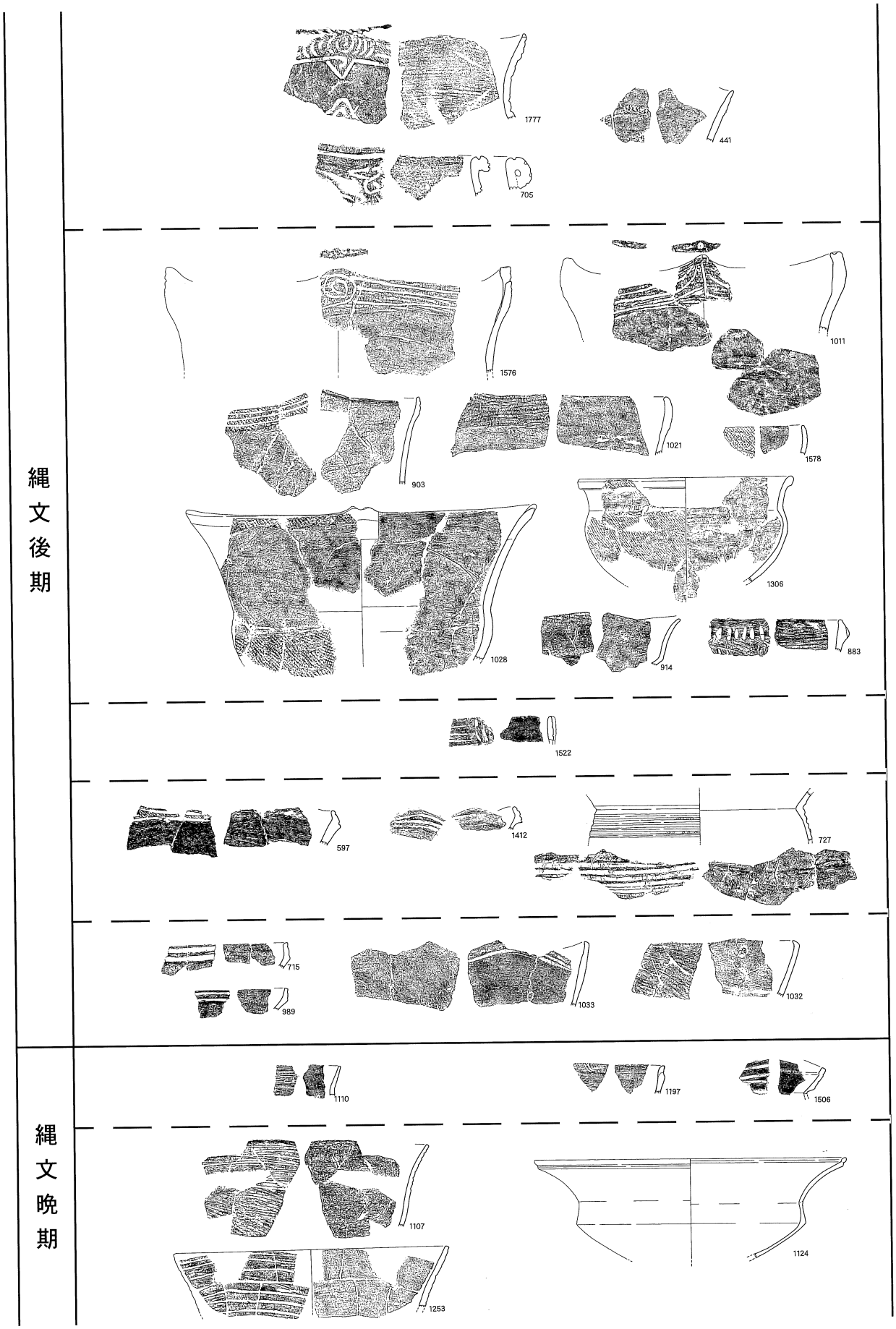
以上のうち、中期1類は、間壁忠彦・間壁葭子による分類（間壁忠彦・間壁葭子　1971）の船元ＩC類にあたる。鷹島式にみられる特徴である口縁部内面の段状肥厚が残るもので、近年、船元式などを再整理した泉拓良の船元Ｉ式（泉拓良　2008）に比定できる。中期2類は間壁忠彦・間壁葭子分類の船元ⅡA類にあたるもので、口縁内面の文様消失から泉拓良の船元Ⅱ式に相当するものと思われる。中期3類は外面に断面三角形の素突帯を付すことが特徴である。3a類は口縁内面に縄文が施文されていることから、3b類に比べ古い要素を残すものである。3b類はキャリパー状を呈する頸部が、鋭く稜をもって屈折せず、緩やかに屈曲することから泉拓良の船元Ⅱ式に相当する。3c類は素突帯の感じが3a類、3b類とやや異なり、貝圧文を加えるなどの違いがある。しかし、内面無文という特徴から、3b類に併行すると考えられる。3a類も器形的には3b類と同様の特徴を有すると思われるので、内面文様に古い傾向を残すものの、3b類と併行するものとして捉えられよう。中期4類も素突帯を付すが、弧状を呈し、縦方向に付されるなど、中期3類とは趣を大きく異にする。器形的にも、頸部から口縁にかけての屈曲がみられないなどの違いがある。これは、間壁忠彦・間壁葭子分類の船元ⅡC類に近似するもので、泉拓良の船元Ⅱ式にあたると考えられる。器形的な点から、中期3類よりは後出する可能性を有する。中期5類は内面に条痕調整が残る点に、他と大きな違いがみられる。間壁忠彦・間壁葭子分類にも類例がみられないことから、在地色の強いものであるかもしれない。口縁内面文様の消失、屈曲のない器形の存在などから泉拓良の船元Ⅱ式に相当すると考える。中期7類は地文に撚糸文を施すという点で、1類から6類までとは大きく異なる。間壁忠彦・間壁葭子や泉拓良によれば、地文に撚糸文が出現するのは、基本的に里木Ⅱ式以降である。このことから、中期7類は他に比べ後出すると考えられる。よって、中期の土器は中期1類の船元1式、中期2～6類の船元Ⅱ式、中期7類の里木Ⅱ式に分けられる。中期集中部①と中期集中部②からは、中期2、3、5、6類が出土しており、船元Ⅱ式の段階に形成されたものであることが分かる。中期4類は中期集中部とは地点を異にしており、同じ船元Ⅱ式でも集中部形成より後出するものである。また、船元Ｉ式と里木Ⅱ式の段階の遺物は少量である。

(3)　後期

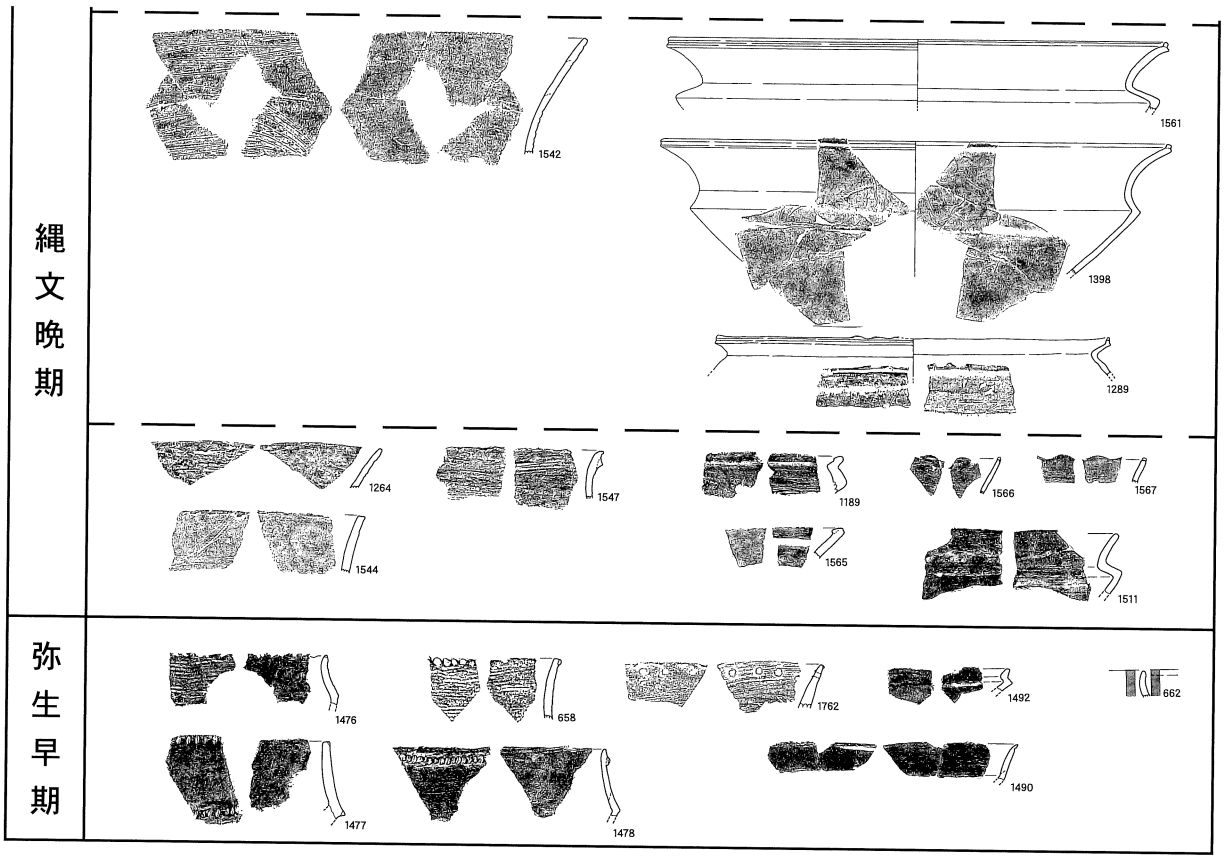
後期初頭から前葉にかけては、良好な包含層が残存しない。岩陰の南半分が河道域であることから、利用可能な北半部に本来は包含層が形成されていたと想定される。しかし。削平のため包含層の大半は失われている。断片的な資料となるが、この段階に位置づけられる土器を紹介する。932、1316は西和田式で、二枚貝条痕地に凹線が施される。中期の阿高式の系譜を引くもので、東北九州に分布する。中津式と伴出することから、後期初頭に比定されている。541、1427は中津式である。いずれも外面に磨消縄文がみられ、541は波状口縁を呈する。873は、中津式に後続する福田KⅡ式と思われる。317、761はコウゴー松式である。磨消縄文が九州地域に伝播するなか、阿高系土器に後続するかたちで東北九州にみられる地域色の強い土器である。1051は大分市の小池原貝塚下層出土資料に類似のものがみられ（賀川光夫編　1967）、かつては小池原下層式と称されたこともある（乙益重隆・前川威洋　1969）。しかし、所謂小池原上層式直前の土器様相は、未だ整理しきれていないのが現状である。近年、水ノ江和同はこの状況を踏まえ、この段階の土器群を小池原下層式（仮称）として再整理し、古相と新相に分けている（水ノ江和同　2010）。1777は小池原上層式とされたもの（乙益重隆・前川威洋　1969）である。田中良之・松永幸男は、小池原上層式及び鐘崎式とされた土器群を再整理し鐘崎Ｉ～Ⅲ式として再定義した（田中良之　1982、田中良之・松永幸男　1983）。本資料は、鐘崎Ｉ式に比定できる。705は鐘崎Ⅲ式か。441は御手洗A式とされるものと考えられる。実態は必ずしも明らかではないが、後期前葉に位置づけられる。以上のように、後期初頭から鐘崎式の間については、ほぼ途切れることなく土器を確認することができる。岩陰の具体的な利用実態は不明であるが、後期になり利用が再開され継続的に使用されたことがうかがえる。



第162図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(1)



第163図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(2)



第164図　岩鼻岩陰遺跡出土土器編年表(3)

後期の良好な包含層であるⅡ2層では、後期集中部①、後期集中部②、後期集中部③、後期集中部④を確認した。これら後期集中部出土土器は以下のように分類できる。

後期1類（903、1011、1576）は、口縁部が緩やかに内湾し、波頂部を有する深鉢である。

口縁部外面はやや肥厚し文様帯を形成する。長くのびる頚部は無文である。文様は903が沈線文と縄文で、他は沈線文と疑似縄文である。口縁部の波頂部直下には文様が集約し、渦文が配される場合もある（1576）が、縦位の隆帯を貼り付けるものはない。ただ、試掘調査のトレンチ1から隆帯を付した口縁部が1点のみ出土（1522）している。

後期2類（1021、1578）は、1類と同様な器形を呈する深鉢である。口縁部外面の文様帯は、縄文あるいは疑似縄文のみが施される。

後期3類（1028、1306）は、口縁端部外面と体部下半部に、縄文または疑似縄文を施す深鉢である。体部上半の頚部は無文である。

後期4類（914）は、3類と同様な文様の配置であるが、器高の低い浅鉢形態をなす。

後期5類（883）は、口縁部外面を断面三角形に肥厚させ、肥厚部にヘラ状工具で刻みを施す。

筆者は鐘崎式に後続する東北九州の土器群である石町式を、古相と新相に分けて整理した（後藤一重　2014）。それに従えば、後期1類～4類は石町式古相に比定でき、後期土器集中部①～④のなかで顕著な差は読み取れない。同様な時期の資料は、本岩陰の下流に位置する三六田遺跡の竪穴建物跡から出土している（河野典之他編　2002）。三六田遺跡出土土器と比べると、1類と2類の口縁部の内湾度合いが緩やかになる、1類の口縁部文様帯が肥厚し幅がやや狭くなる等の違いがみられる。このことから、本岩陰出土資料は古相のなかでも新相的傾向が強い一群と考えられ、三六田遺跡出土資料よりは後出すると考えられる。また、新相の器形的特徴である口縁部波頂部下に縦位の隆帯を付すもの（1522）が1点だけみられる。しかし、古相段階とは異なり、量的に少なく有意なまとまりを確認することができない。後期5類は、石町式と並行する北久根山式である。北久根山式は西北九州に分

布するもので、類似の資料が熊本市の北久根山遺跡でも出土している（富田紘一　1996）。本岩陰出土資料は、西北九州から搬入された可能性がある。

石町式に後続する時期の土器として、西平式（597、727、1412）、三万田式（715、989、1032、1033）を確認することができる。石町式新相段階と同様に、量的に少なく、有意なまとまりも認められなかった。

(4)　晩期

12区から17区のⅡ1層から、特に多くの遺物が出土した。いくつかの集中部分が重複あるいは連続しているものと思われるが、晩期集中部①とした。集中部から出土した土器は、以下のように分類できる。

晩期1類（1110、1107、1253、1542、1264、1544）は、口縁部外面に沈線が施される深鉢である。沈線の数、施文具、施文状況によりa～dに分けられる。1a類（1110）は4条前後の横走沈線が施される。1b類（1107、1253）は間隔のあいた横走沈線が8条前後施される。1c類（1542）は細い施文具を用いた細沈線が、1b類よりもさらに条数を増して施される。時として斜走あるいは縦走する沈線も加わる。1d類（1264、1544）は斜走あるいは縦走する細沈線が主となる。

晩期2類（1197）は、口縁下に粘土紐接合時に生ずる段を意識的に残した深鉢である。

晩期3類（1547）は深鉢で、外面口縁下に断面三角形の無刻目突帯を付す。

晩期4類（1124、1398、1511、1561、1566、1567）は浅鉢で、胴部に稜をもち、頸部が外反しながら口縁部にいたるものである。口縁部形態によりa～cに分けられる。4a類（1124）は口縁部の立ち上がりが高いもの。4b類（1398、1561）は口縁立ち上がり部の低平化がみられるもので、時としてリボン状突起を付すものもみられる。4c類（1511、1566、1567）は口縁部の立ち上がりがみられないもので、口縁部にリボン状突起を付す場合がある。

晩期5類（1506）は波状口縁を呈する浅鉢で、頸部から外方に折れ肥厚する口縁帯に続く。口縁帯に沈線を施し、口縁内面に段を有する。

晩期6類（1189）は浅鉢で、口縁が短く折れるものである。

晩期7類（1289）は浅鉢で、くの字状に折れた頸部から口縁部が立ち上がる。口縁部には低いリボン状突起が付く。

晩期8類（1565）は口縁部内面が肥厚する浅鉢である。

以上のうち、量的に主体を占めるのは、晩期1b類、晩期1c類、晩期4a類、晩期4b類などである。東九州沿岸部における晩期土器の編年については、晩期初めから無刻目突帯文の段階までをⅠ～Ⅴ期に分けて整理している（後藤一重　1995）。これに従えば、本岩陰の主体を占める一群はⅢ、Ⅳ期にあたる。同様な資料は、姫島村用作遺跡からまとまって出土している（坂本嘉弘編　1991）。Ⅱ期の坂口式にあたるのは、晩期1a類、晩期2類、晩期4a類、晩期5類などで極めて少数である。Ⅲ期は晩期1b類、晩期4a類、晩期4b類などからなる。深鉢の晩期1b類は、晩期1a類から型式変化したもので、口縁文様帯の拡張が著しい。これに伴い外面の横走沈線の多条化、細線化がみられる。深鉢のうち晩期2類は西瀬戸内の系譜を引くもので、Ⅱ期の坂口式では他の瀬戸内系無文深鉢と併せて一定量を占めており、全体としては在地系である晩期1類の深鉢に占める割合は小さかった。瀬戸内系深鉢は、Ⅲ期以降急速に減じる方向で推移するものと考えられていたが、Ⅲ・Ⅳ期が主体の本岩陰では晩期2類をはじめとする瀬戸内系の深鉢がほとんどみられず、在地系の晩期1類が多くを占める。Ⅱ期以前の深鉢組成から大きく転換することを確認することができた。浅鉢についても、坂口式段階では晩期5類が一定量を占めた。しかし、本岩陰では晩期5類及びその系譜を引くものは極めて少ない。代わって浅鉢の主体となるのは、晩期4類である。深鉢と同じように浅鉢においても、坂口式とは器種の組成が大きく変化している。Ⅲ期の浅鉢は、晩期4a類、晩期4b類がみられる。晩期4a類は坂口式に比べ、口縁立ち上がり部にシャープさがなくなる。加えて、口縁立ち上がり部の低平化のはじまった晩期4b類が出現する。続くⅣ期は無刻目突帯文出現直前の段階で、晩期1c類、晩期4b類が中心で、晩期7類もこの段階であろう。深鉢は外面に施される沈線の細線化がさらに進行するとともに、斜走あるいは縦走する沈線が加わるようになる。浅鉢は口縁部立ち上がり部の低平化が顕著で、痕跡

程度に立ち上がるだけの資料もみられる。なお、同時期の大野川上中流域の同種の浅鉢は、口縁部立ち上がり部が外傾していくが、沿岸部では低平化の方向で変化しており、細かな地域性をみることができる。Ⅳ期の大きな特徴は、深鉢と浅鉢の口縁部に、低いリボン状の突起が出現することである。次のⅤ期は無刻目突帯文が出現する。晩期1d類、晩期3類、晩期6類、晩期8類などで構成されるが、量的には極めて少ない。深鉢は、晩期1d類に加え晩期3類の無刻目突帯がみられる。浅鉢も前段階からの系譜をひく晩期1d類などに加え、晩期8類などの新器種が出現する。以上、本岩陰の晩期前半の資料は、Ⅱ～Ⅴ期のものがあり、坂口式に後続するⅢ・Ⅳ期が主体となる。Ⅴ期には量が急激に減じる。東九州沿岸部における土器編年からみた時に、本岩陰でⅢ・Ⅳ期のまとまった資料を得た意義は大きい。その理由として、一つには、瀬戸内系の遺物が多くを占めた坂口式以後の土器組成変化を明らかにできたこと。二つめは、無刻目突帯文出現直前の状況が明らかになった点である。

⑸　弥生時代早期

弥生時代早期に位置づけられる資料が岩陰のほぼ全域で出土したが、この段階の包含層であるⅡ0層が残存するのはごく一部であった。

甕は、口縁端部上面のみに刻みをいれるもの（1476）、口縁端部外側と屈曲部に刻みを施すもの（1477）、口縁端部外側に刻目突帯を付すもの（658）、外面の口縁部からやや下がった位置に刻目突帯を付すもの（1478）、口縁下に円形の穿孔が連続的にみられるもの（1762）などがある。最も多くみられるのは、外面口縁下に刻目突帯を付すものである。突帯や刻みの形態・大きさにはバリエーションがみられる。縄文時代からの系譜をもつ浅鉢形態のもの（1490、1492）もみられるが、その量は少ない。また、内外面に赤色顔料を塗布する壺（662）も出土している。

文献註

泉拓良　2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『総覧縄文土器』

乙益重隆・前川威洋　1969「縄文後期文化　九州」『新版考古学講座』3　雄山閣

賀川光夫編　1967『小池原貝塚』大分県文化財調査報告13　大分県教育委員会

河野典之他編　2002『荒尾地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第9集　豊後高田市教育委員会

後藤一重　1995「東九州沿岸部における縄文晩期土器編年」『香々地の遺跡Ⅱ』
香々地町文化財調査報告書第2集　大分県香々地町教育委員会

後藤一重　2014「東九州における北久根山式併行期の土器様相」『古市下遺跡・古市上遺跡』
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第74集　大分県教育庁埋蔵文化財センター

坂本嘉弘編　1991『姫島用作遺跡』姫島村文化財調査報告書第1集　姫島村教育委員会

高橋信武編　1993『宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会

高橋信武編　2012『横尾貝塚』大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書第58集　大分県教育庁埋蔵文化財センター

田中良之　1982「磨消縄文土器伝播のプロセス」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』

田中良之・松永幸男　1983「寺の前遺跡縄文後期土器について」『荻台地の遺跡』荻町教育委員会

富田紘一　1996『北久根山』肥後上代文化研究会

間壁忠彦・間壁葭子　1971『里木貝塚』倉敷考古館研究集報7　倉敷考古館

水ノ江和同　2010　「九州」『西日本の縄文土器　後期』真陽社

宮内克己　1990　「まとめ」『羽田遺跡（Ⅰ地区)』大分県国東市文化財調査報告書第6集　大分県東国東郡国東町教育委員会

宮本一夫　1993「江口貝塚縄文前中期土器群の分類と位置づけ」『江口貝塚Ⅰ』愛媛大学考古学研究室

山崎真治　2013「瀬戸内地域の前期後葉の土器」『曾畑式土器とその前後を考える』第23回九州縄文研究会　沖縄大会

2　岩鼻岩陰遺跡出土石器について

1　石材について

本岩陰出土の剥片石器石材は、姫島産黒曜石が圧倒的多数を占める（第1表）。この状況は後期、晩期などでも同様である。中期段階では、姫島産黒曜石に加え、姫島産ガラス質安山岩、金山産サヌカイト、珪質岩、チャート、西北九州産黒曜石など多種の石材を使った石鏃が微量ではあるが確認できる。しかし、後期、晩期段階では、姫島産黒曜石以外はサヌカイトに限られる状況になる。サヌカイトは、肉眼観察によれば香川県金山産と思われるものが比較的多く確認できるが、九州産のものがどの程度存在するか明らかではない。圧倒的多数を占める姫島産黒曜石について、小円礫の原石がわずかに出土しているが、石材の流通そのものを示すような大中の石核は出土していない。加えて、小形の石核の数も少ない。本岩陰は姫島から国東半島中央部を抜け、内陸部へ向かうルート上に位置するが、石材流通の経由地としてよりも、むしろ石材の日常的消費地としての性格が強い。岩陰内からは多量の小剥片やチップが出土しており、石器製作が盛んに行われていることが分かるが、持ち込んだ石材を徹底的に消費したようである。

2　石鏃について

大量の石鏃が出土したが、時期的には中期の船元式段階、後期の石町式古相段階、晩期前半段階のものが主体である。総数は約750本で、半数以上の約430本が包含層掘削土の篩作業で得られたものである。遺物はすべて原位置に残すように指示を徹底し、作業員の意識も高かったが、結果的に多数の石鏃が篩作業により検出されたのは驚きであった。これまで他遺跡の調査では、今回のような篩作業を徹底したことはなく、同様な作業を試みていれば石鏃をはじめとする微小な遺物を多数得ることができたであろう。単位面積当たりの石鏃出土量は県下でもトップクラスではあるが、量的なことを考えるにあたっては、調査方法の違いを考慮する必要がある。

出土した石鏃の多くは、何らかの部位が欠損している（第2表）。完形品の割合は20～30％で、各時代とも低い。狩猟に用いた矢は、可能な限り持ち帰り修理したと考えられる。先の数字は、その損耗率の高さを示すものであろう。欠損は、先端部のみわずかに欠くものもあり、これらについては再調整を行い尖らせたであろうが、大きく欠損するものは新たなものと交換したであろう。そのため、本岩陰では石鏃の製作や再調整が日常的に頻繁に行われたようで、姫島産黒曜石の原石やサヌカイトの石核に加え、篩作業では数mmの微細なものも含む剥片・チップを大量に得ることができた。

各時期の石鏃の長さを比較してみる（第3表）。中期（2～4区Ⅱ3層出土）はその大半が長さ2cm以下で、その平均は1.75cmである。後期（8～10区Ⅱ2層出土）は、1cm代のものと2cm代のものが多数みられ、平均長は2.0cmである。中期に比べ明らかに大型化が確認できる。しかし、1cm代のものも多数みられることから、これらに2cm代のものが新たに加わったとみるべきであろう。晩期（14～16区Ⅱ1層出土）は、2cm代と3cm代のものが多くなる。最大のものは、先端部を欠損する資料ながら3.8cmである。完形品であれば、4cmを超えるものとなる。1cm代のものもみられるが、少数で1.5cm以下のものはない。平均長は2.6cmと飛躍的に長くなる。中期や後期と異なり、小さな1cm代の製品が姿を消し、大形のものが主体となる。以上、石鏃の長さについて、後期後半の石町式段階と晩期前半の間に大きな画期を認めることができる。その背景には、対象獣や狩猟方法などに変化があった可能性もある。

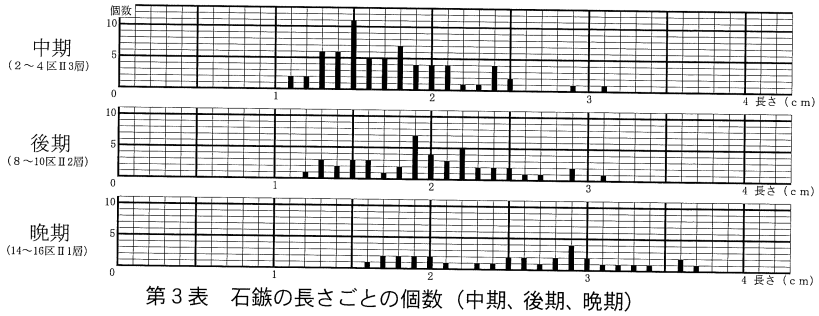
次に形態的な変化をみてみる（第165図）。中期の船元式段階では、正三角形基調のものと二等辺三角形基調のものがみられ、相対的により小型のものに正三角形基調のものが多い。小型のものは抉りの浅いもの（60、61、70）が主体であるが、抉りの大きいもの(68)や幅狭で深めのもの(89)もみられる。比較的大型のものは、幅狭で深めの抉りが主体となる(95、98、110)。脚部の形態にはバリエーションがある。また、98のような側縁が鋸歯状になるものもみられる。全体の大きな傾向として、後期、晩期段階に比べ調整剥離が細かい。後期の石町式段階になると、中期に多数みられた幅狭で深めの抉りをもつものが基本的になくなり、小型、大型に限らず、幅広で浅いものが主体となる。本段階の大きな特徴として、側縁が先端部近くで角度を変えるもの(940、1075、1083、

第１表　剥片石器石材の構成比（縄文時代中期：３区、４区）

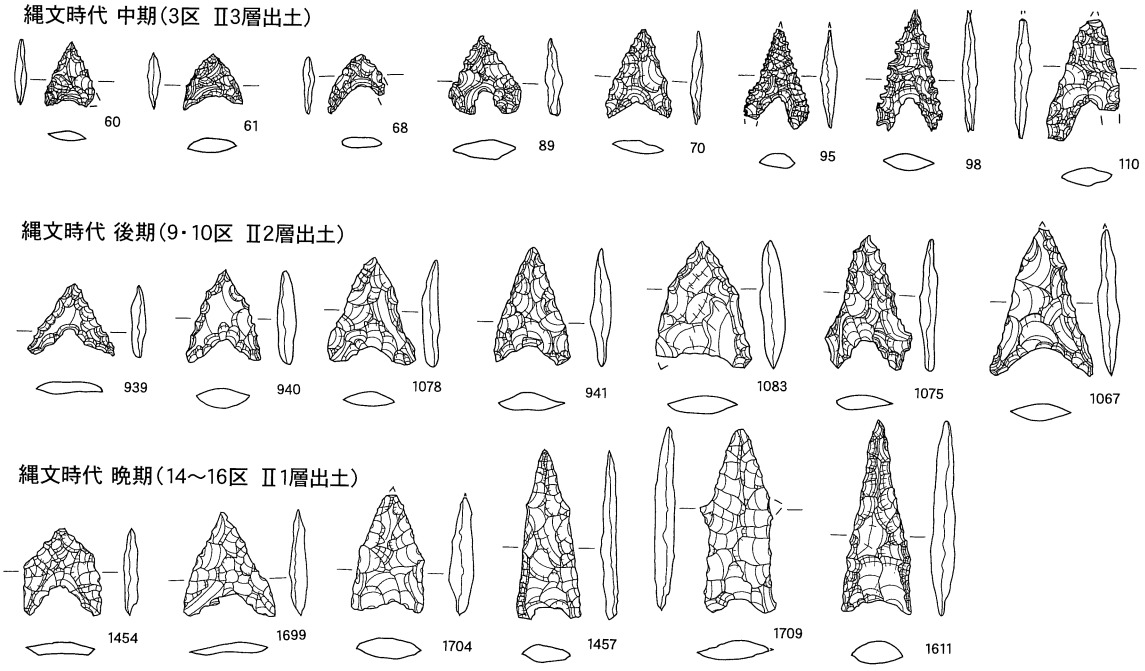
石材	姫島産黒曜石	西北九州産黒曜石①	西北九州産黒曜石②	サヌカイト①	サヌカイト②	姫島産ガラス質安山岩	チャート	ホルンフェルス	泥岩	珪質岩	粘板岩	頁岩	合計
重量(g)	859.0	27.9	13.6	172.1	5.6	1.2	55.0	0.3	1.7	4.5	0.4	17.1	1,158.4
構成比(%)	74.2	2.4	1.2	14.9	0.5	0.1	4.7	0.03	0.1	0.4	0.03	1.5	100.0

第２表　石鏃の部位別欠損状況

	完形	上半部のみ欠損	下半部のみ欠損	上～下半部にかけ欠損
中期(2～ 4区Ⅱ3層出土)	34	25	36	47
後期(8～10区Ⅱ2層出土)	27	21	23	26
晩期(14～16区Ⅱ1層出土)	24	32	13	18



第３表　石鏃の長さごとの個数（中期、後期、晩期）



第165図　岩鼻岩陰遺跡出石鏃の形態(S=2/3)

1067、1078）の出現である。先端部を欠損した石鏃の再調整品とも考えられるが、中期段階では見ることができなかったことと、晩期にみられる五角形のものの萌芽的存在として、後期石町式段階の定型化した形態として捉えておく。晩期前半段階の特徴は、五角形のものの出現である（1454、1457、1704、1709、1611）。両側縁が脚部から直線的に平行にのび、肩部から先端部に向かい尖るもので、肩部に小突起を作り出し強調するもの（1457、1709）もある。抉りは、全体として後期のものよりさらに浅くなる。ただし、小型のものを中心に二等辺三角形基調のもの（1699）もみられる。宮内克己によれば、同様な五角形鏃は縄文時代早前期から確認できるとされる（宮内克己　2015）が、量的にまとまってみられるようになるのは晩期であろう。

文献註

宮内克己　2015「姫島産黒曜石とその製品－石鏃を中心として－」『平成27年度瀬戸内海考古学研究会第5回大会予稿集』

瀬戸内考古学研究会

3　岩鼻岩陰遺跡利用の変遷

1

岩鼻岩陰遺跡は長岩屋川の右岸にあり、河川の侵食により形成されたものである。現状の岩陰面と現河床の比高差は約3.5mで、その差はそれほど大きくない。川との位置関係をみても、川に隣接するように岩陰があり、川と岩陰の間に段丘面が十分に形成されていない状況である。これに対し、岩鼻岩陰遺跡の下流1.3kmに位置にする岩ノ下岩陰遺跡（綿貫俊一編　2008）では、河床との比高差が約6mある。そして、川との距離が約50mあり、その間に段丘面が形成されている。両岩陰遺跡の地形的な状況から、岩陰そのものの形成時期が大きく異なると考えられる。出土遺物をみても、岩ノ下岩陰遺跡出土の土器が縄文時代早期まで遡るのに対し、岩鼻岩陰遺跡ではそこまで遡らない。岩ノ下岩陰の利用が始まった縄文時代早期段階においては、岩鼻岩陰は長岩屋川の流れに洗われ岩陰が形成される途上にあり、岩陰が利用できるようになるのは縄文時代前期になってからである。

2

岩鼻岩陰遺跡の利用状況を、Ⅰ～Ⅷ段階に分けて説明する（第166図）。

(1)　Ⅰ段階

Ⅰ段階は、岩陰が利用されるようになった縄文時代前期である。

この段階の長岩屋川は、現状の河道よりもさらに岩陰近くを流れていた。4区の北端で奥壁から約6.3mに河道の西側の肩があり、河道はそのまま斜めに進み、9区付近で奥壁にあたる。9区以南は河道の中となり、岩陰としての利用は不可能である。従って、実際に利用できた岩陰部分の面積は調査区内において約30㎡で、最盛期のⅣ段階以降の半分以下である。

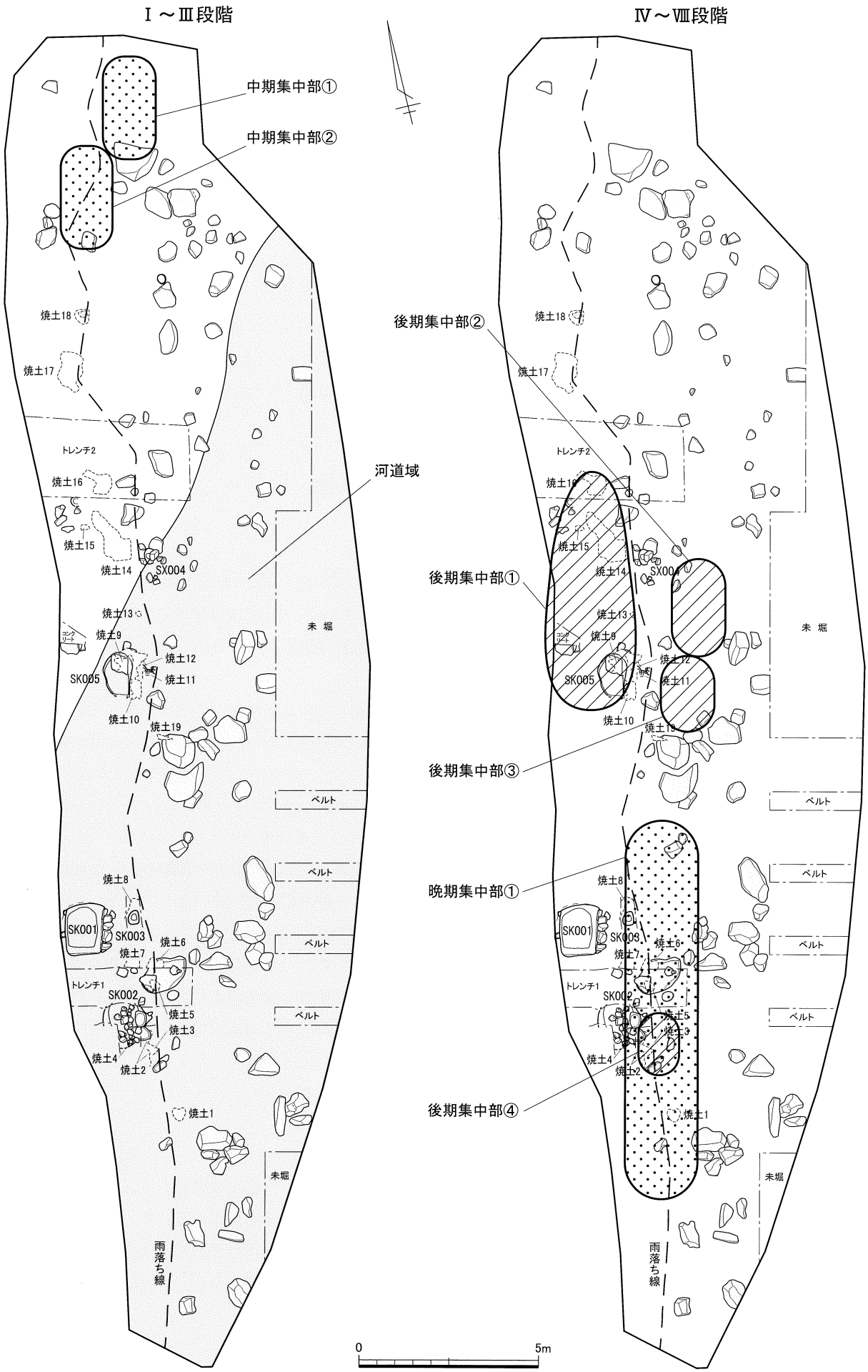
この段階における岩陰面上の土砂堆積は、0.1～0.2mとあまり進んでいない。当時の河床の高さは不明であるが、現在よりも高かったと想定されるので、岩陰面との比高差は2m以内であったと思われる。大雨に伴う増水時には、水没する心配もあったと考えられる。

遺物は、Ⅱ段階以降に比べると圧倒的に少ない。土器は内外面に条痕が施される丸底のものや外面口縁下に刺突文が施されるものなどで、1区～7区にかけて出土した。完形ちかくまで復元できたものもあるが、出土は非常に散発的で一定の有意なまとまりも見いだせない状況である。土器から、時期的にやや間隔をあけた利用であった状況がうかがえ、1回の利用においてもごく僅かな小型の土器しか持ち込んでいないようである。Ⅱ段階以降と比較すると、量的に極めて少数である。また、石器や獣骨等についてもほとんど確認することができない。石器に係るものについては、わずかに姫島産黒曜石の小片が出土するのみで、Ⅱ段階以降において石鏃や剥片・チップが多数出土するのとは非常に対照的な状況である。以上のような散発的な遺物出土に加え、焼土や台石も確認することができない。包含層が調査区の北側に続くことから、未調査地に焼土などが存在する可能性は否定できないが、調査区北側は岩陰の端から外側にあたるため、焼土等の存在は考え難い。そうすると、火を焚かなかったか、仮に火を焚いても焼土が形成されるほどではない焚き方だったと想定される。すなわち、明確な炉として一定期間使用されるようなものではなかったのであろう。

この段階は、岩陰面上の土砂堆積が進行しておらず、河床との差があまりないため、やや不安定な状況である。そのため、岩陰の利用頻度が少ない、1回の利用期間が著しく短い、利用した集団規模も小さいなど、Ⅱ段階以降の利用形態とは大きな差があったと考えられる。Ⅱ段階以降大量に出土する石鏃がみられず、剥片等も極めて少ないことから、同じ岩陰の利用でも、利用の実態はⅡ段階以降とはやや異なる状況が想定される。後段で詳述するようにⅡ、Ⅳ、Ⅴ段階は狩猟に軸足を置いた集団の一定期間の利用が想定できるが、本段階は雨宿り的な一過性の利用というイメージで捉えられる。

(2)　Ⅱ段階

縄文時代中期の段階で、瀬戸内系の船元式土器が出土する。



第166図　岩鼻岩陰遺跡利用状況の変遷

旧長岩屋川の河道は、Ⅰ段階と同様である。そのため、利用可能な岩陰の範囲は8区以北の約30㎡で、Ⅰ段階と大きな変化はない。しかし、岩陰面上の土砂堆積が進行するとともに、河床も低下したと思われることから、Ⅰ段階に比べ岩陰面と河床の比高差は大きくなったであろう。そのため、岩陰面の安定性はⅠ段階に比べ増したと思われる。

この段階の包含層は8区以北に残存するが、量的には1～5区において特に多くみられる。遺物は土器に加え、石鏃が多数出土した。石鏃は、姫島産黒曜石製のものが圧倒的に多く主体をなすが、このほかに香川県金山産サヌカイト、姫島産ガラス質安山岩、西北九州産黒曜石、チャート、珪質岩など多様な石材の利用が確認できた。姫島産黒曜石については、円礫を呈する原石をはじめとし、剥片やチップ、細かな砕片などが多数出土した。岩陰に原石を持ち込み、石器製作が行われていたことが分かる。石器の中では石鏃が主体を占め、この段階の包含層から出土した石鏃は200本以上に及ぶ。弓矢を使用する狩猟活動が盛んに行われていたことを示すものと思われる。また、獣骨等の出土も確認することができる。後段で詳述するが、Ⅴ段階の獣骨等は被熱し細片のものが主体を占めるが、本段階のものは顕著に被熱したものはなく、Ⅴ段階に比べると個々の破片が大きい。獣骨等の取り扱いにおいて、Ⅴ段階とは明らかな差を確認することができる。

遺物が集中し一定のまとまりが確認できる箇所がいくつかみられる（中期集中部①、中期集中部②）。しかし、遺物集中部内を含め、中期包含層中からは焼土が確認されていない。1区～4区など、包含層の削平が著しい箇所があることから、本来存在したものが残存していない可能性もある。台石については、3区の奥壁近くから出土している。

本段階では、土器、石器、獣骨等の遺物が、Ⅰ段階に比べ飛躍的に増大する。これは、岩陰面の安定性が増大したことを背景に、利用頻度が飛躍的に増したものと理解される。面積に比して石鏃や剥片の出土量が多いことから、狩猟に軸足を置いた集団の利用であったと考えられる。しかし、いくつかみられる遺物集中箇所は、いずれも面的な広がりは小範囲であることから、小規模集団による利用であったと想定される。炉跡に想定される焼土を欠く点については、削平のためとも考えられるが、仮に本来存在しないのであっても、Ⅰ段階とは異なり明確な目的を有した集団による一定期間の利用であったことは確かであろう。ただ、焼土が形成されていないということが事実であれば、同様な遺物組成のⅣ、Ⅴ段階とは利用期間の長短など、何らかの差を考えざるをえない。

(3) Ⅲ段階

縄文時代中期末から後期前半の段階である。削平のため、この段階の包含層は良好な状況で残存していないが、後期後半以降の包含層、撹乱層、旧河道内などから土器が出土している。そのため、削平で消滅したが、かつては包含層が存在していたと思われる。

岩陰の状況は、Ⅱ段階までと同様で、実際に居住地として利用できる面積は狭いままである。17区では旧河道堆積層であるⅣ層下層において後期前半の土器が出土するなど、この段階においても河道の埋没はほとんど進行していないことが分かる。岩陰面上の土砂堆積は前段階よりも進んでおり、河床との比高差はやや大きくなり、洪水等に対する安全性はさらに増したものと思われる。

この段階に岩陰として使用可能であったのは、Ⅱ段階以前と同様に1区～8区と考えられる。9区以南では、後期後半や晩期の包含層が残存しているが、その下層にⅢ段階に相当する遺物包含層はみられない。本段階の包含層は1区～8区に本来存在したと考えられるが、撹乱や削平により残存しなかったものであろう。

包含層自体が残存しないため、この段階の詳細は不明であるが、前段階と比べ岩陰の環境に著しい変化がみられないことに加え、包含層が失われたとしても出土遺物の量が少ないことから、Ⅰ段階と同様な利用状況であった可能性もある。

(4) Ⅳ段階

縄文時代後期後半の石町式古相段階である。

この段階で、岩陰の環境が急激に変化する。すなわち、Ⅲ段階までの旧長岩屋川河道が急激に埋没する。これは、何らかの理由で河道が現河道方向へ移動したためと思われる。よって、前段階まで完全に河道の中であった

9区以南も居住域として利用可能となった。加えて、1～8区の間も、河道が東へ移動したため、前庭部が広く使用できるように変化した。河道が岩陰から離れ、河床との比高差も現状にかなり近づいたであろうことから、岩陰面の安定性は劇的に好転したと考えられる。

岩陰は間口約40m、奥壁から雨落ち線までが1～3.2mで、この範囲だけでも約80㎡が利用できる。前庭部がさらに数m伸びることから、実際の利用可能面積は飛躍的に増加したと思われる。Ⅲ段階までの岩陰部面積が約30㎡だったのと比較すれば、その利用価値が大きく高まったことが分かる。

石町式の段階は、8区～10区を中心とする後期集中部①、9区を中心とする後期集中部②、10区を中心とする後期集中部③、15区を中心とする後期集中部④などの有意なまとまりを確認することができる。8区に炉跡と考えられる焼土とそれに隣接して立石遺構（SX004）がある。遺物もこの東側を中心とする周囲から集中的に出土しており、住居跡を連想させる有意なまとまりとして捉えることが可能である。炉跡を中心に岩陰部分から前庭部にかけて屋根や壁を構築したのではと考え、周辺を精査したが、前庭部が県道造成などにより大きく撹乱を受けていることもあり、柱穴等は確認することができなかった。周防灘沿岸の福岡県から大分県にかけての地域で、鐘崎式～石町式の竪穴建物跡が多く検出されており、炉跡に近接する立石遺構についても、いくつかの遺跡で確認されている（註1）。炉跡と立石遺構がセットをなすものと思われ、小池史哲はこの立石遺構に早くから注目し（小池史哲　1996）、調理関連の施設や祭祀的な施設などの可能性を想定している。本岩陰のこのような状況は、オープンサイトにおける竪穴建物内の施設状況と基本的には何ら違いは認められない。

焼土については、先の8区の焼土のほかにも、15区などでも確認されており、炉跡を伴う居住が繰り返されていることが分かる。いずれの集中部も石町式古相段階であることから、複数の集団の同時利用も含めた、頻繁である程度長期間の利用が想定できる。土器のほかに石鏃が100本以上出土しており、本段階も狩猟に軸足を置いた生活であったことが分かる。本遺跡の所在する国東半島西北部には、鐘崎式～石町式段階の遺跡がいくつか確認されている（註2）。それらの遺跡からは、石鏃がほとんど出土しておらず、本遺跡と様相が大きく異なる。国東半島地域は、海岸近くまで丘陵がのびる地形で全体としては環境的に大きな差がないようにみえる。しかし、石鏃を出土しない遺跡が、河川沿いの半島の中では比較的大きな平坦部に立地しており、それらに比べ山間に入った本岩陰とでは生業に大きな違いがあったと考えざるをえない。本岩陰を利用した集団は、狩猟に特化した集団であった可能性が高く、石鏃を出土しない遺跡との違いを念頭にいれ評価しなければならない。この時期の多くの遺跡が石鏃の占める割合が低い事実を考慮すると、本岩陰はこれら遺跡と関係の深い集団の季節的な分業に係る定住地であったと考えられる。地域内に同時期の遺跡が点在する状況から、本岩陰を利用する集団が他遺跡の集団から孤立的に活動するのではなく、むしろ地域集団全体の生業活動の一翼を担うような状況であったと推測される。

石町式古相に後続する石町式新相、西平式、三万田式などの時期は、遺物量がかなり少ない。次のⅤ段階までの間は、利用の形態や頻度に変化が生じたと捉えられる。

⑸　Ⅴ段階

縄文時代晩期前半を中心とする時期と、弥生時代早期の段階である。

本岩陰から出土する遺物が最も多いのは、縄文時代晩期前半の遺物である。土器、石器、獣骨などが多量に出土した。北半の区域のうち、1区～4区にかけては削平が著しく包含層が残存していないが、5区周辺からも焼土を検出しており、本来北半分の区域においても焼土を伴う利用があったことが分かる。9区以南では、13区～16区周辺を中心に焼土や台石がいくつも確認でき、部分的にはそれらが重層的にみられることから、同様な場所が繰り返し利用されたことが分かる。遺物も12区～17区に集中する状況が読み取れ、晩期集中部①とした。広範囲での遺物集中が認められ、まさに足の踏み場もない状況である。中期や後期段階の遺物集中部よりも集中度がかなり高い。焼土及び台石が生活スペースの中心であったと考えられ、遺物の量や集中度から竪穴建物跡と同じようなまとまりや機能があったものと想定される。岩陰北半は晩期包含層の削平が著しいが、このようなまとまりは、焼土の検出された5区を中心にも形成されていた可能性が高い。この段階には北半と南半各々に居住単位が

確認でき、同時に存在した可能性も高い。

遺物のなかで注目されるのは、16区から出土した勾玉や垂飾などの石製装飾品である。緑色を呈する小型品で、大部分は九州内に産すると考えられているクロム白雲母製である。焼土や台石を中心とした晩期集中部①に伴うものである。

石器については、約200本の石鏃が出土した。包含層の土を全量篩にかけたこともあるが、単位面積当たりの石鏃出土量は県下でもトップクラスである。東九州地域の晩期前半の遺跡では、扁平打製石斧が量的にまとまって出土することが知られているが、本岩陰からは1本も出土していない。大分県南西部の大野川上中流域の火山灰台地上の遺跡では、土掘り具としての扁平打製石斧が大量に出土することと、火山灰台地上の遺跡増加から、原初的な農耕の存在が指摘されている。本岩陰の所在する国東半島地域を含む東九州沿岸部における扁平打製石斧の出土状況は、遺跡により大きく異なる（註3）。大野川上中流域のような火山灰台地が大きく広がらないためか、地域ごとの特性にあわせた生業スタイルがあったものと考えられる。とは言え、本岩陰のような大量の石鏃出土例はこれまで皆無である。本岩陰に居を構えた人々は、弓矢を用いた狩猟を専らとし、地形的な制約が大きいと思われるが、扁平打製石斧を使用する植物栽培は行っていなかったと思われる。Ⅳ段階と同じように、狩猟にウエートを置いた季節的な遺跡利用を表すものであろう。

土器や石器とともに獣骨等も多く出土した。それらは大部分が1cm以下の小片で、形状が分かるものが少ない。また、ほとんど全てに被熱した状況が認められた。これらから、何らかの理由で獣骨等は火にかけられ、意識的に細かく粉砕されたことが分かる。

無刻目突帯文の上菅生Ｂ式段階の遺物は極めて少量であるが、弥生時代早期の刻目突帯文については、岩陰全体からの出土が確認できる。一部を除き縄文時代晩期前半と層位的に区分することができず、晩期前半の遺物と混在する状況であった。晩期と同様な岩陰の利用が行われていたようである。

(6) Ⅵ段階

弥生時代から古墳時代にかけてである。

Ⅴ段階の包含層中や表土層から遺物が散発的に出土するもので、縄文時代の遺物に比べると極めて少量である。時期的にも、特に限定される状況はみられない。また、遺物の有意なまとまりも確認することはできなかった。加えて、確実にこれらの遺物に伴うと考えられる焼土などの遺構も検出されなかった。岩陰を訪れ何らかの利用があったことは確かであるが、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ段階とは明らかに異なる。一過性の単発的な利用で、一定集団が一定期間本格的に居を構えたとは認めがたい。

この段階の岩陰利用は、全体としてⅠ段階に似た状況である。

(7) Ⅶ段階

古墳時代以降その利用の痕跡はしばらく確認することができず、次に利用されるのは鎌倉時代である。

14区～15区にかけて、13世紀の瓦器椀などが出土する土坑を1基確認した。中世の遺物が確認できたのはこの土坑のみで、縄文時代包含層はもちろん、表土層などからも出土していない。土坑は長さ1m余りと小規模であるが、完形に復元できた瓦器椀や土師質土器坏が出土したことから、祭祀的な意味合いを有する埋納土坑であった可能性もある。このことから、本段階は生活の場としてではなく、宗教的・祭祀的な場としての継続性のない利用であったと考えられる。

(8) Ⅷ段階

中世後半あるいは近世以降から近代にいたる段階である。

この間の痕跡として、表土層や撹乱層から近世以降の陶磁器等が散発的に出土した。明治21年の地籍図によれば、この付近は宅地となっている。建物の規模等を明確にすることはできないが、明治時代には宅地に伴う建物が存在したと思われる。このような状況は近世あるいは中世後半まで遡る可能性があるが、具体的には分からない。13区の奥壁に近い箇所にある岩盤を穿った遺構（SK001）が、この段階の宅地に伴うものであろう。

現在は前庭部が県道敷きとなっているが、現状のアスファルト舗装の前段階の道路建設に伴い岩陰内の土を用

い路盤整備を行った痕跡が確認された。明治時代以降、宅地から道路へと利用形態が変化したようである。岩陰部分には調査区北端部に倉庫などの施設が近年まであり、この部分はコンクリートの基礎工事が行われ、包含層の撹乱が著しかった。

3

前段では、岩陰の利用についてⅠ～Ⅷ段階に分け詳細にみてきた。しかし、段階により利用の中身が異なる場合があることが分かった。ここでは、具体的な利用形態を大きく①～③に分類して再度整理する。

(1) 利用形態①

屋敷を構え何世代にもわたり連続的に利用が認められる。Ⅷ段階がこれに相当すると思われる。

Ⅷ段階は、中世後半あるいは近世のある時期から近代にいたる間である。岩陰部から前庭部にかけて建物があり、岩陰周辺が屋敷地として利用される。この段階は、岩陰そのものを利用するということではなく、岩陰を含む一帯が屋敷地として利用されるということである。Ⅰ～Ⅶ段階においては岩陰そのものが利用の主対象であったのが、Ⅷ段階では屋敷地として利用可能な平坦面である前庭部周辺が主役となる。

この段階は長岩屋川流域の谷の開発が、岩鼻岩陰遺跡が所在する最上流部まで到達し、水田耕作の単位である屋敷が水田に隣接する山麓に点在する状況であったと思われる。本岩陰の前庭部周辺は屋敷地としては手狭であることから、小規模零細農民の屋敷地であったと考えられる。

(2) 利用形態②

岩陰を居住地として一定期間利用するとともに、同様な利用が繰り返し行われたと考えられる段階である。Ⅳ段階、Ⅴ段階が確実にこれに相当する。

岩鼻岩陰遺跡の隣接地には平坦面が広がっており、小中規模の集落の立地が可能である。それにも係らず一定期間岩陰を利用しているということは、小面積の岩陰で事足りるくらいの小規模集団の利用であったことと、岩陰での生活が竪穴建物と何ら遜色がなかったからであろう。岩陰を利用したのは、竪穴建物にして1棟分、最大で2棟分程の小集団である。岩陰部を中心に前庭部にかけ壁や屋根を構築し、その内部の炉や台石、立石遺構を囲み生活したものであろう。竪穴建物に劣らぬ居住性を有していたと想像され、岩陰を利用することにより竪穴建物建築に要する労力の軽減が図られたものであろう。

Ⅳ段階は縄文時代後期後半で、焼土、立石遺構を中心としたものなど、複数のまとまりを確認することができる。土器、石鏃などの遺物も比較的大きな破片を含み多量に出土している。焼土は炉跡と考えられ、焼土層が厚く形成されていることから、一定期間の利用が行われたと思われる。

Ⅴ段階は縄文時代晩期前半と弥生時代早期である。焼土、台石等が複数箇所みられるので、2集団が同時に利用した可能性もある。多量な石鏃に加え、細かく割られた獣骨が多数出土している。

以上のⅣ、Ⅴ段階は、石鏃が大量に出土することから、狩猟にウエートを置いた生活が一定期間営まれたものと考えられる。縄文時代における季節的な定住の場として、小集団による利用が繰り返されたものであろう。

(3) 利用形態③

岩陰の利用が短期的、散発的と考えられるものである。Ⅰ段階、Ⅵ段階、Ⅶ段階がこれに相当する。

Ⅰ段階の縄文時代前期は、岩陰形成初期段階であったため、長岩屋川河床と岩陰面の比高差があまりなく、河道も岩陰近くに及んでいたため、洪水等の危険性が伴った。また、利用可能面積も少ないなど、一定期間留まるだけの条件整備ができていなかったと考えられる。出土遺物の量も他の縄文時代の各段階に比べ少量であることから、極めて少人数の短期的、散発的な利用であったと考えられる。

Ⅵ段階は弥生・古墳時代で、基本的な生産基盤を稲作栽培におく時代である。そのため、水田が開発できなければ、ここに一定集団が長期に留まる必要はない。遺物量も非常に少ないことから、竪穴建物を単位とするような集団にも及ばない、小規模かつ極めて散発的な利用であったと思われる。

Ⅶ段階は中世前半の時期である。国東半島では、岩陰や洞穴などを利用した仏教施設が地域の信仰の対象とな

ることがある。長岩屋川流域においても、そのような施設が点在する（真野和夫他編　1993)。岩鼻岩陰が信仰の場として利用された記録はなく、同時代の遺物も土坑以外からは出土していないことから、建物などの施設を伴った長期的・継続的な利用は想定し難く、一時的あるいは限定的な利用が想定される。

このほか、Ⅱ段階、Ⅲ段階については包含層の削平が著しいなどのため、どちらの利用形態であったのか判断が難しい。Ⅱ段階は縄文時代中期で、土器や多数の石鏃のみならず姫島産黒曜石の原石も出土していることから、利用形態②であった可能性が高い。しかし、岩陰の北半部分しか利用できない段階であるので、小規模な集団の利用であったことは確実である。

註

1　周防灘沿岸の遺跡で竪穴建物内に立石遺構が確認されている主な例として以下の遺跡がある。
大分県宇佐市安心院町飯田二反田遺跡1号住居跡・4号住居跡（坂本嘉弘他編　1993)、大分県中津市三光佐知久保畑遺跡24号遺構（平田由美編　2004)、福岡県大平村上唐原遺跡縄文1号住・縄文2号住居（小池史哲　1996)

2　鐘崎式～石町式の遺跡が桂川流域に点在する。遺跡はいずれも小中規模で、竪穴建物跡が1～数棟確認されている（第2章第2節参照)。出土遺物をみると、石鏃はほとんど認められず、遺物組成が本遺跡とは様相を大きく異にする。

3　縄文時代後期末～晩期初めの宇佐市尾畑遺跡（小林昭彦編　1995）では一定量の扁平打製石斧が出土している。これに対し、晩期前半の豊後高田市香々地町坂口遺跡（後藤一重編　1995）や姫島村用作遺跡（坂本嘉弘編　1991）では、一定量の土器は出土するものの扁平打製石斧は極めて少数である。

文献註

小池史哲　1996「Ⅴ　まとめ」『上唐原遺跡Ⅱ』豊前バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告第5集　福岡県教育委員会
後藤一重編　1995『香々地の遺跡Ⅱ』香々地町文化財調査報告書第2集　大分県香々地町教育委員会
小林昭彦編　1995『横山遺跡　尾畑遺跡』一般国道宇佐道路埋蔵文化財発掘調査報告書(3)　大分県教育委員会
坂本嘉弘編　1991『姫島用作遺跡』姫島村文化財調査報告書第1集　姫島村教育委員会
坂本嘉弘他編　1993『飯田二反田遺跡』大分県教育委員会
平田由美編　2004『三光村の遺跡－佐知久保畑遺跡－』三光村文化財調査報告書第5集　大分県三光村教育委員会
真野和夫他編　1993『豊後国都甲荘の調査』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
綿貫俊一編　2008『岩ノ下岩陰遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第32集

大分県教育庁埋蔵文化財センター

4　大分県の縄文時代岩陰・洞穴・洞窟遺跡

1

岩陰・洞穴・洞窟遺跡（以下、岩陰遺跡等と称する）は、地形的な制約から、面積的には小規模な遺跡がほとんどである。しかし、草創期から晩期にいたる縄文時代を通してその利用を確認することができ、同じ岩陰などを繰り返し長い期間利用している例も多い。岩陰遺跡等からは、オープンサイトの遺跡では残存し難い埋葬人骨の検出例も多いことから、貝塚とならび縄文時代の墓制研究には欠くことのできない遺跡となっている。また、獣骨等の動物遺存体等が多数出土する場合も多く、それらを分析することにより、縄文時代の食生活等をより具体的にイメージすることが可能となる。さらに、小面積のなかで、土器や石器などの遺物や動物遺存体等が時代ごとに幾層にもわたって堆積することから、縄文時代における時期ごとの変化を捉えることも可能である。このように岩陰遺跡等は、縄文土器の編年作業や縄文社会の生活を復元するうえにおいて、重要な研究対象となっている。

しかし、岩陰遺跡等そのものの特殊性が強調されたり、オープンサイトの遺跡では出土が少ない人骨や動物遺存体等の評価に目が奪われがちな場合が多く、縄文時代における集落論や社会論などにおいて岩陰遺跡等が積極的に取り上げられ議論されたことは少ないように思われる。以上から、本稿では、①大分県下の岩陰遺跡等を概観し、その特色を整理する。②オープンサイト遺跡や大規模遺跡との関係を改めて検討し、縄文社会における岩陰遺跡等の位置づけを明らかにする。

2

大分県下の岩陰遺跡等を概観する。県下では昭和30年代に、日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会主催の調査が賀川光夫を中心に行われ（八幡一郎他　1967)、墓制や土器編年の研究に大きな成果をあげている。現状で確認することのできる岩陰遺跡等は35箇所（第4表）である。岩陰遺跡等が特に多くみられるのは、豊後大野市から竹田市にかけての大野川上中流域、国東半島から山国川流域にかけての県北地域などである。このような地域には、火山噴火を起因とする厚い凝灰岩層などの発達が顕著にみられ、これらが河川の侵食を受け、多くの岩陰・洞穴・洞窟が形成されている。現状で遺跡として認定されていない岩陰なども多数あるが、既に遺跡として周知されている岩陰遺跡等と形状・環境に差のないものも多く、今後悉皆的に精査すれば、さらに多くの岩陰遺跡等を確認することができるであろう。

遺跡名をみてみると、「～岩陰」、「～洞穴」、「～洞窟」、「～遺跡」と多様で、必ずしも立地環境と名称が一致していないようである。そのため、【岩陰】岩壁の下部が侵食により抉れたもの、【洞穴】岩壁の一部が大きく抉られて横穴状を呈するもの、【洞窟】横穴状に深く入り自然光が届かないもの、以上のように再定義して立地形態を表示した。

時期については、発掘調査等が行われていないため詳細が不明なものも多数あるが、そのほとんどから縄文時代の遺物が出土しているようである。しかし、出典資料に縄文時代としか記載がないため詳細な時期が不明なものは、そのまま縄文時代とした。また、旧石器時代や弥生時代のみとされるものについても、将来の調査で縄文時代の遺物出土の可能性が見込まれることからそのまま掲載した。

以下では、大分県下の岩陰遺跡等を具体的にみていくが、個々の遺跡の詳細な紹介は割愛し、いくつかの項目ごとに検討していく。なお、未調査のため詳細な状況が不明なものについては、検討の対象から除いている。

(1)　立地

立地を考えるにあたり、岩陰遺跡等に近接する平坦面との比高差をみていく。平坦面は沖積平野や河岸段丘などで、オープンサイトの遺跡が立地可能な場所である。この平坦面と岩陰遺跡等の位置との比高差により、Ａ群(比高差10m未満)、Ｂ群（比高差10～50m)、Ｃ群（比高差50m以上)、Ｄ群（周辺に平坦面なし）に分けることができる。

Ａ群

第４表　大分県下の岩陰・洞穴・洞窟遺跡

	遺跡名	所在地	立地				規模			時期								埋葬人骨数（体）						特記事項	文献
			標高(m)	比高差(＊)分類	開口方向	形態	間口(m)	奥行(m)	面積(㎡)	旧石器	縄文 草創期	縄文 早期	縄文 前期	縄文 中期	縄文 後期	縄文 晩期	弥生		早期	前期	中期	後期	晩期		
1	岩鼻岩陰	豊後高田市	160	0 A	東	岩陰	40	2	80				○	○	○	○								石鏃多数	
2	野鹿洞穴	竹田市荻町	450	12 B	南	岩陰	18	7.5	135			○	○		○	○			1			2		焼土(前期)	①
3	竜宮洞穴	竹田市荻町	460	D	南	洞穴	25	10	125			○	○		○	○		○						人骨(時期不明)	②
4	瀬目岩陰	竹田市荻町	350	30 B	—	岩陰	—	—	—				○											未調査	③
5	タヌキ洞穴	竹田市	不明	2 A	—	岩陰	—	—	—					○										未調査 集石遺構	④
6	阿蔵岩陰	竹田市	270	1.5 A	北	岩陰	—	—	—					○				○						未調査 人骨出土	④
7	鬼森洞穴	竹田市	350	20 B	—	岩陰	—	—	—							○								未調査	③
8	岩瀬岩陰	竹田市	320	20 B	—	岩陰	—	—	—				○											未調査	③
9	不動岩洞穴	竹田市	300	10 A	—	岩陰	40	3～5	160			○							○					未調査 人骨出土	⑯
10	柄々洞穴	竹田市	300	20 B	—	岩陰	—	—	—							○								未調査	③
11	下原洞穴	竹田市	300	50 B	—	岩陰	—	—	—				○											未調査	③
12	五反切洞窟	竹田市	280	20 B	—	未確認	—	—	—				○											未調査	③
13	出合洞穴	竹田市	320	20 B	—	未確認	—	—	—				○											未調査	③
14	大恩寺稲荷洞穴	豊後大野市朝地町	250	30 B	西	岩陰	12	6	72			○	○						8					集石9基	⑤
15	草木洞穴	豊後大野市朝地町	250	20 B	北	岩陰	22	6	132						○	○						2			⑥
16	田夫時洞穴	豊後大野市朝地町	450	D	—	未確認	—	—	—			○												未調査	③
17	松ヶ迫岩陰	豊後大野市大野町	200	30 B	—	未確認	—	—	—								○							未調査	③
18	こうもり穴洞穴	豊後大野市清川町	200	50 B	—	未確認	—	—	—				○											未調査	③
19	窟岩	豊後大野市三重町	200	D	—	未確認	—	—	—				○											未調査	③
20	小六洞穴	臼杵市	40	30 B	—	洞穴	—	—	—			○			○										⑦
21	岩屋洞穴	臼杵市野津町	—	—	—	洞穴	—	—	—				○												⑱
22	神野洞窟群	臼杵市野津町	200	D	—	洞穴	—	—	—	○															③
23	前高洞窟	佐伯市	30	0 A	東南	洞穴	4	10	40			○			○	○						○	○	配石炉(晩期)	⑧
24	尾津留洞窟	大分市	30	20 B	南	洞窟	—	—	—		○														⑨
25	川原田洞穴	杵築市山香町	70	3.5 A	北	岩陰	13.5	4	54			○	○	○	○	○			数体						⑩
26	成仏岩陰	国東市国東町	140	20 A	北	岩陰	20	4	80			○			○	○								集石4基(後晩期)	⑪
27	六所権現岩陰	豊後高田市香々地町	120	10 A	南	岩陰	—	—	—					○										未調査	⑫
28	岩ノ下岩陰	豊後高田市	125	3 A	北	岩陰	30	1.5～3	60			○	○	○	○	○									⑬
29	穴井戸洞穴	豊後高田市	150	50 B	—	未確認	—	—	—				○											未調査	③
30	コマノツメ	中津市三光	300	250 C	—	未確認	—	—	—	○														未調査	③
31	枌洞穴	中津市本耶馬溪	80	4 A	南	洞穴	11	9	99			○	○		○				9	40		17			⑭
32	堂ノ迫洞穴	中津市本耶馬溪	300	100 C	—	洞穴	—	—	—				○				○							未調査	③
33	清水迫洞穴	中津市耶馬溪	200	50 B	東	洞穴	6.8	12.3	83.6								○								⑰
34	若宮八幡宮岩陰	日田市	250	30 B	—	岩陰	—	—	—				○											未調査	③
35	二日市洞穴	九重町	363	3 A	南	洞穴	6	20	120		○	○	○		○				7	1					⑮

＊谷底平野等との比高差（1/25000地形図により計測したものも含んでおり、若干の誤差がある）

文献

①賀川光夫編『野鹿洞穴の研究』別府大学考古学研究報告第３輯　1973
②町田利幸ほか「龍宮洞穴遺跡概要」『ぢかたび』第15号　1975
③『大分県遺跡地図』大分県教育委員会　2008
④賀川光夫『大分県の考古学』　1971
⑤賀川光夫「大分県大恩寺稲荷洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑥賀川光夫「大分県草木洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑦賀川光夫「小六洞穴」『早水台』大分県教育委員会　1955
⑧坂田邦洋「前高洞窟遺跡の研究」『史学論叢』10　1979
⑨綿貫俊一「大分県尾津留洞窟遺跡の研究」大分県博紀要12　2011
⑩賀川光夫「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』　1967
⑪坂田邦洋編『国東町文化財調査報告書』国東町教委　1972
⑫坂本嘉弘「縄文時代」『大分の歴史』１　大分合同新聞社　1976
⑬綿貫俊一編『岩ノ下岩陰遺跡』大分県埋蔵文化財センター　2008
⑭賀川光夫ほか「原史」『本耶馬溪町史』本耶馬溪町　1987
⑮橘昌信編『大分県二日市洞穴』玖珠郡九重町教育委員会　1980
⑯鳥養孝好「消滅した岩陰遺跡」『社会部会研究集報』11　1975
⑰下田智隆「耶馬溪町樋山路所在の洞穴遺跡」『Fragments』　2000
⑱八尋実「研究室近報　岩屋洞穴遺跡」『ぢかたび』第19号　1977

岩陰遺跡等の立地場所と平坦面との比高差が少ない一群で、岩鼻岩陰遺跡、玉来岩陰、川原田洞穴、六所権現岩陰、岩ノ下岩陰、枌洞穴、二日市洞穴などがこれに該当する。岩陰遺跡等のなかで本例が最も多い。岩陰や洞穴等に居住したということを除けば、平坦面に位置するオープンサイトの遺跡とほぼ同様な立地条件にあると捉えられる。すなわち、居を構えるのに岩陰や洞穴を利用するか、平坦面に竪穴建物を構築するかという違いのみで、岩陰や洞穴という特殊性を強調しなければ、両者の間に差異はないと思われる。

Ｂ群

岩陰遺跡等の立地する場所と平坦面にやや比高差がみられるもので、野鹿洞穴、大恩寺稲荷洞穴、草木洞穴、成仏岩陰などがこれに相当する。これらの岩陰遺跡等では、平坦面から一定の高さを登らなければならず、平坦面に竪穴建物を構築した場合に比べ、その利用にやや困難を要する。しかし、多くは比高差30m以内であるため、平坦面から著しく隔絶した状況ではなく、河川での水汲み等についてもそれほど難儀ではなかったと思われる。小集団での利用を考えた場合、平坦面に竪穴建物を建築するよりは、岩陰・洞穴を利用した方が労力の節減になるし、それで足りる状況であったと思われる。

Ｃ群

平坦面との比高差が大きい一群である。平坦面から斜面をかなり登らねばならず、日常の水汲み等を考えた時に、平坦面に竪穴建物を構築する場合に比べ著しく利便性に劣る。よって、一定集団が一定期間生活を行うことを考えた場合、川に近い平坦面ではなくこのような岩陰・洞穴を選択するということは考え難い。これらをあえて利用するということは、他に特別な理由・目的があると考えざるを得ない。

Ｄ群

山地形で、近接地に平坦面がない場所に立地するものである。平坦面がないことから、複数集団が居住する一定規模の集落成立が本来的に不可能である。周辺に一定規模集落の立地可能場所を有するＡ群、Ｂ群、Ｃ群とは根本的に異なる。Ｄ群は、さらにＤ1群とＤ2群に分けられる。

Ｄ1群は川との比高差50m以内のもので、飲料水の確保などの条件を考えた時に、一定集団が一定期間生活を行うことが可能と考えられる。農耕などを目的とした平坦地の確保が取り立てて必要でない縄文時代では、このような環境でも住居を構えるのに適地であったと考えられるが、岩陰等といった地形的な制約から大中規模集落の成立は不可能である。

Ｄ2群は川との比高差が50m以上である。これらは前述したＣ群と同様、一定集団が一定期間生活を行うには極めて不適な場所である。

⑵　規模

間口等の規模について、詳細が分かる12箇所の岩陰遺跡等の状況をみてみる。

岩陰の面積は、50～135㎡である。この数値は単純に間口×奥行（奥壁から雨落ち線まで）で計算したものである。すなわち、雨に濡れない範囲の面積である。5×5mの標準的な竪穴建物の床面積25㎡と比べると、数字的には数基分に匹敵する面積である。しかし、横長であったり奥行が短かったりと、岩陰や洞穴の地形に強く規制された窮屈な利用しかできないのが現実であるため、実際に利用可能な面積は数字に示される面積に比べるとかなり低かったと思われる。

ただ、遺跡によっては広い前庭部を有するものもあり、それを有効に利用することにより、岩陰や洞窟の地形に規制された窮屈な利用から脱することも可能である。広島県帝釈峡遺跡群の名越岩陰では、岩廂直下に柱穴を掘り岩陰と一体となった住居を構築している（川越哲史　1968）。このような工夫をすれば、岩陰や洞穴を利用して、オープンサイトの竪穴建物に近い機能と規模を有する施設を構築することも可能であったことが分かる。

しかし、岩陰等における住居としての利用可能面積は、地形的な制約から自ずと限られる。そのため、複数集団が同時に居を構えるような大規模集落は成立しえない。オープンサイトは集落の規模に応じた土地の選択が可能であるが、これに対し、岩陰遺跡等の場合は単独、あるいは多くても2～3集団しか利用できない。

すなわち、岩陰遺跡等は小規模集団限定の利用にしか適さないことが最大の特徴である。

(3) 埋葬

10遺跡において人骨の出土が確認されている。出土状態が良好でなかったりするものもあり、すべてが埋葬人骨と断定されてはいない。今後、岩陰遺跡等の本格的な発掘調査が進めば、その数はさらに増加するであろう。以下、埋葬の状況を具体的にみてみる。

野鹿洞穴（賀川光夫編　1973）

洞穴は出土土器から、縄文早期、前期、後期、晩期に利用されている。埋葬人骨は4体確認されており、早期と後期に位置づけられている。後期とされる3体の人骨は撹乱により著しく乱されており、埋葬状況などは不明である。早期の1体は、墓壙内から仰臥位で確認されている。内部の面積に対し埋葬人骨数が少ないことから、墓地および居住の両面での同時利用は可能であったと思われる。なお、炉跡と考えられる焼土を中心に土器や石器などが集中して出土した前期の層からは、埋葬人骨は確認されていない。

龍宮洞穴（町田利幸ほか　1975）

出土層位が明確にされていないが、大腿骨、膝蓋骨、脛骨、腓骨などがまとまって出土している。調査者は屈葬人骨と想定している。洞穴内の極めて部分的な調査なため、洞穴内の埋葬の在り方などは不明である。

不動岩洞穴（鳥養孝好　1975）

洞穴内から、縄文時代早期の土器や貝類、獣骨とともに人骨と思われるものが少量採集されている。歯と肋骨であるが、埋葬されたものであるかは不明である。

阿蔵岩陰（賀川光夫　1971）

縄文時代中期の土器とともに人骨が採集されている。埋葬人骨の可能性が高いが、未調査のため詳細は不明である。

大恩寺稲荷洞穴（賀川光夫　1967ａ）

間口12mの岩陰の奥壁に沿って、縄文時代早期～前期の埋葬人骨が8体確認されている。1体が小児で、他の8体は成人である。岩陰の前部には9基の集石遺構がみられる。ここでは、内部の空間を目的に応じてある程度整然と区分して利用しているようである。

草木洞穴（賀川光夫　1967ｂ）

縄文時代後期に比定される2体の埋葬人骨が確認されている。両者とも円形の墓壙に埋葬されており、座位、側臥屈葬である。また、人骨には抜歯がみられたという。ここでは、内部の一部のみが墓地として利用されており、空間的には住居との同時利用は可能であったようである。

前高洞窟（坂田邦洋　1979）

第2層（縄文時代晩期）と第3層（縄文時代後期）で人骨が出土している。第2層からは、歯、上腕骨、大腿骨などが出土している。骨の状況から、壮年期の女性であろうとされている。第3層からは脛骨と椎骨がわずかに出土したのみである。両者とも出土状態が良好でないため、埋葬されたものであるか否かは確認できていない。

川原田洞穴（賀川光夫　1967ｃ）

川原田洞穴からは縄文早期～晩期の遺物が出土しているが、埋葬人骨は早期の包含層に伴い確認されている。人骨は数体分が集骨状態で出土している。このほか、撹乱に伴い出土した人骨もあるので、総数は十数体にのぼるであろうとされている。

枌洞穴（賀川光夫他　1987）

総数68体の埋葬人骨が出土している。時期的には、縄文早期のもの9体、前期のもの40体、後期のもの17体である。早期の人骨は墓壙に屈葬の状態で埋葬され、一部の人骨には遺体の一部を切断し除去したものがみられる。前期は多くの人骨が出土しているが、屈葬の遺体を墓壙に埋葬し、墓壙上面を石で覆うものなどがみられる。後期も墓壙に屈葬状態で埋葬されるが、4体合葬や母子合葬の例もある。以上のうち、早期末～前期の埋葬は洞穴全域に広がっており、洞穴が墓地に特化して利用された可能性がある。

二日市洞穴（橘昌信編　1980）

縄文時代前期の墓壙1基、早期の墓壙2基が確認された。これらの埋葬施設は北側の壁に沿うように配置され、反対側の南壁沿いには集石遺構が並ぶ。前期は1体の埋葬であるが、早期は各々3体、4体の合葬である。早期、前期の段階では、墓域と生活空間が明らかに区分されている。このほか、草創期や後期の遺物も出土しているが、埋葬遺構はみられない。

以上の遺跡の状況から、岩陰遺跡等における埋葬のあり方は次のように整理できる。

Ⅰ群

岩陰・洞穴・洞窟内全体を墓地として専用的に利用するものである。今回検討したなかでは、枌洞穴の早期末～前期段階がこれに相当すると思われる。この場合でも、前庭部を住居スペースとして利用した可能性が残る。このほかには、積極的に墓地に特化した利用は確認できなかった。よって、岩陰遺跡等が墓地空間として特化された例は、極めて少数であると思われる。

Ⅱ群

岩陰・洞穴・洞窟内を墓地空間と住居空間に区分して利用するものである。埋葬人骨が出土した大半の遺跡がこれに相当する。正式な発掘調査報告書が未刊の遺跡が多いため、埋葬人骨の位置に関する情報が少ないが、岩陰・洞穴内における埋葬位置が明らかな大恩寺稲荷洞穴や二日市洞穴の例をみると、壁に沿うように埋葬が行われている。岩陰・洞穴内における空間を意識した状況が明確に読み取れ、遺物出土の状況から残余のスペースは生活空間として利用された可能性が高い。

Ⅲ群

岩陰・洞穴・洞窟内に墓地が全く形成されず、生活空間としてのみ利用するものである。埋葬人骨が検出されていない全ての岩陰・洞穴に加え、埋葬人骨が確認された岩陰・洞穴における埋葬人骨が検出されていない層（時期）である。岩陰・洞穴の利用のなかでは、このように生活空間としてのみ利用された例が多数を占める。

⑷　利用形態

岩陰遺跡等における、遺物の量、炉跡等の遺構の在り方、埋葬の在り方等の具体的な利用の状況から、利用形態を以下のように分類して考えることができる。なお、同一の岩陰遺跡等においても、層位や時期により異なる利用形態をとることがある。

利用形態Ａ

一定期間継続して利用するとともに、同様な利用がある程度繰り返し行われる利用形態である。

炉跡と思われる明確な焼土や台石などとともに、まとまった遺物や動物遺存体等の出土がみられる。また、時として岩陰や洞穴内に生活スペースを避けるように埋葬が確認される場合もあることなど、偶発的あるいは雨宿り的な短期間の利用ではないと考えられる。遺物量や遺跡内の状況から、竪穴建物1棟分を単位とするような集団の単独ないしは複数による一定期間の利用が想定される。出土遺物において石鏃のみが多量に出土する例などもあることから、狩猟などに特化した季節的な利用の場合もあったと思われる。このような場合でも、季節ごとの定期的な利用であったと思われる。

利用形態Ｂ

短期的あるいは偶発的な利用形態である。

出土遺物が少なく、炉跡に想定される焼土や台石などは確認することができない。極めて短期間あるいは偶発的な利用であったと思われる。具体的には、少量ではあるが土器を持ち込む場合（①）と、臨時的な野営や雨宿りといった岩陰遺跡等にほとんど遺物を残すことのない場合（②）が含まれる。①は当初から一定期間の利用を想定したとも捉えられるが、利用形態Ａとは利用期間の長短や継続性の有無で区別できる。②はまさに極めて偶発的な利用で、調査においてその痕跡を掴むことが難しい場合もあるかもしれない。

3

⑴　岩陰遺跡等の諸特性

前段での検討を踏まえ、岩陰遺跡等の有する特性について再度整理する。

① 岩陰遺跡等の立地は、A群及びB群がその大半を占め、C群とD群は少数であることが分かった。A群及びB群はオープンサイトの遺跡と立地環境がほとんど同じである。岩陰遺跡等は特殊な立地環境にあると思われがちであるが、多くは近接してオープンサイトの遺跡が立地可能な場所にあり、その違いは竪穴建物に住むか、岩陰等に住むかの違いのみである。岩陰遺跡等の最大の特徴は、天然の雨避けを有する点である。雨避けの状況は様々で、そのまま手をかけずに雨風が凌げるものから、本格的な生活を行うには何がしかの雨風対策追加の必要性があるものまでみられる。緊急的、一時避難的利用はいつでも可能で、即日入居可能な優良物件である。少し手を加えるにしても、竪穴建物を新築するよりも極めて短時間で、竪穴建物に匹敵する環境を整えることができたであろう。一方、C群と一部のD群は、オープンサイトの遺跡やA群及びB群とは明らかに立地環境が異なり、水の確保などの日常生活に著しく不向きな場所にある。現在の我々の価値観で安易に判断できない側面もあろうが、これらはオープンサイトの遺跡やA群及びB群では果たすことのできない何か特別な目的をもった選地であった可能性が高い。

② 規模の面からみると、岩陰遺跡等は実際の面積に比し、その形態的な制約から利用可能面積はさらに限られる。そのため、利用可能な集団の具体的な規模は、多くの場合竪穴建物1棟分程度であったと思われ、多くても2棟分程度であろう。オープンサイトの遺跡が集団規模の状況により自由に集落地を選地できるのに対し、岩陰遺跡等では大規模集団での利用が本来的に困難なため、小規模集団に限った場合のみの選択肢となる。このことが岩陰遺跡等とオープンサイトの遺跡との最大の相違点である。

③ 岩陰遺跡等が墓地として利用される場合もある。このうち、墓地に特化した利用のⅠ群は極めて例外的で、墓域と生活域を分けて共存するⅡ群が主体であった。埋葬がみられる岩陰遺跡等においても、すべての層（時期）で確認できるわけではない。全体としては墓地を形成するⅠ群・Ⅱ群は少数で、日常的な生活の場として利用したⅢ群が大勢を占める。よって、岩陰遺跡等は基本的に通常の生活を目的とした利用が主であったと考えられ、Ⅰ群などのような限定的な特殊利用は極めて稀であったようである。一部に埋葬がみられるⅡ群についても、同一文化層内において通常の生活痕が残されていることから、墓地としては継続性のない単発的なもの、あるいは通常生活と共存するものであったと理解できる。継続性のない単発的なものは、一時的に墓地として利用する意識が存在した可能性はあるが、その意識は明確に継続されず、次の利用時は日常的な生活の場としての利用が優先されるような状況であったと考えられる（註1）。

④ 遺構・遺物について、岩陰遺跡等の立地A群及びB群では、炉（焼土）などの施設があり、台石や遠隔地からの搬入品を含む一定量の土器・石器などの遺物がみられるなど、オープンサイトの遺跡と比べても全く遜色のない状況である。時として、内容的にオープンサイトの遺跡に勝る場合もみられる。これらから、一定期間の利用とそれらが継続的に繰り返される利用形態Aが想定可能である。岩陰遺跡等は、簡易的、臨時的な利用という印象をもたれがちである。しかし、具体的な遺物・遺構の状況をみてみると、利用形態Aのような利用も多かったことが分かる。この場合、岩陰遺跡等の状況によっては雨風除けの対策が必要になるが、最初から竪穴建物を構築するのに比べれば、その手間ははるかに軽かったと思われる。オープンサイトの遺跡との相違点は、岩陰遺跡等が小集団に限った利用しかできないことであることは前述したが、オープンサイトの遺跡にも小規模な遺跡がある（註2）。このような小規模遺跡のもつ特徴は、岩陰遺跡等と変わることはなく、唯一、オープンサイトを選択した点が異なる。すなわち、利用可能な岩陰等があるかないかの違いのみであったように思われる。一方で、利用形態Bとした岩陰遺跡等の利用があるのも事実である。同じ岩陰遺跡等でも、文化層（時期）により利用形態Aであったり利用形態Bであったりすることから、その利用については岩陰遺跡等が有する諸条件に規制されるのではなく、あくまでも利用する側の都合であったと考えられる。

また、C群と一部のD群は、A群やB群と異なる利用目的に伴う選地であった可能性を想定したが、これらに属する岩陰遺跡等の調査事例がなく実態は不明である。生活用水確保の困難性などから、一般的には狩猟活動等における極めて短期間の利用や雨宿り的な偶発的利用が想定できる。狩猟活動に係る一時的な利用であっても、好条件の場合は繰り返し利用されることも多かったと思われ、この場合、繰り返しの利用という点では利用形態

Ａに近い場合もあると思われるが、1回の利用が短期間ということで利用形態Ｂとして捉えておく。一定期間の日常的な生活の可能性を想定した概念上の区分けとなるが、Ａ群やＢ群と異なり、Ｃ群と一部のＤ群の大部分は利用形態Ｂであった可能性が高い（註3）。

⑵　岩陰遺跡等と縄文時代集落

岩陰遺跡等を含む縄文時代の集落は、以下のような分類・整理が可能である。【集落1】岩陰遺跡等の利用形態Ｂや、これに相当するオープンサイトの集落である。これらは小規模で、極めて短期間のものである。【集落2】岩陰遺跡等の利用形態Ａや、これに相当する竪穴建物1基程度の規模を有するオープンサイトの集落である。竪穴建物1、2棟分程度の小規模集団によるが、一定程度の期間維持され、場合によっては継続して繰り返し利用される。【集落3】集落2の数倍程度の規模をもつ集落で、竪穴建物数棟分程度の集団が生活をする。【集落4】集落3の数倍程度の規模をもつ集落で、竪穴建物5～10棟分程度の大規模集団が生活する。以上の集落1～4の性格や具体的な関係を考えるには、縄文時代における集落、集団、定住、移動、領域等の問題整理が不可欠であるが、紙数の関係からこれらを詳細に整理することはできない(註4)。ここでは、縄文時代集落についての見通しを述べる。

集落1は短期的なもので、集落と言うよりも一時的なキャンプ地的性格をもつ。狩猟・採集活動などに伴う領域内の移動時に利用したものと考えられる。集落2、集落3、集落4で生活を営む集団の一部により形成されたもので、集団が所属する母集落が定住集落であるか否かに関わらず、冒頭に示す集落1の位置づけは変わらない。

集落2は一定期間継続して利用される小規模集落で、オープンサイトでは竪穴建物を構築する場合もある。集落2の位置づけとして2案が考えられる。①通年定住集落（集落3、集落4）から一部集団が別れ、狩猟・採集など季節的な生業のため一定期間拠点とした集落。この場合は、集落2は通年定住集落の下位集落的な位置づけとなる。②地域の生産基盤が脆弱なため、通年定住する集落は形成されず、季節などに応じ集団が領域内を巡る際に形成される集落のひとつとして捉える。地域や季節等の状況により集団規模が変化し、結果として、領域内に集落2、集落3、集落4が形成される。この場合も、比較的長期間生活する中心的な集落とそうでない集落があった可能性はある。また、1年（4シーズン）で一回りし、元の集落に戻るといった計画性のある移動であったか否か、あるいは領域の広さ、生産基盤等により、集落形成の状況や規模も異なってくる。このような中で残された集落は、集落2、集落3、集落4などの規模の大小に関わらず、上位、下位という区別は基本的にない。

集落3、集落4は、1時期に複数の竪穴建物などが存在する集落である。これらの集落の位置づけとして2案が考えられる。①通年定住集落で、生産基盤などの地域的な状況により、集落規模が異なる。集落1、集落2は、この通年定住集落の一部の集団により一時的・季節的に形成される。この場合、何をもって定住集落とするかが大きな問題となる。竪穴建物の構築をもって定住の目安とする考え方もあるが、竪穴建物をもたない旧石器時代集落と竪穴建物をもつ縄文時代集落の各々背景にある何が異なるのか、明らかにする必要があろう。また、貝塚や堅果類の貯蔵穴をもって定住の根拠とする考え方もあるが、季節的に限られた期間にのみ形成される集落により残された可能性もある。②通年定住する集落が形成されるほど生産基盤が安定してない地域で、集団が領域内を巡回するなかで残した集落である。季節などに応じた集団の離合集散があったとすれば、集落3、集落4は全集団員が集まる段階に形成された集落である可能性が考えられ、一部集団により形成されたであろう集落2とは区別される集落で、維持される期間の長さや集落内の施設に違いがあるかもしれない。

県下の縄文遺跡をみると、中期までは丘陵や台地などに立地することが多く、継続的に長期間利用される遺跡もあるが、一時期に限れば比較的小規模な場合が多い。後期になると、平野部への進出が目立ち、石組炉などを伴う定型化した竪穴建物からなる集落出現などの変化がみられるが、多くの場合、一時期の集落規模に極端な変化はないように思われる。後期後半以降になると、大野川上中流域などに大規模な集落が出現する（註5）。これらの集落からは、土掘り具である偏平打製石斧が多量に出土し、原初的農耕の存在が提起されている。この段階の遺跡である竹田市下坂田西遺跡（城戸誠編　2011）は大規模で、集落を区切る溝、広場的空間を取り囲むような竪穴建物配置など、これ以前にはみられなかった集落景観を呈する。以上のように、県下の縄文時代集落の状況は時代や地域により異なることから、先に示した集落1～4の在り方・関係についても、各々の状況に応じた理

解が必要であろう。現状において、大規模で定型化した集落が出現する縄文時代後期後半以降の大野川上中流域は、それ以前と比べ集落の在り方に大きな変化があるように思われる。

本稿では、岩陰遺跡等の理解に関係し、集落を分類し、その性格について①案や②案などの試案を示した。しかし、定住や移動の問題を含む集落の検討は、当時の社会そのものの評価につながる重要なものである。そのため、遺物、遺構、遺跡のさらなる詳細な検討を行い、慎重に検討を重ねていく必要があろう。

なお、本稿を草するにあたり、綿貫俊一氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）から岩陰遺跡等に関する様々なご教示をいただいた。

註

1　埋葬が確認できる岩陰遺跡等では、墓域が一定の空間に限定される傾向があり、同一文化層内の残余の空間から日常的な利用で残されたと考えられる土器や石器などが出土する。墓域としての利用意識は、限定的な空間のみ、あるいは一時的なものと考えざるを得ない。

2　例えば東九州における後期の例をみると、豊後高田市の蕗寺田遺跡（河野典之他編　1998）、三六田遺跡（河野典之他編　2002）、国東市安岐町吉松市場遺跡（後藤一重編　1997）、豊後大野市朝地町古市下遺跡（後藤一重他編　2014）などでは、竪穴建物跡1棟あるいは1棟相当分のまとまりが確認されるのみである。蕗寺田遺跡では、竪穴建物跡からの遺物出土は極めて少量である。

3　このほか祭祀などの目的も考えられる。いずれにしても、生活用水確保などを考えた時には、一定集団が一定期間、日常生活をするのには困難であるように思われる。ただ、現代人の安易な感覚で決めつけるのは早計であろうから、今後の調査事例の増を待ち再検証が必要である。

4　これらの問題については学史的にも様々な研究があり、現在も多くの研究者により成果が発表されている。個々の研究を紹介し、これらから現状の到達点や課題を整理した後に私見を述べるべきではあるが、スペースの関係から別稿にて改めて検討したい。

5　晩期の遺跡が集中する竹田市の菅生台地などでは、台地縁辺の湧水を中心に、縄文早期、晩期、弥生時代後期～古墳時代前期の集落が重複して存在する。縄文時代早期の範囲が、湧水のある台地縁辺に限られるのに対し、縄文時代晩期は弥生時代と同じように台地中央部まで広く展開する。縄文早期に比べ晩期の遺跡規模が格段に大きいことが分かる。

文献註

賀川光夫　1967ａ「大分県大恩寺稲荷洞穴」『日本の洞穴遺跡』

賀川光夫　1967ｂ「大分県草木洞穴」『日本の洞穴遺跡』

賀川光夫　1967ｃ「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』

賀川光夫　1971『大分の考古学』雄山閣

賀川光夫編　1973『野鹿洞穴の研究』別府大学考古学研究報告第3輯

賀川光夫他　1987「原史」『本耶馬溪町史』本耶馬溪町

川越哲史　1968「帝釈名越岩陰遺跡の第一次・第二次調査」『帝釈峡遺跡群の調査研究』3

河野典之他編　1998　『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報ＸＶ』　豊後高田市教育委員会

河野典之他編　2002　『荒尾地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第9集　豊後高田市教育委員会

城戸誠編　2011『上深迫遺跡、下坂田東遺跡、下坂田西遺跡』　竹田市教育委員会

後藤一重編　1997『吉松市場遺跡』大分県安岐町教育委員会

後藤一重他編　2014『古市下遺跡・古市上遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第74集

坂田邦洋　1979「前高洞窟遺跡の研究」『史学論叢』第10号　別府大学考古学研究室

橘昌信編　1980『大分県二日市洞穴』玖珠郡九重町教育委員会

鳥養孝好　1975「消滅した岩陰遺跡」『社会部会研究集報』11

町田利幸ほか　1975「龍宮洞穴遺跡概要」『ぢかたび』第15号

八幡一郎他　1967『日本の洞穴遺跡』

第５章　付章

１　岩鼻岩陰遺跡出土の動物遺体

西本豊弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）

岩鼻岩陰遺跡で出土した動物遺体は、長さ1cm以下の小さなものが大部分であった。それらは焼けて割れたものが大部分であったが、歯のエナメル質が残っているものや焼けていない骨片もあることから焼かれずに捨てられたものもあったと思われる。割れ口はスパイラルではなく枯れ枝を割った状態のものが多いことから、後世の縄文人の居住により撹乱されて小さく割れたものが多いと思われる。資料には、発掘時点でナンバーを付けて取り上げられたものと、土壌を「ふるい」にかけて採集された骨片がある。筆者は長さ2mm以上の破片を約10,000点まで数えたが、おそらく出土量は数万点以上であろう。そのため出土地点を適当に選んで、そこで採集された動物遺体を同定し、その結果を地区ごとに表に示した。

まず、貝類ではアカニシと種不明の海産二枚貝片1点が見られた。二枚貝は大きなミルクイではないかと思われるが種は決められなかった。魚類ではエイ類・タイ類・ヒラメの椎骨が1点ずつ見られた。メジロザメ科？は、椎骨1点と歯の破片である。歯はすべて鋸歯のあるタイプで、すべて小さなものであった。ホホジロザメの可能性もあるが、メジロザメ科？としておくこととした。鳥類もごく小量みられたが種は同定できなかった。

動物遺体の主体は哺乳類であり、ニホンイノシシ・ニホンジカ・ニホンカモシカ・ニホンザル・ニホンオオカミ・ニホンアナグマ・タヌキ？・ムササビが認められた。イノシシが最も多く、幼獣・若獣・成獣・雌雄など様々な個体が含まれていた。シカは少ないがカモシカがみられた。シカとカモシカの臼歯はバラバラになると種の区別が難しいので、シカはもう少し多いかもしれない。オオカミは上顎第3切歯1点と下顎第Ｉ後臼歯1点である。第Ｉ後臼歯は後部が欠けているが、おそらく長さ25mm程度であり、ニホンオオカミであることは間違いない。アナグマも上顎犬歯と上顎の第4前臼歯と第Ｉ後臼歯の3点が確認された。タヌキ？とした犬歯は、現生タヌキよりも少し細いのでタヌキ？とした。ニホンザルは歯が数点認められたが、大きさから見て雄が大部分である。雄の「離れザル」を主体に捕獲していたと思われる。

以上、動物遺体の内容を紹介したが、イノシシの小さな骨片が多く、イノシシが残りやすかったのかも知れない。焼骨が多いことも特徴である。調理の時に焼かれたものも多いと思われるが、よく焼かれていることから意図的に儀礼に伴って焼かれたものが多いのではないかと思われる。

この遺跡は、石鏃が多く出土し、様々な動物種が出土することからハンティング・キャンプとして用いられたことが推測される。しかし、海の魚も出土していることから、たんなるキャンプ地ではなく交通の要所という意味もあったのかも知れない。また、この場所の利用の目的は時期によって異なっていたのかも知れない。この問題は石器などの人工遺物や遺構の内容を考慮して推測されるであろう。

表1．岩鼻岩陰の動物遺体

Ⅰ．貝類

C4区　海産二枚貝片．C17・18区．アカニシ

Ⅱ．魚類

A3区．タイ類椎骨(クロダイまたはマダイの中型？)

A4区．メジロザメ科？歯

B6区．メジロザメ科？歯・ヒラメ椎骨(体長30ｃｍ程度の小型)

C11区．メジロザメ科？歯・エイ類椎骨

C16・17区．メジロザメ科？歯

Ⅲ．鳥類

B4区　種不明中足骨近位部

B6区　種不明左脛骨遠位部・指骨

Ⅳ．哺乳類

1．A3区

イノシシ右上Ｉ3？・♀左下C・♀右下C・右下Ｉ1・左上腕骨・右上腕骨幼獣・左とう骨近位部2・右とう骨近位部・中手骨または中足骨・末節骨4

シカ右上P2・左上P4・左とう骨近位部

サル右上Ｉ1雄・右上Ｉ2雄♀？・右上M3雄老獣

オオカミ右上Ｉ3・アナグマ右上M1老獣・タヌキ？左上C

2．A4区

イノシシ左下Ｉ2若獣・右下C雄・中節骨・下乳切歯片

シカ右下Ｉ2～C・中節骨

サル右下P2雌？・左下P3雄

3．B1区

イノシシ右尺骨若獣

4．B2区

イノシシ左上P3・シカ中節骨

5．B3区

イノシシ右上Ｉ1・右上P3？・右下P3・右上M3右下顎関節突起・右肩甲骨・右とう骨近位部大腿骨頭・中手骨または中足骨2・中節骨・末節骨

シカ左下P4・左とう骨近位部・末節骨

カモシカ角芯

サル左上M1雄老獣

アナグマ右上C

6．B4区

イノシシ右上M1幼獣・左下P2

シカ左上P2

アナグマ右上P4

ムササビ？左上腕骨近位部

小型獣基礎節

7．B6区

イノシシ右上Ｉ2・右上M1・右下ｉ1・右下P1

シカ角先・中足骨中間部・基節骨・末節骨
カモシカ右距骨
ムササビ切歯片・臼歯
中型獣前臼歯

8．B13区
イノシシ右上M3・右下M3

9. B14区
イノシシ左下顎骨（M23）M3前部のみ摩耗

10. B15区
イノシシ左上顎骨（M3）老獣・左上m4・右下ｉ2・左下顎枝・左肩甲骨

11. C2区
イノシシ左上M3

12. C4区
サル右下M1雄老獣

13. C8区
イノシシ右上P3未出歯
サル右下P4雄・左下M2雄
オオカミ右下M1(後端欠損・現存長24.1・推定長25±・中央幅9.3　単位)

14. C11区
イノシシ左上M3若獣小型(長さ28.5)・右上M3・中手骨または中足骨
シカ歯片

15. C12区
シカ破片1個分

16. C15区
イノシシ左上P3若獣・右上P4・中節骨
サル？歯片2・サル？とう骨片

17. C16・17区
イノシシ歯片

18. C18区
小型獣中手骨または中足骨片

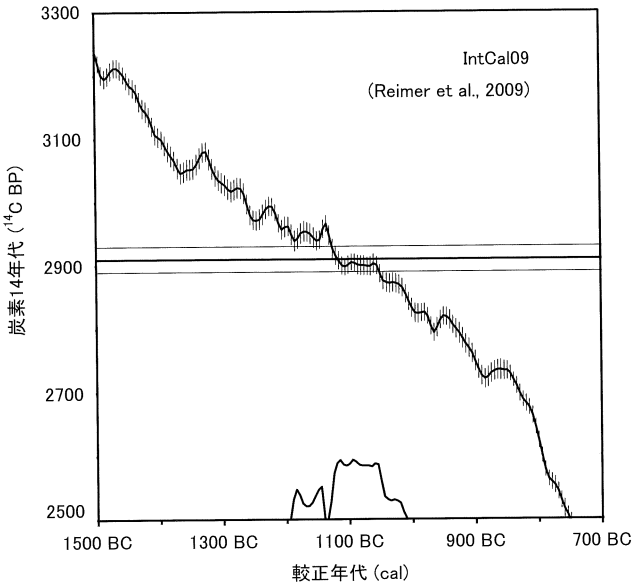
19. 西ベルト
イノシシ右上P3？未出歯
シカまたはカモシカ左上P4小型

20. トレンチ
イノシシ左距骨
シカ右踵骨

21. 地点なし
イノシシ右踵骨
中型陸獣右寛骨片若獣

注 1. 数量の記載のないものは1点。
2. 年齢の記載のないものは成獣。
3. 歯の記号は以下の通り(歯の番号は歯の順番)。Ｉ：切歯　ｉ：乳切歯　ｍ：乳臼歯　Ｃ：犬歯　Ｐ：前臼歯　Ｍ：後臼歯

ると、1195-1140calBC（17.1%）、1130-1015calBC（78.3%）である（図2）。δ ^{13}C値の測定は加速器の数値で参考値であるが、-26.87±0.23‰で異常は認められない。



試料番号	OIMB13-3				
機関番号	PLD-7536				
炭素14年代	2910	±	20	^{14}C BP	
較正年代	1195 cal BC	-	1140 cal BC		17.1%
	1130 cal BC	-	1015 cal BC		78.3%
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
	-		-		-
					95.45%
中央値	1100 cal BC				
最頻値	1095 cal BC				

図2　測定試料の較正年代

4　測定結果について

これまで縄文晩期土器についての年代測定は縄文時代の中では比較的多く実施されている。大分県域では大分川川底（上菅生B式：2940±40BP：IAAA-41090）、玉沢地区条里跡遺跡（上菅生B式、2905 ± 30BP(MTC－07427)・2955 ± 30BP(MTC－07426)・2945 ± 35BP(MTC－07428)）などの測定例がある（藤尾・小林2006）。今回、得られた測定値は、それらと近似する測定値である。

近年の研究では、炭素年代で、2990-2940BP頃に入佐式、2955-2905BP頃に上菅生B式(古)、2910-2810BP頃に黒川式（古・新）と（藤尾2014）とされている。なお、入佐式に先行する天城式（後期終末）も上小田宮の前遺跡で3190±40、3160±40、3110±40、3050±40、3040±40、2960±40BP（西本編2009）の測定値がある。これらのことから、今回得られた測定値は、晩期の測定値と判断される。

本稿の測定結果は、「基盤研究(B) 25284153炭素14年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築-環境変動と文化変化の実年代体系化」（代表小林謙一）の成果の一部である。暦年較正については今村峯雄、坂本稔の方法に従った。本実験にあたり、江田豊氏・後藤一重氏・高橋信武氏には資料調査から分析まで、さまざまなご配慮をいただいた。また、国立歴史民俗博物館・学術創成研究グループ、北海道大学埋蔵文化財調査室、犬島貝塚調査保護プロジェクトチーム、高橋徹、綿貫俊一の諸先生、諸氏には資料調査や位置づけについて、ご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げたい。

補注1　土器付着物については下記の方法で処理した。

(1)前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器付着物については、顕微鏡等で確認し、不純物を除去した。さらに、アセトンに浸け浸透し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回）し、さらにアルカ

リ溶液(NaOH、1回目0.1N、3回目以降1N)でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回以上行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回（1N-HCl 1時間）を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した（4回)。

⑵二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼（二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

⑶グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミ製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

補注2　測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの^{14}CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した14C年代（モデル年代）であることを示す。^{14}C年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68％信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の^{14}C/^{12}C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した^{13}C/^{12}C比により、^{14}C/^{12}C比に対する同位体効果を調べ補正する。^{13}C/^{12}C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの^{13}C/^{12}C比）に対する千分率偏差δ^{13}C(パーミル，‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる^{14}C/^{12}C比によって補正する。補正した^{14}C/^{12}C 比から、^{14}C年代値（モデル年代）が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも^{14}C/^{13}C/^{12}C比を正確に反映しないこともあるため、パレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal04（14C年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版）(Reimer et al 2004）と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定値確率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムRHCal（OxCal Programに準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95％信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦　cal BCで示す。( ) 内は推定確率である。

《参考文献》

藤尾慎一郎・小林謙一2006「大分市玉沢条里遺跡出土土器に附着した炭化物の炭素14年代測定」『玉沢地区条里跡第7次発掘調査報告』pp.1290140、大分市教育委員会

藤尾慎一郎2014「西日本の弥生稲作開始年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第183集、pp.113-143、国立歴史民俗博物館

西本豊弘編2009『弥生農耕の起源と東アジア』国立歴史民俗博物館

山本直人2007『文理融合の考古学』高志書院

Reimer, Paula J.et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP　Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).

Stuiver,M., Reimer,P.J., Bard,E., Beck,J.W., Burr,G.S., Hughen,K.A., Kromer,B., McCormac,F.G., v.d.Plicht,J., and Spurk,M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon,40(1), 1041-1083

3　岩鼻岩陰遺跡出土の石製装身具の化学分析

大 坪 志 子（熊本大学埋蔵文化財調査センター）

遺跡の所在と性格

遺跡名：岩鼻岩陰遺跡
所在地：大分県豊後高田市大字長岩屋字地主
調査機関：大分県教育庁埋蔵文化財センター
調査担当者：後藤一重
調査期間：平成24年5月8日～9月20日
遺跡の年代：縄文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代早期

分析資料と出土状況

分析を行ったのは、岩鼻岩陰遺跡から出土した石製装身具19点は、明緑色～暗緑色を呈する石材である。これらの石製装身具は縄文時代晩期前半の包含層の土を篩にかけて検出したものである。

試料No.	種類	出土層位	時　期	図　番　号	同定結果
IBIK－001	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 7（第146図－1747）	Cr白雲母
IBIK－002	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 1（第146図－1739）	Cr白雲母
IBIK－003	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 8（第146図－1756）	Cr白雲母
IBIK－004	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 9（第146図－1752）	Cr白雲母
IBIK－005	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-10（第146図－1754）	Cr白雲母
IBIK－006	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 5（第146図－1741）	Cr白雲母
IBIK－007	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-11（第146図－1755）	Cr白雲母
IBIK－008	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 6（第146図－1742）	Cr白雲母
IBIK－009	勾玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 2（第146図－1740）	滑石
IBIK－010	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-12（第146図－1753）	Cr白雲母
IBIK－011	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-13（第146図－1749）	Cr白雲母
IBIK－012	剥片？	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-14（第146図－1757）	翡翠(0)
IBIK－013	丸玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 4（第146図－1746）	翡翠(0)
IBIK－014	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-15（第146図－1748）	Cr白雲母
IBIK－015	管玉？	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-16（第146図－1744）	Cr白雲母
IBIK－016	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-17（第146図－1750）	Cr白雲母
IBIK－017	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-18（第146図－1751）	Cr白雲母
IBIK－018	小玉	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1- 3（第146図－1745）	Cr白雲母
IBIK－019	垂飾	C16区Ⅱ1層	縄文時代晩期前半	図1-19（第146図－1743）	Cr白雲母

分析条件

岩鼻岩陰遺跡の資料分析には、熊本大学埋蔵文化財センターの携帯型ハンドヘルド蛍光X線分析計（日本電子株式会社　米国イノベックスシステムズ社）を用いた。測定条件は電流：任意、測定雰囲気：真空、測定範囲：10mmφ、測定時間：120秒である。判定は、北九州市立自然史歴史博物館の森康氏が作成した元素組成計算シートをもとにおこなった。

石材の所見と分析結果

石材の特徴　縄文時代から古墳時代にかけて、玉の石材に利用されている緑色の石材は、クロム白雲母・ヒスイ・碧玉・滑石（蛇紋岩）・緑色凝灰岩などが挙げられる。今回、岩鼻岩陰遺跡から出土した玉類には、分析の結果クロム白雲母、滑石、ヒスイ（オンファス輝石）が使用されていることが明らかとなった。

クロム白雲母の肉眼観察上の特徴は、多くは鮮やかなやや濃いめの緑色を呈し、若干半透明で黄色の斑点や縞が入ること、石英と思われる半透明の白色部分や筋があることである。黄色の斑点や縞がほとんど無い場合や、全体的に色が薄い緑灰色のものもある。クロム白雲母を蛍光X線分析した場合に検出される主な元素は、Al（アルミ）・Si（ケイ素）・K（カリウム）・Cr（クロム）・Ti（チタン）・Fe（鉄）で、KとCrのピークがクロム白雲母の特徴である。

滑石は淡いクリーム色や濃い茶色、青灰色・暗緑色など多様な色彩を持つ。また、蠟のような脂質光沢が特徴である。滑石を蛍光X線分析した場合に検出される主な元素は、Mg（マグネシウム）・Al（アルミ）・Si（ケイ素）・Ca（カルシウム）・Cr（クロム）・Ti（チタン）・Fe（鉄）で、MgとAl とSiとFeのピークが滑石の特徴である。

ヒスイは、「軟玉」「硬玉」の二つを含むが、考古学ではほとんどの場合後者を指している。「硬玉」はヒスイ輝石を90％以上含む岩石のことで、半透明である。その中に様々な鉱物元素が入ることで明緑色～緑色やオレンジ色・紫色の部分が生じる。蛍光X線分析によってヒスイを分析した場合に検出される主要元素はNa（ナトリウム）・Si（ケイ素）・Ca（カルシウム）・Fe（鉄）である。このうち、Naの検出がヒスイか否かの重要な要素となり、ほかCaのピークも特徴である。

分析の結果　岩鼻岩陰遺跡出土の玉類のうち、クロム白雲母に該当する資料は、IBIK-001～008、010～011、014～019の16点である。石材の肉眼観察による特徴は次のとおりである。全体的にこれらのクロム白雲母は、半透明の緑色を呈しており、縄文時代の玉類に見られるクロム白雲母のような濃い緑ではない。また、黄色の斑点や筋も含まれないという特徴がある。この中で、IBIK-009の勾玉で、濃緑と薄い黄緑灰色が縞状になっている。一見滑石のようである。クロム白雲母は変成岩帯で産出し、滑石や蛇紋岩と近接する場所で生成されると考えられる。熊本県太郎迫遺跡の事例では、一つの玉石材を表裏2か所測定したところ、クロム白雲母と滑石の結果を得ており、クロム白雲母と滑石は非常に生成箇所が近接していることが分かる。IBIK-002は滑石に非常に近いクロム白雲母といえる。IBIK-018の小玉は、前体の半分を緑色部分が占めるが半透明の淡い緑で、黄色の斑点が含まれる。半分は半透明の白色部分である。アルミのキラキラとした煌きも観察できる。一見、ヒスイと誤認しやすいクロム白雲母である。このようなクロム白雲母の類似例は、鹿児島県上加世田遺跡や桐木耳取遺跡で確認されている。

滑石に該当するのは、IBIK-009である。暗緑灰色を呈し、独特の脂質光沢がある。

ヒスイに該当するのは、IBIK-012・013の剝片？と丸玉である。これらは、オンファス輝石で、ヒスイに近い鉱物である。オンファス輝石はヒスイ輝石の鉱物の一部が置き換えされ、マグネシウムとカルシウムに富み、アルミニウムやナトリウムが乏しいという特徴がある。ヒスイの緑色分がオンファス輝石であることも確認されている。岩鼻岩陰遺跡の玉類を製作した人はそのような区別をしたとは考えられないため、ヒスイとしておく。

IBIK-012は黒色に近い緑色で、IBIK-013もいわゆるヒスイの明緑ではなくクロム白雲母に近い緑であり、透明性も低い。

玉類の所見

クロム白雲母と判定された玉類の多くは、湾曲した面を持っており、片面に溝があることから管玉を再利用したものと考えられる。

垂飾　管玉を半裁したものや破片に、直径1㎜前後の小さな孔を一つ穿孔して垂飾としている。管玉の痕跡をよく残しているのは、IBIK-3・10・16・19（図1-8・12・17・19）である。研磨をおこない、溝（管玉の孔）を消してしているのがIBIK-1・7・11・14・17（図1-7・11・13・15・18）である。IBIK-7・11は、管玉として利用する際に生じる玉ズレが観察でき、管玉の端部であったことが推察できる。

勾玉　IBIK-002（図1-1）の勾玉は、全体的にゆるい曲線で三日月のようである。IBIK-006（図1-5）は頭部の腹部側が直線的に作られており、縄文時代後晩期に九州一円に盛行するいわゆる「コ」の字勾玉の特徴を呈しているが、当該期の勾玉の事例としてはやや小さい。使用する際の紐ズレによる孔の変形は見られないが、孔の周囲が両面ともすり減り薄くなり、表面の光沢も他所と異なる。両側に玉が連なる形で使用し、玉ズレの結果このような変形が生じたと考えられる。IBIK-008（図1-6）の勾玉は、片面に管玉の孔の痕跡が明瞭に残っている。これは、管玉をある程度の長さで半裁し、頭部と尾部を加工して勾玉に整形したものと考えられる。滑石製のIBIK-009（図1-2）の勾玉は、頭部が欠損しているが、両側からの穿孔の跡から、勾玉と分かる。頭部から尾までがほぼ同じ幅で、尾はすぼまらない。腹部は孔のような曲面で、頭を左に向けた時に上となる面は、腹部を中心に臼状に窪み回転痕が確認できる。このため、この勾玉は滑石製小玉の転用であることが分かる。厚さが5～8㎜程度、直径が12㎜前後の大きめの滑石製小玉は、縄文時代熊本平野で多く見られる。

管玉　IBIK-015（図1-16）は本遺跡唯一の管玉である。穿孔がなく、破損面に研磨が無い。また、再加工されたと思われる他の管玉の本来の大きさと比較すると非常に小型である。両方の端部もこの大きさで管玉として利用されたと考えられる形状をしており、穿孔もこの大きさの管玉に対するものである。このため、管玉と判断した。

小玉　IBIK-018（図1-3）の小玉は、典型的な縄文時代のクロム白雲母製小玉である。孔が紐ズレにより、半透明白色部分方向に延びて涙形に変形している。半透明白色部分を上にして垂下されていたと考えられる。孔の周囲も臼状に凹み光沢が著しい。断面も台形に変形しており、顕著な玉ズレの痕跡を示している。玉ズレの状態から両側には勾玉ではなく、また同じような小玉でもなく、管玉が連ねられていたと考えらえる。

丸玉　IBIK-013（図1-4）の丸玉は直径が約5㎜で、10㎜前後ある縄文時代の丸玉と比較すると非常に小さい。ヒスイ製丸玉の特徴というべき、断面V字状の孔が穿孔されている。開く側の穴の周囲は光沢があり玉ズレしているかもしれないが、大きな変形は見られない。すぼまる薔側の穴の周囲も光沢があり玉ズレしていると考えられるが、変形はない。いずれも、紐による変形も見られない。

本遺跡出土資料の意義と課題

岩鼻岩陰遺跡から出土した玉類の多くの石材がクロム白雲母であることが一つの大きな注目点である。クロム白雲母は、上述したように九州においては縄文時代後晩期に玉石材として重用されるが、黒川式期以降には使用が途絶える石材である。そのため、クロム白雲母を利用している点では、これら玉類の帰属時期は縄文時代後晩期と考えらえる。

しかし、これらを縄文時代の玉とするには以下のとおり、いくつかの疑問点が挙げられる。一つは、全体的に小さな形状を嗜好している点である。縄文時代の玉類において、このように細かい破片の垂飾の形態を管見では知らない。今回は、かなり小さいものを篩いにかけて注意深く丁寧に検出しており、これまでの各地の調査では見逃された可能性もなくはないであろうが、管見では初の事例である。

IBIK-015は明らかにこの大きさで製作され、利用された管玉であり、IBIK-019もIBIK-015程度の管玉の再利用である。クロム白雲母製管玉のなかで、管見では最小クラスである。直径が4㎜前後、長さ6㎜程度の小さな管玉は、長崎県中村遺跡と大分県求来里平平島遺跡の2例がある。中村遺跡は弥生時代の石棺墓出土の事例である。

次に、今回出土した垂飾に穿孔された孔の大きさは、直径が1㎜前後と非常に小さく、縄文時代後晩期の玉類では、類例を知らない。縄文時代後晩期の玉類は、ヒスイ製以外のものは、ほとんどが両側から穿孔される。両側からあけられた孔が繋がる分が1㎜程度の小さな孔であることはあっても、いわば入り口にあたる部分の孔の直径は最小でも1.5～2㎜程度の大きさがある。本遺跡の玉の穿孔技術は、他の縄文時代後晩期玉類の穿孔技術とは異なると思われる。

このようにみると、本遺跡の玉類は石材の点では縄文時代後晩期の玉と考えられるが、形態や最終的に残された技術的特徴においては後世に縄文時代後晩期の玉を再利用した玉類である可能性が高い。現在、管見として確認している約290点のクロム白雲母製管玉のなかで、岩鼻岩陰遺跡で再利されたほどの小さなものは上記の2例である。このような小型の事例が、今後縄文時代後晩期の管玉の通有の形態と認識できる程度に増加する可能性は低いであろう。それは、穿孔技術とも連動するからである。

縄文時代後晩期のクロム白雲母製玉は、古墳出土の玉に混入している事例が散見でき、おそらく後世に拾われるなどの偶然の機会に使用されたと考えられる。そうした中、後世にクロム白雲母製玉もしくは原石を加工した遺跡がある。大分県若宮八幡遺跡の古墳時代のＳＨ135号竪穴住居址からは、多量の玉類が出土しているが、この中にクロム白雲母製小玉の未製品が含まれている。実見・分析は未実施であるが、カラー写真で見る限りクロム白雲母であろう。面取りし、穿孔と研磨を残す段階のものである。ある程度の大きさをもつ勾玉か素材（原石）を利用したと考えらえる。

岩鼻岩陰遺跡の事例は、縄文時代後晩期の玉類の再利用が明確に確認できる。また、時代は異なるが若宮八幡遺跡に続き大分県でクロム白雲母が縄文時代後晩期以降に利用されたことを示す2つ目の事例となる点で、重要である。クロム白雲母の利用は、現況では縄文時代晩期前葉で終息すると考えらえるが、引き続き利用される地域があるのか、その場合に背景は何かなど、大きな課題を提唱する可能性がある。クロム白雲母という石材の流通の追跡調査の対象を、縄文時代に限るべきではないことを強く示唆する資料として、本資料の出土意義は大きい。

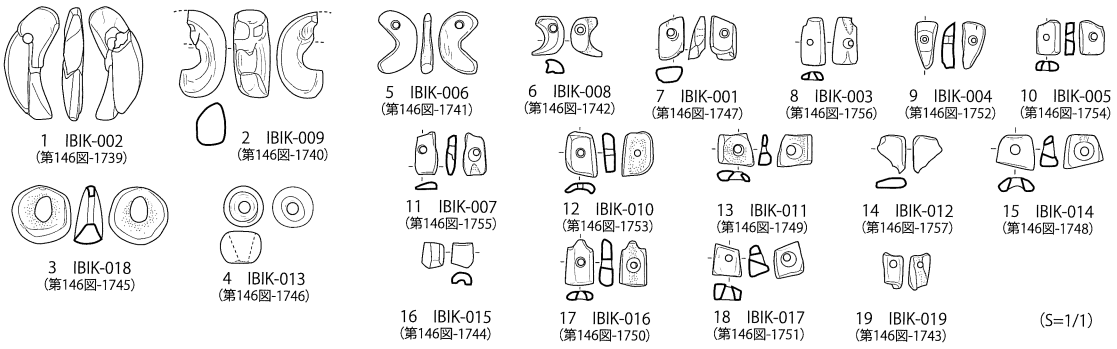


図1　岩鼻岩陰遺跡出土玉類実測図

図2-1　IBIK-001の
蛍光X線スペクトル

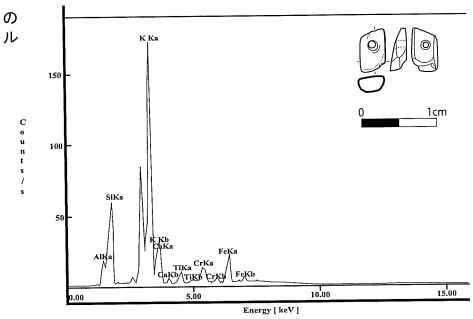


図2-2　IBIK-002の
蛍光X線スペクトル

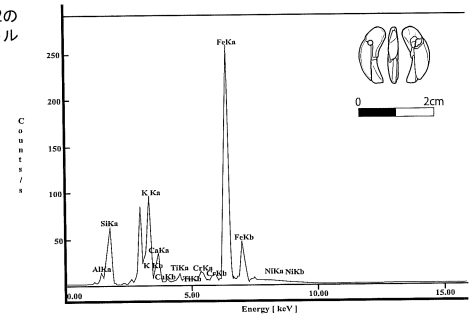


図2-3　IBIK-003の
蛍光X線スペクトル

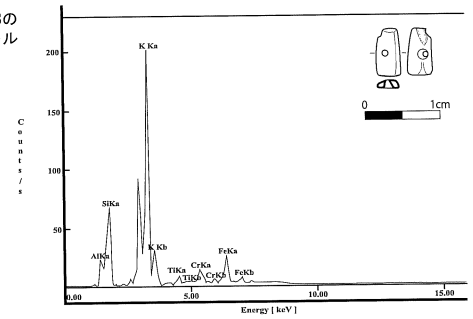


図2-4　IBIK-004の
蛍光X線スペクトル

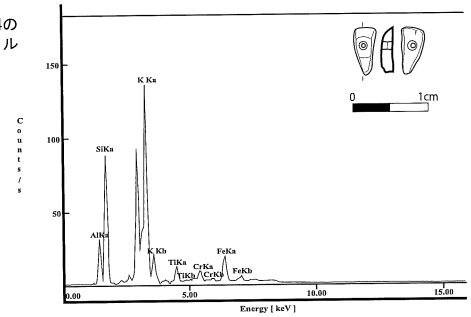


図2-5　IBIK-005の
蛍光X線スペクトル

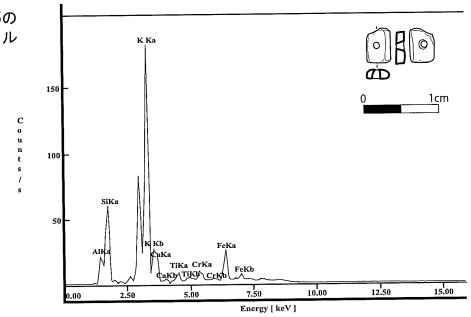


図2-6　IBIK-006の
蛍光X線スペクトル

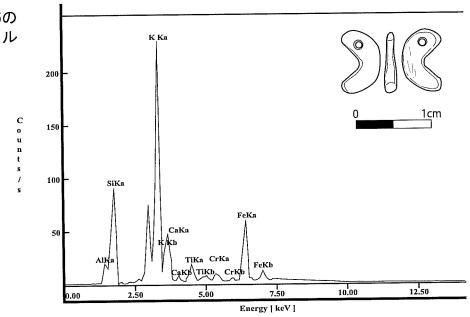


図2-7　IBIK-007の
蛍光X線スペクトル

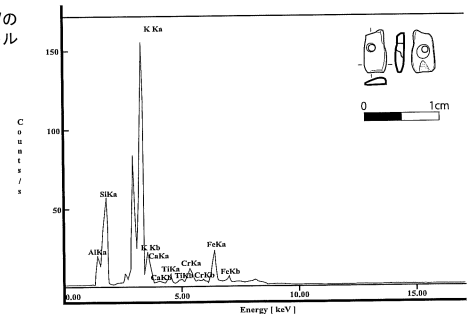


図2-8　IBIK-008の
蛍光X線スペクトル

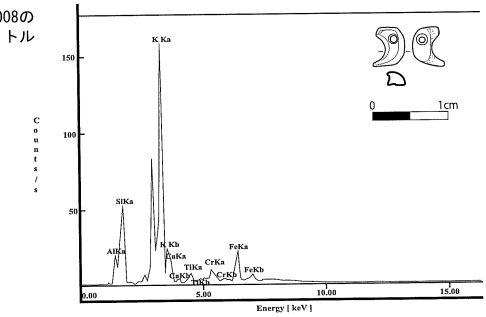


図2-9　IBIK-009の
蛍光X線スペクトル

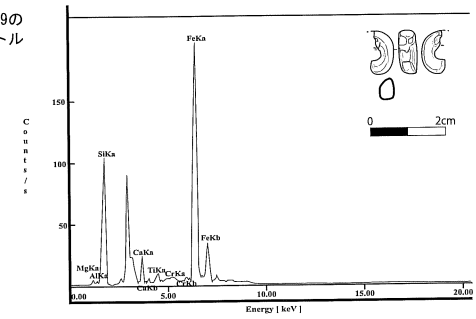
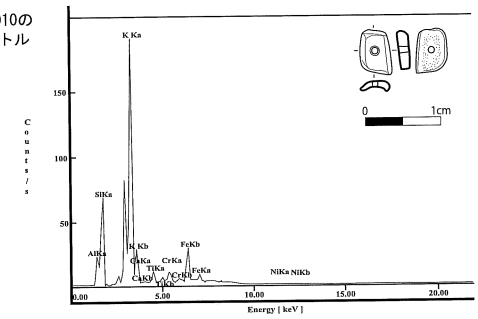


図2-10　IBIK-010の
蛍光X線スペクトル



実測図は002・010はＳ＝1/2　他はＳ＝1/1

図2　岩鼻岩陰遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル（1）

図3-1　IBIK-011の
蛍光X線スペクトル

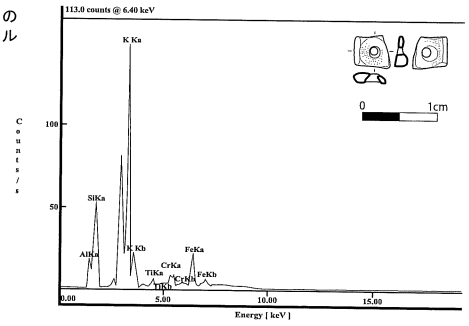


図3-2　IBIK-012の
蛍光X線スペクトル

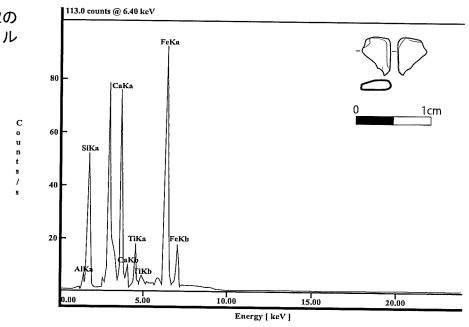


図3-3　IBIK-013の
蛍光X線スペクトル

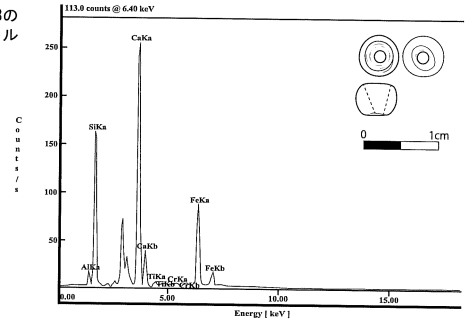


図3-4　IBIK-014の
蛍光X線スペクトル

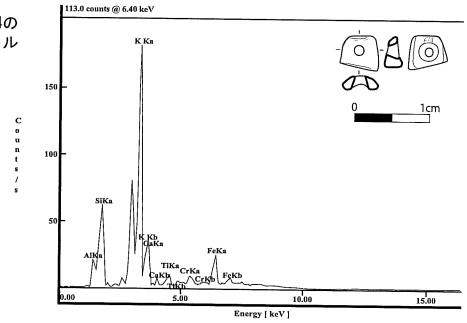


図3-5　IBIK-015の
蛍光X線スペクトル

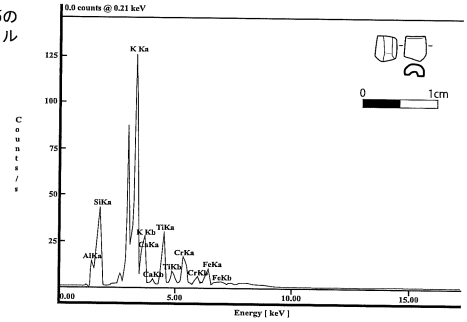


図3-16　IBIK-016の
蛍光X線スペクトル

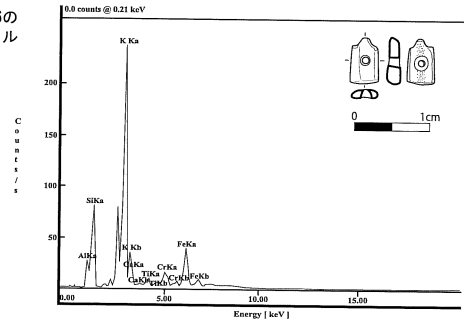


図3-7　IBIK-017の
蛍光X線スペクトル

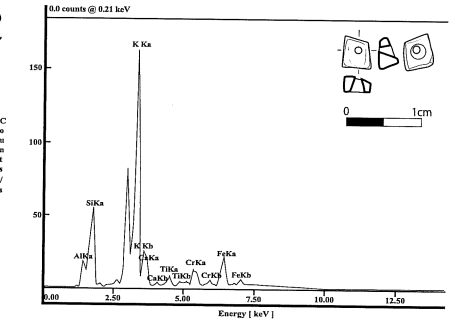
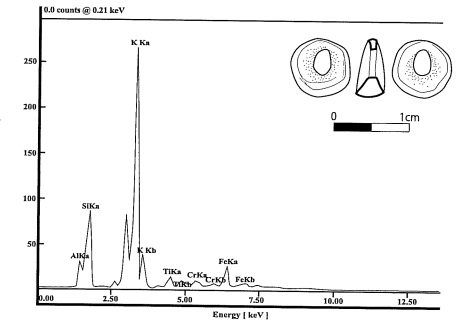


図3-8　IBIK-018の
蛍光X線スペクトル



実測図ははＳ＝1/1

図3-9　IBIK-019の
蛍光X線スペクトル

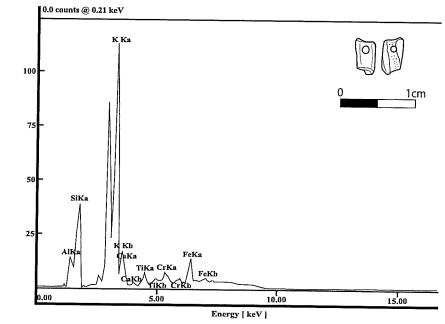


図3　岩鼻岩陰遺跡出土玉類の蛍光X線スペクトル（2）

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表①

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量（ ）は復元値 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	胎土 角閃石	長石	石英	その他	備考
14	1	B1	深鉢	縄文中期				縄文 ヨコナデ 沈線	ナデ	にぶい赤褐色	○	○	○	○	
	2	C1	深鉢	縄文中期				浅い沈線 ナデ	ナデ	浅黄色	△		△		
	3	B1	深鉢	縄文中期				ナデ 撚糸文	ナデ	にぶい橙～明褐灰色	△	△	○		
	4	B1	深鉢	縄文中期				ヨコ方向の条痕	縄文 条痕 刻目	灰褐色	△	△	△	○	
	5	C1	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文	ナデ 縄文	黄褐色			△	△	金雲母少し
	6	C1	深鉢	縄文中期				条痕後ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		△	
	7	C1	深鉢	縄文中期				連続刺突文	ナデ	明褐色		△		△	
	8	C1	深鉢	縄文中期			(7.2)	ナデ	ナデ	黄褐色	△	△			
	9	C1	深鉢	縄文中期			(8.4)	ナデ	ナデ	明黄褐色	△			△	
17	18	B2/C2	深鉢	縄文中期				ナデ 素突帯 縄文	ナデ	褐灰色	△	△		△	金雲母少し
	19	A2	深鉢	縄文中期				2枚貝殻文 素突帯	ナデ	黒褐色			△		金雲母含む
	20	B2	深鉢	縄文中期				ヨコナデ 縄文 沈線 素突帯	ナデ	黒褐色	△	○	○		金雲母やや多い
	21	C2	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	黒褐色	△			△	
	22・23	B2/A4	深鉢	縄文中期	(22.0)		(22.8)	縄文	ヨコ方向の条痕	褐色～灰褐色	△	○	△	○	
	24	C2	深鉢	縄文中期				条痕	縄文 条痕	暗灰黄色	△			△	
	25	C2	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ 素突帯	板かヘラでのナデ	橙色	△	△		△	
	26	C2	深鉢	縄文前期				条痕	条痕	黒褐色	△	△		△	
	27	C2	深鉢	縄文前期				浅い刻み 沈線	ナデ	黄灰色	△	△		△	
21	38	B3	深鉢	縄文後期				沈線 疑似縄文 研磨	ヨコ方向のナデ	にぶい赤褐色～暗赤褐色	○	○	△	△	
	39	C3	甕	弥生早期				ヨコナデ 刻目突帯 条痕	条痕	にぶい黄橙色	△		△		
	40	D3	深鉢	縄文			(7.8)	条痕のちナデ	ナデ	橙色	○	○	△	○	
	41	B3	深鉢	縄文中期				突帯のみ刻み	ナデ 刻み	にぶい褐色	△	△	○		金雲母少し
	42	B3	深鉢	縄文中期				突帯のみ刻み	ナデ 刻み	黒褐色	○	△	△	○	金雲母少し
	43	B3	深鉢	縄文中期				ナデ	刻み	灰黄褐色～黒褐色	△	△		○	
	44	A4/A9	深鉢	縄文中期				縄文 素突帯	縄文 ナデ	淡黒褐色	○				
	45	A3	深鉢	縄文中期				縄文 素突帯	条痕	赤褐色～黒褐色	△		△		
	46	B3	深鉢	縄文中期				タテ方向の沈線状のもの	ナデ 磨滅	にぶい褐色～暗褐色	△	○			金雲母多い
	47	C3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	にぶい黄橙色	△			○	
	48	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	灰褐色					
	49	A3	深鉢	縄文中期	(26.0)			縄文	条痕	灰褐色					
	50	A3	深鉢	縄文中期				条痕のち沈線	沈線文 ナデ	黄褐色	○		○		
	51	B3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色～灰褐色	△	○	△	○	
22	52	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕						
	53	A3	深鉢	縄文中期				縄文 穿孔	ナデ	黄褐色	△		△		
	54	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	灰褐色					
	55	A3	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	褐色	△	△	△		
29	146	B4	甕	弥生早期				刻目突帯	ナデ	黒色	△	○	△	○	
	147	B4	深鉢	縄文				ナデのち刻み	ナデ	淡黄色		○		△	
	148	B4	深鉢	縄文				ナデのち刻み	不明	にぶい黄橙色		△		△	
	149	D4	深鉢	縄文晩期				条痕のち細い沈線	ナデ	灰白色	○	○	△	△	
	150	C4	深鉢	縄文晩期				沈線	研磨	黒褐色	△				
	151	C4	深鉢	縄文晩期				沈線	研磨	灰黄色	△				
	152	D4	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	△	△	
	153	C4	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	灰褐色	△				
	154	C4	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	灰褐色	△				
	155	D4	浅鉢	縄文晩期				ナデ ヨコナデ	ナデ	淡赤褐色	○	○	△	△	
	156	B4	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	ナデ	橙色	△	△		○	
	157	C4	深鉢	縄文後期				研磨 縄文 沈線	研磨	にぶい褐色					
	158	B4	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ	ナデ	橙色～にぶい褐色	○		△	△	
	159	C4	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ	ナデ	橙色				○	
	160	B4	深鉢	縄文後期				ナデ後沈線	ナデ	淡黄色	△	○	○	○	金雲母多い
	161	B4	深鉢	縄文中期				沈線	ナデ	浅黄橙色			○	○	
	162	B4	深鉢	縄文				条痕 ナデ	ナデ	明褐色～灰褐色	△	○		○	
	163	B4	深鉢	縄文中期				条痕	ナデ	にぶい黄褐色～黒褐色	△	○		○	金雲母多い
	164	B4	深鉢	縄文中期				縄文	貝殻条痕	にぶい黄橙色		△		○	
	165	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 刺突文(巻貝)	条痕	褐色	△	△	○	○	
	166	B4	深鉢	縄文中期				条痕	ナデ 指押さえ	にぶい橙色				△	
	167	D4	深鉢	縄文中期			(8.4)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	168	D4	深鉢	縄文中期			(8.0)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○		
	169	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	にぶい褐色～灰褐色		○	○	○	金雲母多い
	170	B4	深鉢	縄文中期				撚糸文 沈線	ナデ	淡橙色～黒褐色	△	△		○	
	171	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 口縁部は棒状工具による押さえ	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
	172	B4	深鉢	縄文中期				沈線 縄文	ナデ 縄文	にぶい橙色～褐色	△	△	△	○	
	173	B4	深鉢	縄文中期				縄文	条痕	にぶい橙色～褐色		○		○	
	174	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	淡黄色～黄褐色	○	○		△	
	175	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ 磨滅	黄橙色～にぶい黄橙色	○	○	△	△	176と同一個体
	176	B4	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ 磨滅	黄橙色～にぶい黄橙色	○	○	△	△	175と同一個体
	177	B4	深鉢	縄文中期				ナデ	ヨコナデ	浅黄橙色	○	△	△	○	
	178	B4	深鉢	縄文中期				ナデ	ナデ	橙色			△	△	
30	179	B4	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文 素突帯	ナデ(指圧痕)	にぶい黄橙色～灰黄褐色	△	△	△	△	
	180	B4	深鉢	縄文中期				条痕	ヘラ状工具によるナデ	橙色	△	○	○	○	
	181	B4	深鉢	縄文中期			(7.6)	ナデ	ヨコ方向のナデ	橙色		△		○	金雲母少し
	182	B4	深鉢	縄文中期			(8.0)	ナデ	ナデ	橙色	△	○	○	○	金雲母少し
	183	B4	深鉢	縄文中期			(8.2)	ナデ 指押さえ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	184	B4	深鉢	縄文中期			9.6	磨滅	条痕	橙色～浅黄橙色	○	○	△	△	
	185	C4	深鉢	縄文中期				沈線	条痕	淡黄色～にぶい橙色	○		△		
	186	C4	深鉢	縄文中期				条痕	ナデ	黒褐色	△		△		
	187	C4	深鉢	縄文中期				条痕	条痕	にぶい黄橙色	△			△	
38	282	B5	甕	弥生早期				ナデ	ヨコ方向の巻貝条痕	橙色	△	△		△	
	283	D5	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	研磨	黒灰色	○	○	○	○	
	284	D5	深鉢	縄文晩期				工具ナデ	ナデ	暗灰色	△	○	○	△	
	285	D5	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	淡赤褐色	△	○	○	○	
	286	D4	浅鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	灰白色～黒灰色	○	○	○	△	
	287	D5	深鉢	縄文後期				疑似縄文 研磨	軽い研磨	黒灰色	△	○	○	△	
	288	B5	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文	ナデ	にぶい橙色～灰褐色	△	△	○	○	
	289	D5	深鉢	縄文			(8.0)	研磨	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	△	○	
	290	D5	深鉢	縄文			(10.8)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	291	B5	甕	弥生早期			(6.2)	条痕 ヨコナデ 突帯	磨滅	にぶい橙色	△	△	△	△	
	292	A5	甕	弥生早期				ヨコ方向の条痕 刻目突帯文	ヨコ方向の条痕	黄褐色～黒褐色	△				
	293	B5	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	条痕 研磨	浅黄橙色	○	△	△	△	
	294	B5	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐色	○	△		△	
	295	B5	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線 板状工具によるナデ	ナデ後軽い研磨	にぶい赤褐色～黒褐色		○		△	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表②

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
38	296	B5	深鉢	縄文晩期				ナデ 条痕 沈線	工具によるナデ	黒褐色	△	○		○	
	297	B5	深鉢	縄文晩期				ナデ ヨコ方向の板状工具ナデ	研磨	にぶい赤褐色	△	△	△	△	
	298	A5	深鉢	縄文晩期				ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のナデ	にぶい橙色	○	○			
	299	B5	深鉢	縄文晩期				ナデ 巻貝条痕	ナデ 研磨	にぶい黄橙色	○	○			
	300	B5	浅鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	研磨	橙色	○	△		△	
	301	A5/A6	深鉢	縄文後期				沈線 研磨	研磨	黄橙褐色～黒褐色	○			○	
	302	A5	深鉢	縄文後期				沈線文	研磨	橙灰褐色	△			△	
	303	B5	深鉢	縄文後期				縄文	ナデ	褐色		○	△	○	
	304	B5	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ 一部研磨	ナデ	灰褐色	○	○		△	
	305	A5	深鉢	縄文後期				不定方向の条痕 刻み	ヨコ方向の条痕	淡黄橙色	△			○	
	306	A5	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	研磨	黒褐色				○	内外上部に赤色顔料付着
	307	B5	深鉢	縄文後期				条痕 沈線文	ナデ	褐灰色	○	△		○	
	308	A5	深鉢	縄文後期				条痕 疑似縄文	条痕	黄褐色	△	△			
	309	B5	深鉢	縄文中期				ナデ 沈線 縄文	ナデ 二枚貝条痕	にぶい褐色	△	△		△	金雲母少し
	310	B5	深鉢	縄文後期				ナデ 口縁端部刻み	ナデ	にぶい褐色		△		△	
	311	B5	深鉢	縄文後期				ナデ 口縁端部刻み	ヨコ方向貝殻条痕 ナデ	灰黄褐色		○		△	
	312	B5	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	にぶい褐色～灰褐色	△	△		△	
	313	B5	深鉢	縄文中期				縄文 突帯 刻み	ヨコ方向ナデ	にぶい橙色		○	○	△	金雲母少し
	314	B4	深鉢	縄文中期				突帯 刻み	ナデ	にぶい褐色		○	△	○	金雲母多い
	315	B5	深鉢	縄文中期				ナデ 刺突文	ナデ	橙色	△			△	
	316	B5	深鉢	縄文				タテ方向条痕 ナデ 未調整	条痕	にぶい褐色～橙色	△	△	△	○	
	317	B5	深鉢	縄文後期				ナデ 突帯	ナデ	にぶい黄褐色		○		△	
	318	B5	深鉢	縄文				条痕 ナデ	ナデ ヨコ方向条痕後ナデ	にぶい橙色	○	○	△	○	
	319	B5	深鉢	縄文中期				突帯 縄文	ナデ	にぶい褐色～灰褐色	△	△		△	
	320	B5	深鉢	縄文中期				ナデ	ナデ	にぶい橙色～褐灰色	△	△		○	
	321	B5	深鉢	縄文			(6.8)	ナデ タテ方向ナデ	工具によるナデ	灰黄褐色	△	○	○	○	
39	322	C5	深鉢	縄文後期				巻貝条痕 疑似縄文	研磨	明黄橙色	△		△		
	323	C5	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ 沈線	条痕	褐灰色	△			○	
	324	B5	深鉢	縄文中期				突帯 タテ方向条痕	ナデ	灰黄褐色	○	○	○	○	
	325	C5	深鉢	縄文中期				素突帯 縄文	研磨	黒褐色	△	△			
	326	C5	深鉢	縄文中期				素突帯 縄文	ナデ	黄褐色	△		△		
	327	C5	深鉢	縄文中期				ナデ 縄文 素突帯	ナデ	浅黄橙色～褐灰色					
	328	B5	深鉢	縄文中期				ナデ 素突帯	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		△	
	329	B5	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	橙色	○	○		△	
	330	C5	深鉢	縄文中期				タテ方向板ナデ(砂粒が動く)	ナデ	茶褐色	△		△		
	331	B5	深鉢	縄文中期				ナデ	縄文 指圧痕	にぶい黄橙色～灰黄褐色	△	○	△	○	金雲母多い
	332	B5	深鉢	縄文中期			(6.0)	ヨコナデ ナデ	ナデ	灰黄褐色	△	○	△	○	銀色の雲母
	333	C5	深鉢	縄文前期	(20.0)			刺突文 条痕	条痕後ナデ	明橙色～黒褐色	○		○		
	334	D5	深鉢	縄文前期	(25.8)			ヨコ方向の条痕～ナナメの条痕	条痕	明赤褐色～にぶい黄橙色	○				
44	391	D6	甕	弥生早期				刻目突帯	条痕のちナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	392	D6	甕	弥生早期				刻目突帯 条痕	条痕	淡黄色	△	○	△	△	
	393	B6	甕	弥生早期				刻目突帯 ナデ	条痕	浅黄色	△	△	△	△	
	394	E6	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	暗灰色	○			○	
	395	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐灰色	△	△		△	外面沈線内に赤色顔料の跡
	396	B6	深鉢	縄文晩期				ヨコとタテの研磨	研磨	黒褐色	△			△	
	397	B6	深鉢	縄文晩期				研磨 ナデ後軽い研磨	ヨコとタテ方向の研磨	にぶい黄橙色	○	△		○	
	398	D6	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線 工具ナデ	条痕	黒灰色	△	○	○	△	
	399	D6	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	灰白色～黒灰色	○	○	○	△	
	400	B6	深鉢	縄文晩期				ナデ 条痕ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	△	○	
	401	B6	浅鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	研磨	暗灰色	△	△		△	
	402	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	○	○		○	
	403	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	にぶい橙色	△	△		△	金雲母少し
	404	D6	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	にぶい赤褐色	○	○	○	△	
	405	B6	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	研磨	浅黄橙色	○	△		○	
	406	B6	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		○	
	407	E6	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	ナデ	暗黄褐色～にぶい橙色	△				
	408	D6	深鉢	縄文後期				ナデ	巻貝条痕	にぶい黄色	○	○	○	○	
	409	D6	深鉢	縄文後期				口縁端部不明 ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	○	○	○	△	
	410	E6	深鉢	縄文後期				縄文 一部研磨	ケズリ状のナデ後研磨	にぶい黄橙色	○			△	
	411	E6	深鉢	縄文後期				軽い研磨 縄文	軽い研磨	暗黄褐色～橙色	○				
	412	E6	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	△				
	413	D6	深鉢	縄文後期				沈線 研磨 工具ナデ 疑似縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△	○	△	○	
	414	D6	深鉢	縄文後期				ナデ後沈線 棒状工具での刻目	ナデ	にぶい黄橙色	△	△	△	○	
	415	E6	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	灰黄褐色	△			△	
	416	E6	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ナデ	暗褐色	△				
	417	D6	深鉢	縄文後期			(7.8)	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	○	○	○	○	
	418	D6	深鉢	縄文後期			(8.0)	条痕 ナデ	条痕	赤褐色	○	○	○	○	
	419	B6	甕	弥生早期				ナデ 凹線文状(巻貝か)	ナデ	黒褐色	○	○		○	
	420	B6	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	淡黄色	△	△		○	
	421	B6	深鉢	縄文晩期				条痕	研磨	灰黄褐色	△	△	△	○	
	422	A6/A7	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黄褐色	△		△		
	423	A6	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	黄橙色	○		○		
	424	B6	深鉢	縄文晩期				タテヨコの研磨	ヨコ方向の研磨	にぶい橙色～にぶい褐色	△	△		△	
	425	A6	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨	茶褐色	△		△		
	426	B6	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○		△	
45	427	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	△	△		○	
	428	A6	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	△				
	429	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黒褐色	△	△		○	
	430	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黒褐色	○			○	
	431	A6	深鉢	縄文後期				沈線 波状沈線	ナデ	黒褐色	△				
	432	B6	深鉢	縄文後期				沈線 波状沈線	ナデ	灰黄褐色	△	△		○	
	433	B6	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黒褐色	○	△		○	
	434	B6	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△			○	
	435	B6	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	淡黄色	○			○	
	436	A6	深鉢	縄文後期				研磨 疑似縄文	研磨	淡黄褐色	△		△		
	437	A6	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ヨコ方向の条痕	黄褐色	△			△	
	438	A6	深鉢	縄文後期				研磨 縄文	研磨	茶褐色～黒褐色	△				
	439	A6	深鉢	縄文後期				ナデ	研磨	黄褐色	△				
	440	B6	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
	441	A6	深鉢	縄文後期				ナデ 刺突文	ナデ	にぶい橙色	△		△		
	442	B6	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		○	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表③

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量（（ ）は復元値） 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	胎土 角閃石	長石	石英	その他	備考
45	443	B6	深鉢	縄文後期				縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		○	
	444	B6	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	浅黄色	△	△		△	金雲母
	445	A6	深鉢	縄文後期				条痕	条痕	にぶい橙色	△				
	446	B6	深鉢	縄文中期				縄文 沈線	ナデ 条痕	明黄褐色	△	△	△	○	
	447	B6	深鉢	縄文				ナデ	ナデ 一部軽い研磨	淡黄色	○	△	○	△	
	448	B6	深鉢	縄文				研磨	研磨	にぶい橙色～にぶい黄橙色	△	△		△	
	449	B6	深鉢	縄文				ナデ	ナデ	にぶい褐色	○			○	
	450	C6	深鉢	縄文中期				縄文 ナデ	ナデ	黒褐色			○		
	451	C6	深鉢	縄文中期				条痕	研磨	にぶい黄褐色					
	452	C6	深鉢	縄文中期			(6.6)	指押さえ ナデ	ナデ	にぶい橙色	○				
	453	C6	深鉢	縄文前期				沈線文	板状工具によるナデ	にぶい赤褐色	○	○			
50	489	トレンチ2	甕	弥生早期				刻目突帯 条痕	ナデ	暗灰色	○	○	△	△	
	490	トレンチ2	甕	弥生早期				ナデ 刻目突帯 条痕	工具ナデ	暗灰色	△	○	△	△	
	491	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ナデ	ナデ	暗褐色	○	△		△	
	492	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	灰白色	△	△	△	△	
	493	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				軽い研磨	軽い研磨	黒灰色	△	○	△	△	
	494	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ方向の条痕 沈線	ナデ	暗褐色～黒色	○	○		△	
	495	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	暗褐色	○	○		○	
	496	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ヨコ指ナデ ヨコナデ	暗褐色	△	△		△	
	497	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ヨコナデ	暗褐色	○	△		△	
	498	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	淡橙色～淡橙褐色	○	△		△	
	499	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	淡橙褐色～灰褐色	○	△		△	
	500	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	淡橙色	○	○		△	
	501	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	暗褐色～黒色	○	○		△	
	502	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	軽い粗な研磨	暗灰色	○	○	△	△	
	503	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ヨコ磨き	黒色	○	△		○	
	504	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				沈線	ヨコナデ	暗褐色	○	△	△		
	505	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ヨコ方向縄文 ヨコナデ	ヨコ磨き	暗褐色～にぶい橙褐色	○	△		○	
	506	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコナデ ナデ	ナデ	橙褐色	○	○		○	
	507	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ヨコ方向の条痕	ナデ	橙褐色～淡橙褐色	○	△		△	
	508	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				条痕 工具ナデ	条痕のち工具ナデ	にぶい黄色	△	○	△	△	
	509	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコナデ ナデ	ナデ	橙褐色	○	○		○	
	510	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコナデ ナデ	ナデ	暗赤褐色～黒色	○	△			
	511	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ナデ	ナデ	暗褐色～にぶい橙褐色	○	△		△	
	512	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ナデ	ナデ	灰白色	○	△			
	513	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ナデ ナナメ方向の条痕文	ヨコ指ナデ ヨコ磨き	暗褐色					
	514	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ ナデ	ナデ	灰白色～暗褐色	○	△		△	
	515	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ナデ ヨコ指ナデ	ヨコナデ	暗褐色	○	○		△	
	516	トレンチ2	深鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ 指ナデ	ヨコ指ナデ ヨコナデ	灰褐色～暗灰褐色	○	△		○	
	517	トレンチ2	鉢	縄文晩期				沈線	研磨	暗灰色	○	○	△	△	
	518	トレンチ2	鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	淡黄褐色～暗褐色	○	○		△	
	519	トレンチ2	鉢	縄文晩期				沈線	ヨコ磨き	暗褐色	○	△		△	
51	520	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコナデ 沈線 ナデ	ヨコ指ナデ ナデ	淡橙褐色	○	△		○	
	521	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ磨き 沈線	ヨコナデ ヨコ磨き	淡黄褐色～暗褐色	○	○		△	
	522	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ 沈線 ヨコ磨き	ヨコ指ナデ ヨコ磨き	灰褐色～黒色	○	△		△	
	523	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期	(48.0)			ヨコ指ナデ 沈線 ナデ	ヨコ指ナデ ヨコ磨き ミガキ	明赤褐色～暗褐色	○	△	△	△	
	524	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期	(38.0～)			ヨコ方向研磨 沈線	ヨコ方向の研磨	暗灰褐色～灰褐色	○	△		○	
	525	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ 沈線 ヨコ磨き	ヨコ指ナデ ヨコ磨き	暗褐色～黒色	△	△	△	△	
	526	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ 沈線 ナデ	ヨコ指ナデ ナデ	にぶい橙褐色～暗褐色	○	△		△	
	527	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ指ナデ 沈線 ヨコ磨き	ヨコ指ナデ ヨコ磨き	黒色	○	△			
	528	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	黒灰色	△	○	△	△	
	529														
	530	トレンチ2	浅鉢	縄文晩期				ヨコ磨き ヨコ指ナデ後ヨコ磨き	ヨコ磨き	暗褐色～黒色	○	○		△	
	531														
	532	トレンチ2	深鉢	縄文後期				ヨコナデ 縄文 沈線	ナデ	暗褐色～淡褐色	○	○		○	
	533	トレンチ2	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	巻貝条痕	暗褐色	△	△	○	○	
	534	トレンチ2	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ナデ	にぶい橙褐色～暗褐色					
	535	トレンチ2	深鉢	縄文後期				ヨコナデ 磨消縄文	ヨコ方向の条痕文後ナデ	橙褐色	○	△		○	
	536	トレンチ2	深鉢	縄文後期				磨消縄文	ナデ	橙褐色	○	△		△	
	537	トレンチ2	深鉢	縄文後期				沈線 軽い研磨 縄文 沈線	ナデ	にぶい赤褐色	○	○	△	○	
	538	トレンチ2	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 軽い研磨	軽い研磨	暗褐色	○	○	△	△	
	539	トレンチ2	深鉢	縄文後期				磨消縄文 ナデ	ナデ	淡橙褐色～淡褐色	○	△		△	
	540	トレンチ2	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ 条痕文	淡橙褐色～暗褐色	○	△		△	
	541	トレンチ2	深鉢	縄文後期				ヨコナデ ナナメ方向の条痕文後ナデ 縄文 沈線	不定方向の条痕文後ナデ	淡褐色～暗褐色	△	△		△	
	542	トレンチ2	深鉢	縄文後期				列点文	ナデ	淡褐色	○	△		△	
	543	トレンチ2	深鉢	縄文中期				縄文 沈線 刻目	ナデ	にぶい褐色	△	△	△	△	金雲母含む
	544	トレンチ2	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ナデ	にぶい赤褐色	△	△	△	△	
	545	トレンチ2	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	淡橙色～暗褐色	○	△		△	
52	546	トレンチ2	深鉢	縄文前期				条痕	条痕	黒灰色	○	○	△	○	
	547	トレンチ2	深鉢	縄文前期				ヨコ方向の条痕文	不定方向の条痕文	暗褐色	○	○		△	
	548	トレンチ2	深鉢	縄文			(3.8～4.3)	タテ方向の工具によるナデ ヨコ方向工具ナデ	タテ方向の工具ナデ	明橙色	○	△		△	
	549	トレンチ2	鉢	縄文			3.9	板状工具によるタテ方向の調整後ナデ	ナデ	明橙褐色	○	△		○	
	550	トレンチ2	鉢	縄文			(3.4)	ナデ	ナデ	橙褐色	△	△		△	
	551	トレンチ2	鉢	縄文			5.0	ナデ後タテ方向の磨き ナデ	ナデ	明橙褐色	○	△		△	
	552	トレンチ2	鉢	縄文			(7.8)	丁寧なナデ	ナデ	橙褐色～暗褐色	○	△		○	
	553	トレンチ2	鉢	縄文			(5.8)	丁寧なナデ ナデ	ナデ	橙褐色	○	△		○	
	554	トレンチ2	鉢	縄文			6.0	ナデ	ハケ状工具による不定方向の調整	暗褐色～橙褐色	○	○			
	555	トレンチ2	鉢	縄文				ナデ	ナデ	橙褐色～暗褐色	○	△		△	
	556	トレンチ2	土製品	縄文	4.45		7.0	条痕	ナデ	淡橙褐色～暗褐色	○	○		△	
56	580	B7	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐色		△			
	581	A7	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	にぶい橙色	△	△			
	582	D7	深鉢	縄文晩期				研磨	研磨	灰白色～黒灰色	△	○	△	○	内面から外面口縁が黒変
	583	C7	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデのち研磨	にぶい黄橙色					
	584	A7	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○				
	585	D7	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	灰白色	○	○	○	△	内面黒変
	586	E7	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	暗黄褐色～暗灰色	△			○	
	587	A7	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	灰白色	△				
	588	A7	深鉢	縄文晩期				ナデ 条痕	ナデ	淡黄色	○				

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表④

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
56	589	A7	鉢	縄文晩期				磨滅が激しいが研磨	磨滅が激しいが研磨	にぶい橙色	△				
	590	A7	深鉢	縄文晩期				条痕(巻貝)	条痕	にぶい橙色	○				
	591	A7	深鉢	縄文晩期				条痕	条痕	にぶい橙色	○				
	592	A7	深鉢	縄文晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい橙色	○		○		
	593	B7	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	△			
	594	B7	浅鉢	縄文晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ 研磨	丁寧なﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	△				
	595	A7	深鉢	縄文晩期				条痕	条痕 ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	△				
	596	A7	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 縄文	研磨	にぶい橙色	△				
	597	A7	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	ﾅﾃﾞのち研磨	にぶい橙色	○				
	598	B7	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	灰褐色	△				
	599	B7	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 沈線 刺突	ﾅﾃﾞ 指圧痕	灰黄褐色	○	△			
	600	B7	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△				
	601	B7	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 疑似縄文	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○			△	
	602	B7	深鉢	縄文後期				沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色				○	
	603	C9	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△	△			
	604	B7	深鉢	縄文			9.4	ﾅﾃﾞ 工具ﾅﾃﾞ	研磨	黄灰色	○			○	
	605	B7	深鉢	縄文中期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	暗褐色				○	金雲母多い
57	606	C7	深鉢	縄文				条痕	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	○				
	607	B7	深鉢	縄文				ﾅﾃﾞ 指圧痕 条痕	ﾅﾃﾞ	暗灰色	○				
	608	C7	深鉢	縄文前期				条痕	条痕	赤褐色	○	○	○	○	
63	658	C8	甕	弥生早期				条痕 刻み	条痕	灰白色	△				
	659	D8	甕	弥生早期				刻目突帯	条痕 ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○			
	660	C8	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	△		△		
	661	B8	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	浅黄色	△	△		△	
	662	D8	壺	弥生早期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	赤褐色	○	○			内外面丹塗り
	663	B8	深鉢	縄文晩期				沈線	研磨	灰白色	△	△		△	
	664	B8	深鉢	縄文晩期				沈線	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	△	△			
	665	B8	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ後沈線	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○			
	666	B8	深鉢	縄文晩期				条痕のち沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄色	○	○	△	△	
	667	B8	深鉢	縄文晩期				ﾅﾅﾒ方向の細沈線	軽い研磨 沈線	橙色	△	△		△	
	668	B8	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ	丁寧なﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○			
	669	B8	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ 突帯状	研磨	灰褐色	△	△			
	670	B8	浅鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	暗灰色	△	△			
	671	B8	浅鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	暗黄灰色	△	△			
	672	C8	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	灰白色	△				
	673	B8	浅鉢	縄文晩期				ﾖｺﾍﾗﾐｶｷと沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ ﾖｺﾍﾗﾐｶｷ	灰褐色	○	○	△		雲母の様な細粒多い
	674	B8	浅鉢	縄文晩期				研磨	ﾖｺ方向の研磨	灰褐色	○	○			
	675	B8	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	褐色	△	△			
	676	B8	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	にぶい橙色	△	△			
	677	B8	浅鉢	縄文晩期				ﾖｺ方向の研磨	ﾅﾃﾞ 掘曲部に研磨	暗褐色	○	○			
	678	B8	浅鉢	縄文晩期				ﾍﾗ研磨	ﾍﾗ研磨	暗灰色	△	△			
	679	D8	深鉢	縄文後晩期				条痕	軽いﾍﾗ研磨	橙色	○	○			
	680	B8	深鉢	縄文後晩期				条痕	ﾅﾃﾞ	黄褐色	△	△		△	
	681	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺ方向板状工具のﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗灰色	△	△		△	
	682	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄色	△	△		△	
	683	B8	深鉢	縄文後晩期				研磨	研磨	灰黄色	△	△			
	684	D8	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○			
	685	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺ方向の条痕後ﾅﾃﾞ	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	暗灰褐色	○	○			
	686	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺ方向の条痕後ﾅﾃﾞ	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	明褐色	△	○			穿孔2ヶ所内から外へ
	687	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡明褐色	○	○		○	
	688	B8	浅鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ ﾍﾗﾐｶｷ	ﾅﾃﾞ	橙褐色	△	△			
	689	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	軽い研磨	黄褐色	△	△		△	
	690	D8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	条痕後ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	691	B8	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺ方向の条痕	ﾖｺ方向の条痕	暗褐色	○	○			
	692	B8	深鉢	縄文後晩期				条痕 刻目	ﾅﾃﾞ	暗灰色	△	△			
64	693	B8	深鉢	縄文後期				刺突文 沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗黄色	△	△			
	694	D8	深鉢	縄文後期				沈線	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	褐色	○	○			
	695	B8	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	△	△			
	696	B8	深鉢	縄文後期				刺突文 沈線 縄文	条痕	にぶい橙色	△	△			
	697	B8	深鉢	縄文後期				刺突文 沈線	条痕	浅黄色	△	△			
	698	B8	深鉢	縄文後期				縄文のち沈線	ﾅﾃﾞ	暗灰色	△	△			
	699	D8	深鉢	縄文後期				疑似縄文	条痕	淡褐色	○	○			
	700	D8	深鉢	縄文後期				縄文 ﾅﾃﾞ	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	浅黄橙色	○	○		○	
	701	B8	深鉢	縄文後期				疑似縄文 研磨	研磨	にぶい黄橙色	△	△			
	702	B8	深鉢	縄文後期				疑似縄文 研磨	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○	○		△	
	703	B8	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ﾅﾃﾞ	暗灰色	△	△		△	
	704	B8	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ後刻目	ﾖｺ方向の条痕のちﾅﾃﾞ	淡褐色	△	△		△	
	705	D8	深鉢	縄文後期				沈線	ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	浅黄色	○	○		○	
	706	B8	深鉢	縄文中期				縄文 刺突	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	△	△		△	金雲母
	707	C8	深鉢	縄文				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明黄橙色	○				
	708	B8	深鉢	縄文			(7.7)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	△	△		△	
	709	C8	深鉢	縄文			(9.2)	軽い研磨	軽い研磨	橙色	○			○	
	710	B8	深鉢	縄文				ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	指おさえと指ﾅﾃﾞ	淡褐色	△	△		○	金雲母多い
	711	D8	深鉢	縄文			4.0	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙色	○	○			
	712	B8	土製品	縄文	2.8		0.8	条痕	ﾅﾃﾞ						重さ8.8g
	713	B8	浅鉢	縄文				研磨	研磨	にぶい褐色	△	△			
	714	B8	深鉢	縄文				ﾅﾃﾞ 沈線	条痕	暗褐色	○			△	
	715	B8	深鉢	縄文				研磨	研磨	灰褐色	△			△	
	716	B8	深鉢	縄文				疑似縄文	ﾅﾃﾞ	暗赤褐色	△	△		△	
	717	B8	深鉢	縄文				ﾅﾃﾞ 研磨 疑似縄文	軽い研磨 ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	△			△	
	718	B8	深鉢	縄文				巻貝条痕	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△	△			
	719	B8	鉢	縄文	(12.8)			ﾖｺ方向の条痕	ﾅﾃﾞ	淡褐色	△	△			
	720	B7/B8	深鉢	縄文	(25.4)			研磨	研磨	暗灰色	○			△	
65	721	B8	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ 条痕	灰黄褐色	△			△	
	722	B8	甕	弥生早期				刻目突帯 軽い研磨	ﾅﾃﾞ	暗黄灰色	△	△	△		
	723	B8	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△				
	724	B8	深鉢	縄文晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ後沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰褐色	○	△			
	725	B8	深鉢	縄文後期				軽い研磨	ﾅﾃﾞ	灰黄褐色	△	△		△	金雲母少し
	726	C8	鉢	縄文後期				刺突文 縄文 沈線	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色～灰褐色	△				
	727	B8	深鉢	縄文後期				粗い縄文後沈線のちﾖｺ方向の研磨	ﾖｺ方向の研磨	淡褐色～灰褐色	○	○			
	728	C8	深鉢	縄文後期				刻目 縄文 沈線	ﾅﾃﾞ	明褐色～黒褐色	△	△			
	729	C8	深鉢	縄文後晩期				貝殻条痕	貝殻条痕	灰褐色	○		○		

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑤

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 [( )は復元値] 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	胎土 角閃石	長石	石英	その他	備考
65	730	B8	深鉢	縄文後晩期				ナデ ヨコ方向のナデ	ヨコ方向のヘラナデ	暗褐色	○	○			
	731	C8	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	にぶい橙色	△		△	△	
	732	D8	深鉢	縄文後晩期				条痕	ヨコ方向のナデ	黒褐色	○	○			
	733	B8	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	にぶい橙色	△	△	△	△	
	734	C8	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	黄褐色	○				
	735	B8	深鉢	縄文後晩期				ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕	淡灰褐色	△	△			
	736	B8	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	灰黄褐色	△	△			
	737	B8	深鉢	縄文後晩期				条痕	条痕	にぶい黄橙色～灰褐色	△	△			
	738	C8	深鉢	縄文後晩期				研磨	研磨	にぶい橙色	△				
	739	C8	深鉢	縄文後晩期				ナデ 貝殻条痕文	ナデ	灰白色	○				
	740	B8	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文 沈線	研磨	明褐色	△			△	
	741	B8	深鉢	縄文後期				疑似縄文と沈線	ナデ	灰褐色	△	○			
	742	C8	深鉢	縄文後期				研磨 縄文 沈線	研磨	茶褐色				△	
	743	C8	深鉢	縄文後期				研磨 縄文 沈線	研磨	にぶい赤褐色	△				
	744	C8	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線 ナデ	研磨	にぶい橙色	△			△	
	745	C8	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 ナデ	ナデ	茶褐色	△		△		
	746	C8	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ	ナデ	にぶい橙色	△	△		△	
	747	C8	深鉢	縄文後期				疑似縄文 条痕のちナデ	一部巻貝条痕 ナデ	褐色	○		△		
	748	B8	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	巻貝条痕	淡橙灰色	○	○			
	749	C8	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	○			
	750	C8	深鉢	縄文後期				縄文ナデ	ナデ	黄橙色	○			○	
	751	C8	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 縄文	研磨	黒褐色				○	
	752	C8	深鉢	縄文後期				縄文のち沈線のち条痕	条痕	にぶい赤褐色	△	△			
	753	B8	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の研磨 縄文後ヨコ方向の研磨	研磨	黒褐色	△	△			
	754	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 刻目	ナデ	橙色	△			△	
	755														
	756	A8	深鉢	縄文後期				ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙色	△				
66	757	C8	深鉢	縄文後期				条痕 沈線	ヨコナデ 条痕	黒褐色	△				
	758	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 刺突文	条痕	明黄橙色	○				
	759	C8	深鉢	縄文後期				ナデ 刻み	ナデ	黄褐色	○		△		
	760	C8/C9	深鉢	縄文後期				磨消縄文	ナデ	にぶい橙色	○	○			
	761	C8	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	黒褐色	△	△			
	762	B8	深鉢	縄文			(5.3)	ナデ ヘラナデ	指圧とナデ	明橙褐色	○	○			
	763	C8	深鉢	縄文			(8.0)	ナデ	条痕	橙色	△				
	764	C8	深鉢	縄文			(10.6)	条痕 ナデ	条痕	にぶい橙色	△				
	765	C8	深鉢	縄文			(7.6)	ナデ	ナデ	明赤褐色	○		○		
	766	B8	深鉢	縄文中期				刺突文 刻目突帯	ナデ	暗褐色	△			○	金雲母多い
	767	B8	深鉢	縄文中期				連続刺突文 刻目	刻目 ナデ	暗灰黄色	△	△			
	768	B8	深鉢	縄文前期				ナデ 刺突文	ナデ 指圧痕	淡黄褐色	△	△			
	769	B8	深鉢	縄文中期				粗い縄文 素突帯	ナデ	灰褐色	△	△	△	○	
	770	B8	深鉢	縄文中期				縄文	ナデ	にぶい黄橙色		△	△	△	
71	848	B9	甕	弥生早期				刻目突帯 ナデ	ヨコナデ	灰色	○	○			
	849	B9	甕	弥生早期				刻目突帯 ナデ	ヨコナデ	灰色	○	○			
	850	B9	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ヨコ方向のナデ	淡黄色	○	○			
	851	C9	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△			
	852	B9	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	灰褐色	○	○			
	853	B9	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ヨコ方向のナデ	灰色	○	○			
	854	C9	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	にぶい橙色	△				
	855	B9	深鉢	縄文晩期				ナデ 条痕 沈線	ヨコ方向のナデ	淡橙色	○	○			内外面赤色顔料
	856	C9	深鉢	縄文後期				沈線 軽い研磨	軽い研磨	にぶい橙色	△	△			
	857	C9	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐灰色	○			△	
	858	D9	浅鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	灰褐色	○	○			
	859	B9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ヨコ方向のナデ	褐色	○	○			
	860	B9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ヨコ方向のナデ 条痕	黒褐色・淡黄色	○	○			
	861	C9	深鉢	縄文後晩期				条痕後ナデ 細い沈線あり	ナデ	にぶい黄橙色	△				
	862	C9	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	灰白色	△				
	863	C9	深鉢	縄文後晩期				一部条痕 ナデ	ナデ	黒褐色	○				
	864	B9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ヨコ方向のナデ	橙色	○	○			
	865	C9	深鉢	縄文後晩期				条痕(巻貝)	ナデ	明赤褐色	○			○	
	866	C9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	研磨	褐色～橙色	○				
	867	C9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 巻貝条痕	ナデ	褐色	△				
	868	D9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	暗灰色	○	○	○	○	
	869	C9	深鉢	縄文			(6.4)	ナデ	ナデ	黄橙褐色	△		○		
	870	D9	深鉢	縄文				ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	○		△	
	871	C9	深鉢	縄文				研磨	研磨	にぶい褐色	△	△			
	872	B9	深鉢	縄文後期				ナデ ヨコ方向のナデ	ナデ ヨコ方向のナデ	黒褐色	○	○			
	873	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	黄灰色		○			
	874	C9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ 沈線	にぶい黄橙色	△			△	
	875	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	灰黄褐色	△	△		△	
	876	C9	深鉢	縄文後期				押点文 沈線	条痕	灰黄色	△	△	△		
	877	C9	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	褐灰色	△				
72	878	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	褐色	△			△	
	879	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	にぶい橙色	△			△	
	880	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	にぶい橙色	△			△	
	881	C9	浅鉢	縄文後期				研磨 縄文	研磨	橙色	△	△	△		
	882	B9	深鉢	縄文後期				ナデ 刻み	ヨ方向のナデ	褐色	○	○			
	883	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 刻み	ナデ 条痕	にぶい黄橙色	△	△			
	884	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 条痕	研磨	灰黄褐色	△			△	
	885	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 巻貝条痕	ナデ 巻貝条痕 研磨	灰褐色	△	△		△	
	886	C9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	茶褐色	○		○		
	887	C9	深鉢	縄文後晩期				ナデ 条痕	ナデ 条痕	灰黄色	△	△			
	888	B9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	軽い研磨	黒褐色	○	○			
	889	B9	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ヨコ方向のナデ	茶褐色	○	○			
	890	C9	深鉢	縄文後晩期				ナデ 縄文	ナデ	赤褐色	△	△		△	
	891	C9	深鉢	縄文後晩期				条痕	条痕後ナデ	灰褐色	△	△			
	892	C9	深鉢	縄文			(11.0)	ナデ	ナデ	明黄褐色	○	○			
	893	C9	深鉢	縄文			(6.4)	ナデ	ナデ	橙色	△	△	○		
	894	C9	深鉢	縄文			(7.7)	ナデ	ナデ	明赤褐色	○	○			
	895	D9	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	浅黄色	△	△		△	
	896	D9	深鉢	縄文後期				沈線 疑似縄文	ナデ	赤褐色	○	○		○	
	897	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	ヨコ方向のナデ	茶褐色	○	○			
	898	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線 研磨	ナデ後研磨	暗褐色	○	○		△	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑥

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
72	899	D9	深鉢	縄文後期				軽い研磨 疑似縄文 沈線	軽い研磨	暗褐色	○	○		△	
	900	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	ヨコ方向のナデ	茶褐色	○	○			
73	901	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線 軽い研磨	ナデ後軽い研磨	明赤褐色	△	△			
	902	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	条痕	にぶい褐色	○	○		△	
	903	D9	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 軽い研磨	ナデ後軽い研磨	赤褐色	△	△	△		
	904	D9	深鉢	縄文後期				軽い研磨 沈線 縄文	軽い研磨	黒褐色		○		○	
	905	D9	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	研磨	暗赤褐色	△	△		△	
	906	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 巻貝条痕	ヨコ方向のナデ	黒褐色	○	○		○	
	907	C9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△			
	908	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	ナデ	淡黄色	△	△	△		
	909	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文 軽い研磨	研磨	にぶい赤褐色	△	△	△	△	
	910	D9	深鉢	縄文後期				沈線 疑似縄文	研磨	明褐色				△	
	911	D9	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ 縄文	ヨコ方向のナデ	褐色	○	○			
	912	D9	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ナデ	黒褐色	△	△		△	
	913	D9	鉢	縄文後期	(14.1)			ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	△			○	金雲母やや多い
	914	D9	浅鉢	縄文後期				疑似縄文 軽い研磨 研磨	研磨	橙色	△	△		△	
	915	C9	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	明赤褐色	○		○	○	
	916	D9	深鉢	縄文後期				磨滅	沈線 磨滅	灰黄褐色	○	○			
	917	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい黄灰色	○	○	△	○	
	918	D9	深鉢	縄文後期				軽い研磨	軽い研磨	黒褐色	○	○			
	919	C9	深鉢	縄文後期				条痕	ナデ	にぶい橙色	△	△		△	
	920	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	指圧痕	茶褐色	○	○		△	
	921	D9	深鉢	縄文後期				縄文 条痕	ヨコ方向のナデ	茶褐色	○	○			
	922	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	暗褐色	○	○			
	923	D9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	暗褐色	△	○		△	
	924	D9	深鉢	縄文後期				ヨコナデ ナデ	ヨコ方向のナデ	浅黄色	○	○		○	
	925	D9	深鉢	縄文後期				条痕	条痕	明赤褐色	○	○		○	
	926	D9	深鉢	縄文中期				刻目 刻目突帯	条痕	暗茶褐色		○	○	△	金雲母含む
	927	D9	深鉢	縄文中期				素突帯 縄文	縄文	灰褐色	○			○	
74	928	D9	深鉢	縄文			9.9	ナデ 指圧痕とナデ 指圧とナデ	ケテ方向のナデ 指圧後ナデヘラ調整	明橙褐色	○	○		○	
	929	D9	深鉢	縄文			(11.0)	ナデ	ナデ	赤褐色・灰褐色	○	○		○	
	930	D9	深鉢	縄文			(8.5)	ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	○	○	△	
	931	D9	深鉢	縄文			(8.4)	ユビ押さえ ナデ	ナデ	橙色	○	○		○	
	932	D9	深鉢	縄文後期				凹線文	条痕	浅黄色	△	△	△		
	933	C9	深鉢	縄文後期				沈線	条痕	にぶい黄褐色	△			△	
	934	C9	深鉢	縄文後期				板かヘラでのナデ	ナデ	明黄褐色	△	△			
	935	C9	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	灰黄褐色	△	△			
	936	C9	深鉢	縄文後期			(10.0)	ナデ	ナデ	明黄褐色	△			△	
78	965	D10	甕	弥生早期				ヨコナデ 刻目突帯	条痕 ヨコナデ	黒色	○	△			
	966	C10	甕	弥生早期				ナデ 刻目突帯	ナデ	黒褐色	△	△			
	967	C10	甕	弥生早期				軽い研磨 刻目突帯	軽い研磨	黒褐色	△				
	968	C10	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	浅黄色	△		△		
	969	C10	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	軽い研磨	にぶい黄褐色	△				
	970	D10	深鉢	縄文晩期				ナデ 巻貝条痕	ナデ 指圧痕	にぶい褐色	○	△		△	
	971	C10	深鉢	縄文晩期				条痕	条痕のちナデ	浅黄橙色	△	△		△	
	972	B10	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	灰褐色	○	○			
	973	C10	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐灰色	△				
	974	C10	浅鉢	縄文晩期				ナデ 沈線 研磨	ナデ 研磨	橙色	△				
	975	C10	深鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黄灰色	○				
	976	C10	浅鉢	縄文晩期				研磨のちナデ	研磨	浅黄橙色～黒褐色	○				
	977	C10	深鉢	縄文後期				刻み ナデ	ナデ	橙色	△		△		
	978	C10	深鉢	縄文晩期			9.0	ナデ 条痕	ナデ	黄橙色	△	△			
	979	B10	深鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	淡橙色	○	○			
	980	B10	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	茶褐色	○	○			
	981	B10	深鉢	縄文後晩期				ナデ 削り状の板ナデ(ヨコ方向)	研磨	黒褐色・橙色	○	○			
	982	C10	甕	弥生早期				ナデ 突帯	ナデ	橙色					
	983	C10	深鉢	縄文晩期				巻貝条痕のち沈線	ナデ	橙色	○			○	
	984	C10	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	沈線 ナデ	灰黄褐色	△			△	
	985	C10	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	指おさえ	橙色	○			△	
	986	C10	深鉢	縄文晩期				ナデ	軽い研磨	灰黄褐色	○				
	987	C10	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	にぶい黄橙色	○	△			
	988	C10	深鉢	縄文晩期				ナデのち軽い研磨	研磨	黒褐色	△	△			
	989	C10	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	淡黄～黄灰色	○				
	990	C10	浅鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	にぶい黄色	○				
	991	C10	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	暗灰黄色	△				
	992	C10	浅鉢	縄文晩期				ナデのち軽い研磨	ナデのち軽い研磨	にぶい黄橙色	○				
	993	C10	深鉢	縄文			(5.6)	ナデ	ナデ	明赤褐色	△		△		
	994	C10	深鉢	縄文				ナデ	ナデ	黄橙色	○				
79	995	C10	深鉢	縄文晩期				研磨 突帯	研磨	黒褐色	△				
	996	D10	浅鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	灰褐色	○	○			
	997	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ 沈線	明褐色	△	△		○	
	998	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 研磨	ナデ 研磨	明褐色	△			△	
	999	C10	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい黄橙色					
	1000	C10	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい橙色	△				
	1001	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 軽い研磨	ナデ	橙色	△			△	
	1002	C10	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 ナデ	ナデ	橙色				△	
	1003	C10	深鉢	縄文後期				研磨 沈線	研磨	にぶい褐色	△				
	1004	C10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 ナデ後軽い研磨	ナデ	黒褐色	△			△	
	1005	C10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	研磨	黒褐色	○				
	1006	C10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	研磨	にぶい橙色	△				
	1007	C10	深鉢	縄文後期				条痕 沈線 疑似縄文 ナデ	板かヘラでのナデ	橙色	○				
	1008	C10	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	研磨	にぶい褐色	△	△			
	1009	C10	浅鉢	縄文後期				ナデ 沈線 研磨	研磨	褐色	○				
	1010	C10	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	ナデ	灰白色	○	○			
	1011	C10	深鉢	縄文後期	(29.8)			疑似縄文 沈線	軽い研磨	橙色	○				
	1012	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	にぶい黄褐色	△	△			
	1013	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	橙色	△	△		△	
	1014	C10	深鉢	縄文後期				縄文 ナデ 沈線	ナデ	明黄橙色	△	△		△	
	1015	C10	深鉢	縄文後期				縄文沈線 ナデ	ナデ	明橙色	△				
	1016	C10	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 文様	ナデ	にぶい黄橙色	△				
	1017	C10	深鉢	縄文後期				刻目 沈線	ナデ	灰黄褐色	△		△		

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑦

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
79	1018	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文 沈線	ナデ	黒褐色	△	△			
	1019	C10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	板状の工具によるナデ	にぶい黄橙色	△				
	1020	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 縄文	ナデ	にぶい黄褐色	○			○	
	1021	C10	深鉢	縄文後期				疑似条痕 ナデ後軽いヘラ研磨	ナデ後軽いヘラ研磨	にぶい黄褐色	△			△	
	1022	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 疑似縄文	ナデ	灰黄褐色	△			△	
	1023	D10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	軽い研磨	にぶい褐色	△	△			
	1024	C10	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ナデ	淡黄色	△				
	1025	C10	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線 ナデ	ナデ	暗褐色	△				
	1026	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文	条痕	灰黄褐色	△	△			
	1027	C10	深鉢	縄文後期				疑似縄文 ナデ	ナデ	橙色	△			△	
80	1028	C10他	深鉢	縄文後期	(37.8)		(28.4)	縄文 ヨコ方向のヘラ研磨	ヨコ方向のヘラ研磨	暗褐色～淡褐色	○	○		○	C9・11・14/D9・10
	1029	C10	深鉢	縄文後期				縄文 条痕のちナデ	条痕のちナデ	灰黄褐色	○				
	1030	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 条痕 沈線	条痕	にぶい橙色	○	△			
	1031	D10	深鉢	縄文後期				ナデ 板かヘラでのナデ	ナデ 条痕後ナデ	黄褐色	○		△	△	金雲母少し
	1032	D10	深鉢	縄文後晩期				巻貝条痕 ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	淡黄褐色	△	△			
	1033	D10	深鉢	縄文後晩期				ナデ 無文	研磨 沈線	にぶい褐色	○	○		○	
	1034	D10	深鉢	縄文後期				条痕 ヨコナデ	条痕 ヨコナデ	明褐色	○	○		△	
	1035	D10	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	灰黄褐色	○	○			
	1036	D10	深鉢	縄文後晩期				ナデ 研磨	ナデ	灰黄褐色	○	△			
	1037	C10	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	黒褐色	○	○			
	1038	C10	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	にぶい黄橙色	△			△	
	1039	C10	深鉢	縄文後晩期				研磨	研磨	明黄褐色	△			△	
	1040	C10	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	にぶい黄橙色	○				
	1041	C10	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	橙色	○				
	1042	C10	深鉢	縄文後晩期				軽い研磨	軽い研磨	にぶい黄褐色	△				
	1043	C10	深鉢	縄文中期				沈線 刻目	刻目文	にぶい黄橙色	○				
	1044	C10	深鉢	縄文中期				ナデ 刻目突帯	原体条痕 ナデ	淡黄色			△		
	1045	D10	深鉢	縄文			(6.4)	ナデ	ナデ	明褐色	△			○	
	1046	D10	深鉢	縄文			(7.0)	ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	○		△	
	1047	C10	深鉢	縄文			(4.1)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△		△		
	1048	C10	深鉢	縄文			(7.0)	ナデ	ナデ	明褐色	○			○	
	1049	D10	深鉢	縄文			(7.0)	ナデ	軽い研磨	橙褐色	△	△			
	1050	C10	深鉢	縄文			(11.2)	ナデ 圧痕あり	条痕	にぶい黄橙色	○	○			
81	1051	C10	深鉢	縄文後期				ナデ 刻目突帯 沈線	条痕後ナデ	褐色	○	○			
	1052	D10	深鉢	縄文後期				条痕 ナデ	条痕	暗褐色	○	○		○	
	1053	D10	深鉢	縄文後期				条痕 ヨコナデ	条痕 ヨコナデ	にぶい橙色	○	○		△	
	1054	C10	深鉢	縄文中期				突帯	ナデ	明黄褐色					
	1055	D10	深鉢	縄文中期				縄文 突帯	ナデ	灰褐色	△			○	
86	1099	C11	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	研磨	黒褐色	△	△			
	1100	C11	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	黄橙色	△				
	1101	D11	深鉢	縄文後期				刻み 沈線 刺突文	ナデ	にぶい橙色	△	△	△	△	
	1102	C11	深鉢	縄文後期			4.1	研磨	研磨	茶褐色	○	○	○		
	1103	C11	深鉢	縄文晩期			(8.2)	ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△			
	1104	D11	深鉢	縄文晩期			(6.7)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	△	△	
	1105	C11	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐色	○			△	
	1106	C11	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線	ナデ	浅黄橙色	○	△		△	金雲母少し
	1107	D11	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線	ナデ	にぶい黄褐色	○	△		△	
	1108	B11	深鉢	縄文晩期				ヨコナデ 沈線	研磨	灰褐色	○	○			
	1109	B11	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ヨコ方向のナデ	黒褐色	○	○			
	1110	C11	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	研磨	にぶい褐色	△		△		
	1111	C11	深鉢	縄文晩期				ナデ後工具による沈線	ナデ	灰白色～黄灰色	△				
	1112	D11	深鉢	縄文後晩期				条痕	工具によるヨコナデ	暗褐色	○	○		△	
	1113	C11	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	にぶい黄橙色～暗褐色	○	○			
	1114	C11	深鉢	縄文後晩期				巻貝条痕	ナデ	褐色	○				
	1115	C11	深鉢	縄文後晩期				ナデ	研磨	にぶい黄橙色	△			△	
	1116	C11	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	淡黄～黒褐色	○				
	1117	C11	深鉢	縄文後晩期				ナデ	研磨	淡黄色	○	○			
	1118	D11	深鉢	縄文			7.3	ナデ	ナデ	暗灰色	△	△	△	△	
	1119	D11	深鉢	縄文			(7.3)	ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○		○	
	1120	C11	深鉢	縄文			(7.5)	ナデ	剥離の為不明	浅黄橙色	○	○		○	
	1121	D11	深鉢	縄文			(6.2)	工具ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○		△	
	1122	C11	深鉢	縄文			(7.8)	ナデ	ナデ	浅黄橙色	○				
	1123	C11	深鉢	縄文			(7.6)	ナデ	ナデ 指押さえ	にぶい黄褐色	○				
87	1124	B11/C11	浅鉢	縄文晩期	(34.0)			研磨 沈線	研磨	灰白色～黒褐色	○				
	1125	C11	浅鉢	縄文晩期				研磨 条痕 沈線	研磨	明褐色	○	○		△	金雲母少し
	1126	C11	浅鉢	縄文晩期				ヨコ方向の研磨 沈線	ヨコ方向の研磨	黒褐色	○	○			
	1127	C11	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	淡黄橙色	△			△	
	1128	B11	浅鉢	縄文晩期				ヨコナデ(磨滅の為研磨不明)	ヨコ方向のナデ(磨滅の為研磨不明)	灰白色	○	○			
	1129	C11	浅鉢	縄文晩期				ナデ	沈線 ナデ	淡黄色	△	△			
	1130	C11	浅鉢	縄文晩期				沈線 研磨残るナデ	磨滅が著しいが研磨	浅黄橙～褐灰色	△				
	1131	C11	浅鉢	縄文晩期	(21.0)			研磨	研磨	黒褐色					
	1132	C11	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	淡黄色	○	○			
	1133	D11	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 縄文？	ナデ	にぶい黄橙色	○	△		△	
	1134	C11	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ナデ	茶褐色	○	○			
	1135	C11	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文	ナデ	淡黄色	○	○			
	1136	D11	深鉢	縄文後期				ナデ	工具によるヨコナデ	暗灰色	○	○	△		
	1137	C11	土製品	縄文後期	2.0+		0.5	ナデ	ナデ						重さ6.3g
	1138	C11	深鉢	縄文後期				沈線 研磨	ナデ	暗褐色	○	○			
	1139	C11	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の研磨 沈線	ヨコ方向のナデ	暗褐色	○	○			
	1140	C11	深鉢	縄文後期				ヨコ方向のナデ 刺突文 沈線	ヨコ方向のナデ	暗褐色～黒褐色	○	○			
	1141	C11	深鉢	縄文後期				ナデ 刺突文 沈線文	研磨	明褐色	△			△	
	1142	C11	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	茶褐色	○	○			
	1143	C11	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	暗褐色～黒褐色	△	△			
	1144	C11	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ナデ						
	1145	C11	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の条痕 疑似縄文	ヨコ方向の条痕後ナデ	暗褐色	○	○			
88	1146	C11	深鉢	縄文後期				沈線 刺突文 ナデ	ナデ	淡黄色	○				
	1147	C11	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	橙色	○			○	
	1148	C11	深鉢	縄文後期				板状工具によるナデ	ナデ	淡黄色・灰褐色	○	○			
	1149	C11	深鉢	縄文後期				ヨコ方向の条痕	ヨコ方向の条痕後ナデ	淡褐色	○	○			
	1150	C11	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○		△	
	1151	C11	深鉢	縄文後期				軽い研磨	軽い研磨	淡橙色	△	△			

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑧

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量（（ ）は復元値） 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	胎土 角閃石	長石	石英	その他	備考
88	1152	C11	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	橙色	○	○		○	
	1153	C11	深鉢	縄文				ナデ	ナデ	褐色	○	○			
92	1188	C12	浅鉢	縄文晩期				研磨 リボン状突起	研磨	黒褐色	○	○		○	
	1189	C12	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	灰白色	○	○		○	
	1190	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	暗灰色～灰白色	△	△	△	△	
	1191	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	沈線 ナデ	黄灰色	△	△		△	
	1192	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい橙色	△	△		△	
	1193	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	灰白色	△	△		△	
	1194	C12	深鉢	縄文晩期				沈線 条痕	ナデ	褐色	○	○		○	
	1195	C12	深鉢	縄文後晩期				ナデ	研磨	黒褐色	○	○		○	
	1196	C12	深鉢	縄文後晩期				ナデ後軽い研磨	ナデ	暗黄灰色	△	△	△	△	
	1197	C12	深鉢	縄文晩期				ナデ 条痕	ナデ	暗灰黄色	△	△		△	
	1198	B12	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	黒褐色	○	○			
	1199	C12	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	暗黄灰色	△	△	△	△	
	1200	C12	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	灰黄色	△	△	△	△	
	1201	C12	浅鉢	縄文晩期				ヨコナデ ナデ	ヨコナデ 研磨	灰色	○	○		○	
	1202	C12	浅鉢	縄文晩期				リボン状突帯 研磨	研磨	黒褐色	○	○		○	
	1203	C12	深鉢	縄文後晩期			(4.2)	ナデ	ナデ	褐色	○	○		○	
	1204	C12	深鉢	縄文後晩期			5.0	ナデ	条痕	にぶい橙色	△	△	△	△	
	1205	C12	深鉢	縄文後晩期			(7.0)	ナデ 条痕	ナデ	茶褐色	○	○		○	
	1206	C12	深鉢	縄文後晩期			(6.7)	ナデ	ナデ	褐色	○	○		○	
	1207	C12	深鉢	縄文晩期	(8.0)			ナデ	ナデ	淡橙色	○	○		○	
	1208	C12	深鉢	縄文後期				縄文 沈線 研磨	研磨	橙色	○	○		○	
	1209	C12	深鉢	縄文後期				縄文 研磨	研磨	灰黄色	△	△		△	
	1210	C12	深鉢	縄文後期				ナデ	条痕後ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	1211	D12	深鉢	縄文後期				ナデ 不明	ナデ	にぶい橙色	○	○		○	
	1212	C12	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	灰黄色	△	△		△	
	1213	C12	深鉢	縄文後期				沈線 疑似縄文 ナデ	ナデ	にぶい褐色	△	△	△	△	
	1214	D12	深鉢	縄文後期				一部軽い研磨 疑似縄文	ナデ	暗褐色	○	○	△	○	
	1215	C12	深鉢	縄文後期			(8.0)	ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	○		○	
	1216	D12	深鉢	縄文				条痕後ナデ	条痕後ナデ	にぶい褐色	○	○		△	
98	1246	B13	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	黄褐色	△	△			
	1247	D13	深鉢	縄文後晩期				条痕後ナデ	条痕後ナデ	暗灰黄色	○	○	△	○	
	1248	D13	浅鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	灰黄色	△	△			
	1249	D13	深鉢	縄文				ナデ	不明	にぶい橙色	○	○		○	
	1250	B13	甕	弥生早期				ナデ 刻目突帯 刻み	ナデ	灰褐色	○	○			
	1251	D13	甕	弥生早期				刻目突帯	ナデ	灰白色	△	△		△	
	1252	B13	甕	弥生早期				刻目突帯	条痕	暗赤褐色	○	○			
	1253	C13	深鉢	縄文晩期	(30.0)			ナデ後沈線	ナデ	にぶい黄色～暗灰色	○	○	○	○	
	1254	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 板状工具によるナデ	ナデ	黒褐色・淡黄色	○	○			金雲母少し
	1255	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい黄色～暗灰色	○	○	○	○	
	1256	C13	深鉢	縄文晩期				沈線	軽い研磨	淡黄色	○	○			
	1257	B13	深鉢	縄文晩期				沈線	条痕 沈線	暗褐色	△	△			
	1258	C13	深鉢	縄文晩期				条痕 ヨコ方向のナデ後沈線	ヨコ方向のナデ	灰褐色	○	○			
	1259	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線 条痕	ナデ	にぶい黄橙色	△	△			
	1260	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	褐灰色	△	△			
	1261	B13	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線	研磨	暗褐色	△	△			
	1262	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	暗褐色		△			
	1263	C13	深鉢	縄文晩期				沈線	ナデ	黒褐色	○	○			
	1264	C13	深鉢	縄文晩期				工具ナデ後ナナメ方向細沈線	研磨	黒灰色	○	△	○	○	
	1265	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 細沈線	ナデ	黒褐色	○	○			
	1266	B13	深鉢	縄文晩期				沈線	条痕	にぶい橙色	△			△	
	1267	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	淡黄色	△	△			
	1268	B13	深鉢	縄文晩期				条痕 沈線	ナデ	にぶい黄橙色	△				
	1269	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 工具によるナデ	ナデ	淡黄色	○	○			
	1270	C13	深鉢	縄文後晩期				軽い研磨	研磨	にぶい黄橙色	○	△	○	○	
	1271	C13	深鉢	縄文後晩期				ヨコ方向ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙色～暗灰色	○	△	○	△	
	1272	B13	深鉢	縄文後晩期				研磨	ナデ	にぶい褐色	△	△			
	1273	C13	深鉢	縄文後晩期				ナデ	段がつくナデ ナデ	灰褐色	○	○		○	
	1274	C13	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ 条痕	黒褐色	○	○			
99	1275	C13	深鉢	縄文後晩期				ナデ 工具によるナデ	ナデ	灰褐色	○	○			
	1276	C13	深鉢	縄文後晩期				ナデ	軽い研磨	灰褐色	○	○		△	
	1277	B13	浅鉢	縄文後晩期				研磨	研磨	暗褐色	△	△			
	1278	C13	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	黒褐色	○	○			
	1279	C13	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	茶褐色	○	○			金雲母多い
	1280	B13	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	暗褐色	○	○			
	1281	C13	深鉢	縄文後晩期				研磨 沈線	研磨	灰褐色	○	○			
	1282	C13/C15	浅鉢	縄文晩期	(15.6)			研磨 沈線	研磨	黒褐色	○	○	△	△	
	1283	C13	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	灰褐色～黒褐色	○	○			
	1284	B13	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	灰褐色	△	△			
	1285	C13	浅鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	浅黄色	○	○			
	1286	C13	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線 リボン状突起	研磨	鈍い橙色	△				
	1287	C13	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	暗褐色		△			
	1288	C13	深鉢	縄文晩期				ナデ 沈線	ナデ	灰褐色	○	○			
	1289	C13	浅鉢	縄文晩期	(31.0)			工具ナデ 研磨 沈線 リボン状突起	工具ナデ	黒灰色	○	○	△	△	
	1290	C13	浅鉢	縄文晩期				穿孔研磨 リボン状突起	穿孔研磨	橙色・黒褐色	○	○			
	1291	B13	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	暗褐色	△				
	1292	B13	深鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	○			
	1293	C13	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	浅黄橙色	○	○			
	1294	C13	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 ナデ	研磨	黒褐色・灰色	○	○			
	1295	C13	深鉢	縄文晩期			7.2	ナデ	ナデ	鈍い褐色	○	○	△	○	
	1296	C13	深鉢	縄文晩期			(7.3)	ナデ	ナデ	橙褐色	○	○			
	1297	C13	深鉢	縄文晩期				斜め方向の条痕	ナデ	鈍い褐色	○			○	
	1298	C13	深鉢	縄文晩期			8.4	縦方向の条痕	ナデ	明褐色	○	○			
100	1299	C13	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 ナデ	ナデ	淡橙色	○	○			
	1300	C13	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 研磨	ナデ	茶褐色	○	○			
	1301	C13	深鉢	縄文後期				ナデ 研磨	ナデ	茶褐色	○	○			
	1302	C13	深鉢	縄文後期				研磨	研磨	明褐色	△			△	
	1303	C13	深鉢	縄文後期				疑似縄文 横方向の条痕後ナデ 刺突文	ナデ	鈍い橙色	○	○			
	1304	C13	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	ナデ	鈍い褐色					
	1305	C13	深鉢	縄文後期				横方向の条痕後ナデ 疑似縄文	横方向の条痕後ナデ	鈍い褐色	△	△		△	
	1306	C13	浅鉢	縄文後期	(23.1)			研磨 縄文	研磨	褐灰色			○	○	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑨

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量（（ ）は復元値） 口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整・文様 外面	内面	色調	胎土 角閃石	長石	石英	その他	備考
100	1307	C13	深鉢	縄文後期				軽い研磨	軽い研磨	鈍い赤褐色	○	○		○	
	1308	C13	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 縄文	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○	○		△	
	1309	C13	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△	△			
	1310	C13	深鉢	縄文後期				横方向の条痕 縄文	横方向の条痕	黒褐色	△	△			
	1311	C13	深鉢	縄文後期				巻貝による沈線	ﾅﾃﾞ	浅黄色	○	○			
	1312	C13	深鉢	縄文後期			5.2	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄褐色	△	△			
	1313	D13	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	刻目 ﾅﾃﾞ	明赤褐色	△	△	△		
	1314	C13	深鉢	縄文後期				沈線 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	○	○			
	1315	C13	深鉢	縄文後期				刻目 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色・淡黄色	○	○			
	1316	D13	深鉢	縄文後期				条痕のち凹線文	ﾅﾃﾞ 押さえ	にぶい橙色	○	○	△	△	
	1317	C13	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡黄色	○	○			
110	1376	D14	深鉢	縄文後晩期			(7.5)	磨滅で不明	ﾅﾃﾞ	淡黄色	○	○	△	○	
	1377	B14	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯 刻み	ﾅﾃﾞ	暗灰色	○			△	
	1378	C14	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△				
	1379	C14	甕	弥生早期				横方向の条痕 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△			△	
	1380	B14	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	△				
	1381	B14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ 条痕	条痕	灰黄褐色	△			△	
	1382	C14	深鉢	縄文後晩期				条痕	研磨	黒褐色	△	△			
	1383	B14	甕	縄文				ﾅﾃﾞ後木口をあてた様な刻み 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	黒灰色	○	○		○	
	1384	B14	甕	弥生早期				条痕 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	暗灰色	○				
	1385	B14	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 条痕 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	△			
	1386	C14	甕	弥生早期				刻目突帯 横方向の条痕	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△				
	1387	B14	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ 刻目突帯	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○				
	1388	C14	深鉢	縄文晩期				縦方向の細沈線	ﾅﾃﾞ	鈍い橙色	△	△		△	
	1389	C14	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ 細沈線	ﾅﾃﾞ	茶褐色～暗褐色	○				
	1390	B14	深鉢	縄文晩期				ｹｽﾞﾘ状のﾅﾃﾞ ﾅﾃﾞ	条痕	にぶい黄褐色	△				
	1391	B14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	明褐色	△			○	
	1392	B14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰黄褐色	△	△			
	1393	B14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ 条痕	ﾅﾃﾞ	赤褐色	○	△			
	1394	C14	深鉢	縄文後晩期				横方向の条痕	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○				
	1395	C14	深鉢	縄文後晩期				条痕	ﾅﾃﾞ	黄褐色	○	○			
	1396	B14	深鉢	縄文後晩期				条痕	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○			
	1397	B14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ ﾖｺ方向のﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△			○	
111	1398	B14	浅鉢	縄文晩期	(40.0)			研磨後沈線 ﾖｺ方向の研磨	ﾖｺ方向の研磨	黒色	△	△			1515と同一個体
	1399	B14	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	暗褐色	○				
	1400	B14	浅鉢	縄文晩期				研磨 沈線	研磨	褐色	△			○	
	1401	C14	浅鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ 沈線	研磨	明褐色	△	△			
	1402	B14	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	暗褐色		△			
	1403	B14	深鉢	縄文晩期			(8.6)	ﾅﾃﾞ 指押さえ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○			△	
	1404	B14	深鉢	縄文			(11.0)	条痕 ﾅﾃﾞ	条痕	にぶい黄橙色	△			△	銀雲母
	1405	B14	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ 沈線	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙色	△				
	1406	C14	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	鈍い褐色		△			
	1407	B14	深鉢	縄文後晩期				条痕 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○			△	
	1408	B14	浅鉢	縄文晩期				条痕 ﾅﾃﾞ	研磨	にぶい黄橙色	○			△	
	1409	C14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 沈線	ﾅﾃﾞ	明褐色	○	○		△	
	1410	C14	深鉢	縄文後期				軽い研磨 沈線 縄文	軽い研磨	暗褐色	○	○			
	1411	D14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 疑似縄文 沈線	ﾅﾃﾞ	にぶい橙色	○	△	△	○	
	1412	C14	深鉢	縄文後期				研磨 沈線 縄文	研磨	鈍い褐色	○	○			
	1413	C14	浅鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 縄文 沈線	ﾅﾃﾞ	褐色	○			○	
112	1414	C14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 沈線 疑似縄文	ﾅﾃﾞ	黄褐色	△	△			
	1415	C14	深鉢	縄文後期				軽い研磨 疑似縄文	軽い研磨	黒褐色	○	○			
	1416	D14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐色	○	○	○	○	
	1417	C14	深鉢	縄文後期				横方向の条痕	ﾅﾃﾞ	鈍い橙色	○	○			
	1418	C14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	研磨	黄褐色	△	△			
	1419	C14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△	△		△	
	1420	C14	深鉢	縄文後期				沈線	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○	○			
	1421	C14	深鉢	縄文後期				凹線状の沈線	ﾅﾃﾞ	淡黄色	○	○			
	1422	C14	深鉢	縄文後期				口縁部刻み	ﾅﾃﾞ	灰黄褐色	△	△	△		波状口縁
	1423	C14	鉢	縄文後期			(7.5)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	鈍い褐色	○	○			
	1424	E14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙褐色	○			○	
	1425	B14	深鉢	縄文後期			(5.4)	ﾀﾃ方向の工具ﾅﾃﾞ 指ﾅﾃﾞ 無調整	ﾖｺ方向工具ﾅﾃﾞ	淡橙褐色～淡灰褐色	○	○	△		
	1426	C14	鉢	縄文後期				研磨 沈線 縄文	研磨	灰黄褐色	△				
	1427	C14	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ 縄文 沈線 磨消縄文	研磨	鈍い橙色	△	△			
123	1476	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目 条痕	ﾅﾃﾞ	淡褐色	○	○			
	1477	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目 ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡褐色	○	○	△		
	1478	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾅﾃﾞ	淡灰褐色	○	○			
	1479	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	淡灰褐色	○	○			
	1480	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾅﾃﾞ	淡褐色	△	△			
	1481	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾅﾃﾞ	明褐色	○	○			
	1482	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△	△			
	1483	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	黒灰色	△	△			
	1484	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	条痕	黒褐色	○	○			
	1485	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○			
	1486	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				刻目突帯	ﾅﾃﾞ	黒灰色	○	○		○	
	1487	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				条痕	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	明茶褐色	○	○			
	1488	ﾄﾚﾝﾁ1	甕	弥生早期				条痕	条痕	明橙褐色	○	○			
	1489	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	弥生早期				沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ	灰褐色	△	△			
	1490	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	弥生早期				沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○		○	
	1491	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	弥生早期				ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾖｺﾅﾃﾞ	淡明褐色	○	○			
	1492	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	弥生早期				ﾖｺﾅﾃﾞ	指圧	暗灰褐色	△	△			
	1493	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	黒褐色	○	○			金雲母含む
	1494	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ後沈線	ﾅﾃﾞ	灰褐色	△	△			
	1495	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				沈線 リボン状突起	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰褐色	○	○		△	
	1496	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				沈線	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	茶褐色	○	○			
	1497	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				沈線	ﾅﾃﾞ?	暗茶褐色	○	○			
124	1498	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				沈線	ﾅﾃﾞ	黒褐色	△	△		△	1542と同一個体
	1499	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				沈線 リボン状突起	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰褐色				△	
	1500	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ	ﾖｺ指ﾅﾃﾞ ﾖｺﾅﾃﾞ	橙褐色～淡橙褐色	○	○		○	
	1501	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	淡褐色	○	○			
	1502	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾊｹ?	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○	△		
	1503	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ ﾖｺﾊｹ?	ﾅﾃﾞ	淡褐色	○	○			
	1504	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期				条痕	条痕	黒褐色	△	△			

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑩

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
					法量 ((　)は復元値)			調整・文様			胎土				
124	1505	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期				ヨコ方向のヘラﾐｶﾞｷ	ヨコ方向のヘラﾐｶﾞｷ	明褐色	○	○			
	1506	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ　沈線	ヘラﾐｶﾞｷ	淡褐色	△	△			
	1507	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ　沈線	ヘラﾐｶﾞｷ	黒灰色	○	○		○	金雲母多い 1508・1509と同一個体
	1508	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ　沈線	ヘラﾐｶﾞｷ	黒灰色	○	○		○	金雲母多い 1507・1509と同一個体
	1509	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ　沈線	ヘラﾐｶﾞｷ	黒灰色	○	○		○	金雲母多い 1507・1508と同一個体
	1510	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ　沈線	ヘラﾐｶﾞｷ	黒灰色	○	○		○	金雲母多い 1561と同一個体
	1511	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヨコ方向の研磨	研磨	黒褐色	△	△		△	
	1512	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ	指圧　ヘラﾐｶﾞｷ	淡橙色	△	△		△	金雲母含む
	1513	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ	ヘラﾐｶﾞｷ	淡橙色	△	△			1514と同一個体
	1514	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ	ヘラﾐｶﾞｷ	淡橙色	△	△			1513と同一個体
	1515	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文晩期				ヘラﾐｶﾞｷ	ヘラﾐｶﾞｷ	黒色	△	△		△	1398と同一個体
	1516	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期			(6.7)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○	△		
	1517	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期			7.9	ﾍﾗｹｽﾞﾘ　指ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	明橙褐色	○	○			
	1518	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期			(6.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡褐色～暗褐色	○	○		○	
	1519	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後晩期			(8.1)	ﾖｺﾅﾃﾞ	条痕	灰褐色	○	○	△		
	1520	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文晩期			9.5	ﾍﾗｹｽﾞﾘ　ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　指圧	淡褐色	○	○			
	1521	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後期				沈線	ﾖｺﾅﾃﾞ	暗灰褐色	○	○			
	1522	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後期				沈線　突帯	ﾅﾃﾞ	黒褐色	△	△			
	1523	ﾄﾚﾝﾁ1	浅鉢	縄文後期				縄文　ﾅﾃﾞ	ﾖｺ指ﾅﾃﾞ　ﾖｺﾅﾃﾞ	淡褐色～暗褐色	○	△			
	1524	ﾄﾚﾝﾁ1	深鉢	縄文後期				縄文　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐色	○	○		○	
128	1533	B15	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ　条痕　刻目突帯	ﾅﾃﾞ	淡黄色	△	△			
	1534	B15	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ	灰黄色	△	△		△	
	1535	B15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　縄文	ﾅﾃﾞ	暗黄褐色	△			△	
	1536	C15	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ	淡黄色～橙色	○	○		○	
	1537	B15	甕	弥生早期				刻目突帯　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黄灰色	△			△	
	1538	C15	甕	弥生早期				刻目突帯　条痕	ﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○		○	
	1539	C15	甕	弥生早期	(28.0)			刻目突帯　条痕	ﾅﾃﾞ	暗褐色	○	○		○	
	1540	C15	深鉢	縄文晩期	(29.4)			ﾅﾃﾞ　沈線　縄文	ﾅﾃﾞ	褐色	○	○		○	
	1541	B15	深鉢	縄文晩期				沈線	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△			△	
	1542	B15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	ヨコ方向のヘラﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○			1498と同一個体
	1543	C15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	1544	B15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	ﾅﾃﾞ	黄褐色	△	△			
	1545	B15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	ﾅﾃﾞ	暗褐色	△	△		△	
	1546	C15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	研磨	黒褐色～淡黄色	○	○		○	
	1547	C15	深鉢	縄文晩期				刻目突帯　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ　条痕	褐色	○	○		○	
	1548	B15	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　沈線	ﾅﾃﾞ	黒褐色	△			△	
	1549	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕後ヘラケズリ(一部)	研磨	暗褐色	○	○		○	
	1550	B15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	△	△			
	1551	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	黄褐色	○	○		○	
129	1552	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	黒褐色～灰色	○	○		○	
	1553	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○		○	
	1554	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○		○	
	1555	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	浅黄橙色	○	○		○	
	1556	B15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐色	△	△		△	
	1557	C15	深鉢	縄文後晩期				沈線　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	1558	C15	浅鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　研磨	研磨	茶褐色	○	○		○	
	1559	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　凹線	ﾅﾃﾞ	淡黄橙色	○	○		○	
	1560	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　凹線	ﾅﾃﾞ	褐色	○	○		○	
	1561	B15/C13	浅鉢	縄文晩期	(39.2)			研磨　沈線	ヨコ方向の研磨	暗灰褐色～明褐色	○	○		○	金雲母多い 1510と同一個体
	1562	C15	浅鉢	縄文晩期				沈線　研磨	研磨	暗灰色	△	△	△	△	
	1563	C15	浅鉢	縄文晩期				沈線　研磨	研磨	暗褐色	△	△	△	△	
	1564	C15	浅鉢	縄文晩期				沈線　研磨	沈線　研磨	暗灰色	△	△		△	
	1565	B15	浅鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　研磨	ﾅﾃﾞ　磨き　口縁内面肥厚	淡黄色	△	△			
	1566	C15	深鉢	縄文晩期				研磨　リボン状突起	研磨	黒褐色	○	○		○	
	1567	C15	浅鉢	縄文晩期				研磨　リボン状突起	研磨	黒褐色～灰色	○	○		○	
	1568	B15	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	橙色	△			△	
	1569	C15	深鉢	縄文晩期			(5.8)	ﾅﾃﾞ　研磨		橙色	○	○		○	
	1570	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　縄文　沈線　研磨	研磨	茶褐色	○	○		○	
	1571	C15	深鉢	縄文後期				凹線　ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	褐色	○	○		○	
	1572	B15	浅鉢	縄文後期				縄文　沈線　研磨	研磨	褐色	△			△	
	1573	C15	深鉢	縄文後期				縄文　沈線　研磨	研磨	黒褐色	○	○		○	
	1574	C15	深鉢	縄文後期				沈線　縄文	ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	1575	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　沈線	研磨	橙色	○	○		○	
130	1576	C15	深鉢	縄文後期	(37.6)			沈線　疑似縄文　ﾅﾃﾞ	研磨	褐色～浅黄色	○	○		○	
	1577	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　沈線　疑似縄文	ﾅﾃﾞ	橙色～褐色	○	○		○	
	1578	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　縄文	研磨	橙色	○	○		○	
	1579	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　縄文	ﾅﾃﾞ	褐色	○	○		○	
	1580	C15	深鉢	縄文後期				疑似縄文　条痕のち研磨	研磨	茶褐色	○	○		○	
	1581	C15	深鉢	縄文後期				疑似縄文	ﾅﾃﾞ	茶褐色	○	○		○	
	1582	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	1583	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾖｺﾅﾃﾞ　ﾅﾃﾞ	研磨	褐色	○	○		○	
	1584	C15	浅鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡黄色	○	○		○	
	1585	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	条痕	黄橙色	○	○		○	
	1586	B15	深鉢	縄文後晩期				研磨　ﾅﾃﾞ	研磨	暗赤褐色	△			△	
	1587	C15	深鉢	縄文後晩期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰褐色	○	○		○	
	1588	C15	浅鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　条痕	ﾅﾃﾞ	黒褐色	○	○		○	
	1589	D15	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	にぶい褐色～黒褐色	○	○	△	○	
	1590	E15	深鉢	縄文晩期			(6.2)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙色	○			○	
	1591	D15	深鉢	縄文後晩期			(7.0)	磨滅で不明	磨滅で不明	淡黄色	○	○	△	△	
	1592	D15/D16	深鉢	縄文後晩期			5.6	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	橙色	○	△	△	○	
	1593	C15	深鉢	縄文後期				沈線　縄文	条痕	にぶい橙色	○	○		○	
	1594	C15	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	淡黄色	○	○		○	
139	1667	C16	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　沈線	ﾅﾃﾞ	灰黄褐色	△			△	
	1668	E16	深鉢	縄文晩期				ﾅﾃﾞ　細沈線	ﾅﾃﾞ	暗黄褐色	△			○	
	1669	D16/D17	深鉢	縄文後期				ﾅﾃﾞ　軽い研磨	ﾅﾃﾞ　軽い研磨	にぶい褐色	○	△	△	○	
	1670	C16	浅鉢	縄文晩期				本来研磨と思われる	研磨	浅黄色	○			△	
	1671	C16	深鉢	縄文				条痕後ﾅﾃﾞ	条痕後ﾅﾃﾞ	浅黄色～橙色	△			△	
	1672	C16	甕	弥生早期				条痕　突帯	条痕	にぶい黄橙色	△	△	△	△	
	1673	C16/C17	甕	弥生早期				ﾅﾃﾞ　刻目突帯	ﾅﾃﾞ	浅黄灰褐色	△			○	

岩鼻岩陰遺跡出土土器観察表⑪

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	時期	法量 口径(cm)	法量 器高(cm)	法量 底径(cm)	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調	胎土 角閃石	胎土 長石	胎土 石英	胎土 その他	備考
139	1674	C16	深鉢	縄文晩期				ナデ 細沈線	ナデ ナデ後研磨	暗灰黄色	○			○	
	1675	C16	深鉢	縄文晩期				ナデ 細沈線	ナデ	灰黄褐色	○			△	
	1676	C16	深鉢	縄文晩期				ナデ 細沈線	ナデ	にぶい橙色	△			△	
	1677	C16	深鉢	縄文晩期				条痕 細沈線	条痕	にぶい黄橙色	△	△		△	
	1678	C16	深鉢	縄文晩期				ナデ 縦方向の細沈線	ナデ	灰褐色	△	△		△	
	1679	C16	深鉢	縄文後晩期				ナデ 条痕	ナデ	灰黄褐色	○			△	
	1680	C16	深鉢	縄文後晩期				研磨 条痕	研磨	暗灰色～浅黄色	△	△		△	
	1681	C16	深鉢	縄文後晩期				条痕	ナデ	暗灰色	△	△		△	
	1682	C16	深鉢	縄文後晩期				ナデ 条痕	ナデ	灰褐色	○			△	
	1683	C16	浅鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	灰黄褐色	○			△	
	1684	C16/B14	浅鉢	縄文晩期				研磨	研磨	褐灰色	△	△	△	△	
	1685	C16	深鉢	縄文晩期			7.5	ナデ	ナデ	にぶい橙色	△	△	△	△	
140	1686	C16	深鉢	縄文後期				沈線 縄文 研磨	研磨	にぶい橙色	△	△		△	
	1687	C16	深鉢	縄文後期				縄文 沈線	ナデ	褐色	○			△	
	1688	C16	深鉢	縄文後期				ナデ?	ナデ?	にぶい赤褐色	△	△	△	△	
	1689	C16	深鉢	縄文後期				ナデ 刻み	ナデ ヨコナデ	黄褐色	△			○	
	1690	C16	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線 疑似縄文	ナデ	灰黄褐色～黒褐色	△			△	
	1691	C16	深鉢	縄文後期				沈線 ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	△	△		△	
	1692	C16	深鉢	縄文後晩期				ナデ後ヘラ研磨	ナデ	明赤褐色	△	△		△	
	1693	E16	深鉢	縄文後晩期				ナデ	ナデ	暗黄褐色	△			△	
	1694	C16	深鉢	縄文後期				ナデ 棒状用具による押さえ	ナデ	にぶい赤褐色	△			○	
	1695	C16	深鉢	縄文後晩期			(6.9)	条痕	条痕	にぶい橙色	△	△	△	△	
	1696	D16	深鉢	縄文後晩期			7.8	磨滅で不明	ナデ	にぶい黄橙色	△	△	○	○	
	1697	D16/D17	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		○	
148	1758	C17/C18	深鉢	縄文晩期				沈線 研磨	研磨	浅黄色	△	△		△	
	1759	D17	深鉢	縄文後期				ナデ 凹線	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
	1760	C17	浅鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	灰黄色	△	△		△	
	1761	C17	甕	弥生早期				条痕 刻目突帯	条痕	浅黄色	△	△		△	
	1762	C17	深鉢	弥生早期				条痕 穿孔	条痕	暗灰色	○	○	△	△	
	1763	C17/C18	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	赤褐色	△	△		△	
	1764	C17	深鉢	縄文晩期				条痕	ナデ	にぶい橙色	△	△	△	△	
	1765	C17/C18	浅鉢	縄文晩期				縄文	ナデ	浅黄色	△	△		△	
	1766	C17	深鉢	縄文						浅黄色	○	○		○	
	1767	C17	深鉢	縄文			(6.5)	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	○	○	○	○	
	1768	C17	深鉢	縄文後期				沈線 縄文	ナデ	にぶい黄橙色	△	△		△	
	1769	D17	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい黄橙色	○	△	△	○	
	1770	D17	深鉢	縄文後期				ナデ 研磨 縄文	ナデ	にぶい橙色	△	△	△	○	
	1771	C17	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線	条痕	暗灰色	△	△		△	
	1772	C17	深鉢	縄文晩期				沈線 ナデ	ナデ	浅黄色	△	△		△	
	1773	D17	浅鉢	縄文晩期				ナデ	ナデ	にぶい橙色	○	△	△	○	
	1774	D17	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
	1775	D17	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	ナデ	黒褐色～にぶい黄橙色	○	△	△	○	
	1776	C17	浅鉢	縄文後期			(3.6)	ナデ	研磨	浅黄色	△	△		△	
149	1777	D17/D18	深鉢	縄文後期				ナデ 縄文 沈線	条痕	淡黄色	○	○	△	○	
	1778	D17/D18	深鉢	縄文後期				ナデ 一部条痕後ナデ	ナデ	にぶい褐色	○	△	△	○	
155	1802	D18/D19	深鉢	縄文後期				沈線 刺突文 縄文	研磨	茶褐色	△	△			
	1803	D18	深鉢	縄文後期				沈線	軽い研磨	にぶい橙色	○	○		△	
	1804	D18	深鉢	縄文後期				ナデ 沈線	研磨	にぶい橙色	△			○	
	1805	C18	浅鉢	縄文後期				縄文 ナデ	縄文 条痕	暗灰色	△	△	△	△	
	1806	D18	深鉢	縄文後期				条痕	条痕	暗褐色	○	○	△	△	
	1807	D18	深鉢	縄文後期				ナデ	ナデ	茶褐色	○	○			
	1808	D18	深鉢	縄文後期				疑似縄文 沈線 刺突文	研磨	灰褐色	△	△			
	1809	C18	深鉢	縄文後期				縄文	ナデ	暗灰色～暗黄灰色	○	○		△	
	1810	D18	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	にぶい黄橙色				△	
	1811	D18	深鉢	縄文後期				沈線	ナデ	暗褐色		△		△	
	1812	D18	深鉢	縄文後期				縄文	ナデ	暗褐色	○	○		○	
	1813	D18	深鉢	縄文後期				条痕のちナデ	ヘ研磨	黄褐色		△			
159	1828	C9	甕	弥生中期				ナデ 刻目突帯	ナデ	にぶい黄褐色	△			△	下城式
	1829	B13	甕	弥生中期				刻目突帯	刻目口縁	暗褐色		△			下城式
	1830	C11	甕	弥生中期				磨き 刻目 刻目突帯	ヨコ方向のナデ 磨き		○	○			
	1831	C17	甕	弥生中期				ナデ 刻目	ナデ	淡黄色				△	下城式
	1832	C9	甕	弥生中期				ナデ 刻目突帯 ハケ目(タテ方向の)	ナデ	黄橙色	○	△	△		下城式
	1833	B8	甕	弥生中期				ヨコナデ 突帯	ヨコナデ	浅黄色	△	△		△	
	1834	B4	甕	弥生中期				ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	△	○	△	△	
	1835	B8	壺	弥生後期				タテ方向のハケメ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△			
	1836	B1	壺	弥生後期				ヨコナデ 櫛描波状文	ヨコナデ	にぶい橙色	△	△	△	△	安国寺式
	1837	D6	壺	弥生後期				ナデ 波状文	ナデ	淡赤褐色		△	△	○	
	1838	D6	壺	弥生後期				ナデ 貼付刻目突帯	ナデ	淡赤褐色	△	○	△	○	
	1839	C8	甕	古墳前期	(14.0)			ナデ	ナデ	にぶい黄色～暗灰色	○	○	○	△	
	1840	D6	壺	古墳前期	(10.0)			ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△	△	○	
	1841	A7	壺	古墳前期				ヨコナデ 不定方向のハケ目	ヨコナデ	黒褐色					
	1842	B8	甕	弥生中期			6.3	ハケメ ヨコナデ	ナデ	にぶい黄橙色	△	△			
	1843	C6	甕	弥生中後期				ナデ ハケメ	ナデ	赤橙色			○		
	1844	C4	甕	弥生中後期			(8.8)	タテハケ	ナデ	にぶい橙色	△		△		
161	1845	SK002	土師質土器坏	中世	13.0	1.9～2.3	9.0～9.4	ヨコナデ 回転糸きり痕	ナデ	淡褐色	○	○			
	1846	SK002	瓦器椀	中世	16.3	5.4～6.7	6.1	ヨコナデ ナデ後ヨコ方向の指ナデ	ナデ後ヨコヘラミガキ	淡灰褐色～灰色	△	△		△	
	1847	SK002	瓦器椀	中世	(16.3)	6.1	(7.1)	ヨコナデ ナデ後ヘラミガキ	ナデ	暗灰褐色	△	△			
	1848	SK002	瓦器椀	中世	(17.4)	6.1	(6.8)	ヨコナデ ナデ後ヘラミガキ	ナデ後ヘラミガキ	灰色～白灰色	△	△			
	1849	SK002	深鉢	弥生早期				条痕	ナデ	淡褐色					穿孔3ヶ所

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表①

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
15	10	C1	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	2.2	0.5	*1.6*	
	11	C1	石鏃	サヌカイト	1.3	1.4	0.2	0.1	
	12	C1	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	1.8	0.3	*0.6*	
	13	C1	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	*1.2*	0.4	*0.5*	
	14	C1	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.7	0.4	0.8	
	15	B1	石鏃	珪質岩	*1.4*	*1.4*	0.35	*0.4*	
	16	C1	石鏃未製品	姫島産黒曜石	*1.9*	2.0	0.8	*2.1*	
	17	A1	石匙	サヌカイト	2.6	*4.6*	0.8	*6.2*	
18	28	C2	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.2	0.3	
	29	C2	石鏃	サヌカイト	1.5	1.2	0.2	*0.3*	
	30	B2	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*1.0*	0.3	*0.4*	
	31	B2	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	*1.3*	0.3	*0.7*	
	32	C2	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	*1.5*	0.3	*0.5*	
	33	B2	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	*1.2*	0.25	*0.3*	
	34	C2	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.9	0.5	1.6	
	35	B2	石鏃	姫島産黒曜石	*1.7*	1.6	0.4	*0.8*	
	36	C2	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.9	0.4	1.1	
19	37	C2	台石		27.5	30.9	7.4	7500	
23	56	D3	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	*1.3*	0.25	*0.3*	
	57	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	*1.5*	0.3	*0.8*	
	58	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.4	0.6	
	59	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	1.5	0.3	*0.5*	
	60	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	1.0	0.2	*0.2*	
	61	B3	石鏃	サヌカイト	1.1	1.2	0.25	0.2	
	62	B3	石鏃	サヌカイト	1.5	*1.2*	0.2	*0.3*	
	63	B3	石鏃	サヌカイト	*1.4*	*1.2*	0.15	*0.2*	
	64	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	*1.4*	0.2	*0.2*	
	65	B3	石鏃	泥岩	1.2	1.3	0.2	0.2	
	66	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.2	0.2	
	67	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	*1.3*	0.2	*0.3*	
	68	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.1	0.2	0.1	
	69	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.5	
	70	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.2	0.3	
	71	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	*1.1*	0.2	*0.3*	
	72	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*1.1*	0.25	*0.2*	
	73	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	*1.1*	0.25	*0.3*	
	74	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	*1.2*	0.25	*0.4*	
	75	B3	石鏃	サヌカイト	*1.5*	1.4	0.2	*0.3*	
	76	B3	石鏃	泥岩	*1.6*	1.1	0.2	*0.2*	
	77	B3	石鏃	泥岩	1.6	1.3	0.2	0.3	
	78	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	*1.4*	0.25	*0.5*	
	79	B3	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	*1.8*	0.3	*1.2*	
	80	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	*1.1*	0.25	*0.3*	
	81	B3	石鏃	サヌカイト	*1.7*	*1.3*	0.3	*0.6*	
	82	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	1.5	0.25	*0.5*	
	83	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	*1.2*	0.3	*0.4*	
24	84	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	*1.1*	0.2	*0.2*	
	85	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	*1.2*	0.2	*0.3*	
	86	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*1.3*	0.3	*0.3*	
	87	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.0*	*1.5*	0.2	*0.2*	
	88	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.4	
	89	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.35	0.4	
	90	A3	石鏃	ｶﾞﾗｽ質安山岩(姫島産)	*1.7*	1.5	0.3	*0.5*	
	91	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.8*	1.5	0.25	*0.5*	
	92	B3	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	*1.4*	0.25	*0.5*	
	93	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	*1.3*	0.4	*0.6*	
	94	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	1.4	0.4	*0.6*	
	95	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	1.3	0.25	*0.4*	
	96	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.4	
	97	B3	石鏃	黒色黒曜石(西北九州産)	*2.6*	*1.2*	0.25	*0.3*	
	98	B3	石鏃	黒色黒曜石(西北九州産)	2.4	1.3	0.3	0.5	
	99	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.3*	*1.3*	0.3	*0.4*	
	100	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	*1.4*	0.3	*0.5*	
	101	B3	石鏃	黒色黒曜石(西北九州産)	*1.2*	*1.3*	0.25	*0.3*	
	102	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	1.4	0.25	*0.4*	
	103	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.0*	1.2	0.2	*0.2*	
	104	B3	石鏃	ｶﾞﾗｽ質安山岩(姫島産)	*1.8*	1.5	0.3	*0.8*	
	105	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	1.6	0.2	*0.5*	
	106	B3	石鏃	チャート	*1.7*	*1.6*	0.5	*1.0*	
	107	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	1.4	0.2	*0.5*	
	108	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	*1.5*	0.3	*0.6*	
	109	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.2	0.25	0.6	
	110	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.4*	*1.4*	0.3	*0.7*	
	111	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4	
	112	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.4	
	113	B3	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.2	0.3	0.3	
	114	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	*1.5*	0.3	*0.4*	
	115	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*0.9*	1.1	0.2	*0.2*	
	116	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*0.9*	1.0	0.15	*0.1*	
	117	A3	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	*1.1*	0.3	*0.2*	
	118	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.1*	*1.5*	0.3	*1.1*	
	119	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	1.6	0.3	*0.5*	
	120	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	1.4	0.45	*0.6*	
	121	B3	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	*1.8*	0.25	*0.4*	
25	122	B3	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.3	0.5	0.7	
	123	B3	石鏃	ガラス質安山岩(姫島産)	2.5	*1.6*	0.5	*1.8*	
	124	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	*1.4*	0.4	*1.0*	
	125	A3	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.9	不純物あり

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表②

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
25	126	B3	石鏃	珪質岩	2.3	1.4	0.3	0.7	
	127	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*0.9*	0.2	*0.2*	
	128	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*1.2*	0.25	*0.3*	
	129	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.1*	*1.0*	0.3	*0.3*	
	130	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	*1.0*	0.2	*0.2*	
	131	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	*0.8*	0.25	*0.1*	
	132	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	*1.0*	0.25	*0.3*	
	133	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	*1.1*	0.3	*0.2*	
	134	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	*1.4*	0.35	*0.6*	
	135	B3	石鏃	ｶﾞﾗｽ質安山岩	*1.8*	*1.3*	0.25	*0.4*	
	136	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*1.1*	0.2	*0.2*	
	137	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*0.9*	0.2	*0.3*	
	138	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*0.8*	0.2	*0.2*	
	139	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	*1.6*	0.4	*0.9*	
	140	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	*1.5*	0.3	*0.7*	
	141	A3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	*1.0*	0.4	*0.7*	
	142	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.4*	*1.7*	0.3	*1.3*	
	143	B3	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	*1.4*	0.35	*0.7*	
26	144	B3	石匙	サヌカイト	2.8	5.0	0.7	6.2	
27	145	A3	原石	姫島産黒曜石	5.9	9.4	4.1	223.8	円礫
31	188	D4	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.55	0.35	0.6	
	189	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	1.3	0.4	*0.5*	
	190	A4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	1.3	0.2	*0.4*	
	191	C4	石鏃	姫島産黒曜石	*2.2*	1.6	0.3	*0.6*	
	192	C4	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.6	0.4	1.5	
	193	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*0.9*	0.2	*0.3*	
	194	A4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	*1.8*	0.6	*1.4*	
32	195	C4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.7*	1.4	0.3	*0.4*	
	196	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.2	0.2	0.4	
	197	C4	石鏃	サヌカイト	1.4	1.8	0.3	0.4	
	198	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.6	0.35	0.5	
	199	B4	石鏃	粘板岩	1.7	1.3	0.3	0.4	
	200	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	1.0	0.25	*0.2*	
	201	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	*1.4*	0.25	*0.4*	
	202	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	*1.5*	0.3	*0.4*	
	203	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.6	0.25	0.6	
	204	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*1.2*	0.25	*0.3*	
	205	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	1.3	0.4	*0.7*	
	206	B4	石鏃	サヌカイト	*1.4*	1.5	0.35	*0.5*	
	207	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.4	0.5	
	208	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.1	0.25	0.3	
	209	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.1*	1.1	0.2	*0.2*	
	210	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.1	0.15	0.2	
	211	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.1	0.2	0.3	
	212	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.2	0.25	0.3	
	213	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.25	0.3	
	214	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*1.3*	0.25	*0.4*	
	215	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	*1.1*	0.2	*0.1*	
	216	B4	石鏃	泥岩	*1.2*	*1.3*	0.2	*0.3*	
	217	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.3	
	218	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	*1.1*	0.2	*0.2*	
	219	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.4	0.25	0.3	
	220	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.7*	*1.1*	0.3	*0.4*	
	221	B4	石鏃	泥岩	*1.8*	*1.2*	0.3	*0.4*	
	222	B4	石鏃	黒曜石(西北九州産)	*1.4*	*1.3*	0.3	*0.3*	
	223	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*2.1*	*1.2*	0.3	*0.4*	
	224	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.5	
	225	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	*1.2*	0.3	*0.4*	
	226	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	*1.0*	0.2	*0.3*	
	227	B4	石鏃	泥岩	*1.7*	1.7	0.3	*0.6*	
	228	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	1.4	0.35	*0.5*	
	229	B4	石鏃	泥岩	*1.5*	*1.2*	0.2	*0.2*	
	230	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.4	
	231	B4	石鏃	ガラス質安山岩	1.5	*1.2*	0.4	*0.4*	
	232	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*2.1*	1.9	0.4	*1.1*	
	233	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	*1.2*	0.3	*0.5*	
	234	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	*1.4*	0.3	*0.5*	
	235	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	*1.4*	0.2	*0.3*	
	236	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	*1.3*	0.3	*0.4*	
33	237	B4	石鏃	千枚岩質頁岩	1.4	1.3	0.2	0.2	
	238	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	*1.2*	0.2	*0.3*	
	239	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	1.3	0.3	*0.4*	
	240	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	
	241	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.1	0.25	*0.4*	
	242	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.3	0.3	*0.5*	
	243	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.4	0.2	0.4	
	244	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.3	*0.5*	
	245	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*0.8*	1.1	0.2	*0.2*	
	246	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.3	*0.5*	
	247	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*0.7*	1.1	0.25	*0.1*	
	248	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.1*	1.4	0.25	*0.5*	
	249	B4	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.5	0.7	1.8	
	250	B4	石鏃	サヌカイト	2.0	1.2	0.2	0.7	
	251	C4	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.4	0.3	1.2	
	252	B4	石鏃未成品	姫島産黒曜石	*1.2*	1.4	0.25	*0.5*	
	253	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.2*	*1.1*	0.25	*0.3*	
	254	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*2.6*	*1.8*	0.4	*1.4*	
	255	B4	石鏃	珪質岩	3.1	2.1	0.6	3.8	
	256	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	*1.8*	0.3	*0.8*	
	257	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	*1.0*	0.25	*0.2*	
	258	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*1.0*	0.2	*0.3*	
	259	B4	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	*1.1*	0.2	*0.2*	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表③

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
33	260	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.1	0.25	0.3	
	261	B4	石鏃	ホルンフェルス	1.6	1.0	0.2	0.3	
	262	B4	石鏃	泥岩	1.4	1.0	0.2	0.2	
	263	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	0.9	0.2	0.2	
	264	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	0.9	0.15	0.1	
	265	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.2	
	266	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.8	
	267	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.5	
	268	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.95	1.5	0.3	0.7	
	269	B4	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.2	0.25	0.3	
34	270	B4	楔形石器	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.65	1.7	
	271	B4	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.35	1.2	
	272	B4	スクレイパー？	姫島産黒曜石	1.2	1.7	0.4	1.1	
	273	B4	スクレイパー？	姫島産黒曜石	0.9	1.5	0.2	0.3	
	274	B4	スクレイパー？	姫島産黒曜石	1.0	1.2	0.3	0.4	
	275	B4	石匙？	姫島産黒曜石	1.1	1.3	0.35	0.4	
	276	B4	石匙？	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.8	
35	277	D4	磨石	角閃石安山岩	10.6	7.8	6.0	660	
	278	C4	敲石		9.2	14.4	5.2	1020	
	279	C4	敲石		9.2	10.1	4.4	400	上下面とも磨り面の可能性があるが磨滅の為不明
	280	C4	敲石	角閃石安山岩	3.9	4.4	3.6	60.7	
36	281	C4	磨製石斧	千板岩質頁岩	9.4	5.2	2.5	237.1	
40	335	C5	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.6	0.4	1.1	
	336	C5	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.3	0.4	1.0	
	337	D5	石鏃	サヌカイト	2.65	1.7	0.55	1.9	
	338	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.0	0.2	0.1	
	339	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.35	0.3	
	340	B5	石鏃	チャート	1.7	1.3	0.4	0.6	
	341	B5	石鏃	サヌカイト	1.8	1.4	0.2	0.4	
	342	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.6	
	343	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.45	0.8	
	344	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.35	0.5	
	345	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.2	0.2	0.2	
	346	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.25	0.3	
	347	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.5	0.3	0.6	
	348	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.15	0.3	
	349	A5	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.5	
	350	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.2	
	351	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	352	B5	石鏃	ｶﾞﾗｽ質安山岩	1.4	1.5	0.4	0.4	
	353	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.25	0.4	
	354	B5	石鏃	サヌカイト	1.9	1.2	0.25	0.4	
	355	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.3	
	356	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.0	1.3	0.2	0.2	
	357	B5	石鏃	サヌカイト	1.4	1.0	0.25	0.4	
	358	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.25	1.3	0.3	0.3	
	359	A5	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.1	0.25	0.5	
	360	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.25	0.5	
	361	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.3	0.7	
	362	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.35	0.4	
	363	B5	石鏃	サヌカイト	1.4	1.5	0.35	0.6	
	364	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.5	0.4	1.2	
41	365	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.0	0.25	0.3	
	366	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.1	0.25	0.4	
	367	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.45	0.9	
	368	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
	369	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.25	0.5	
	370	B5	石鏃	サヌカイト	1.1	1.2	0.2	0.3	
	371	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.9	0.5	1.8	
	372	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.8	
	373	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	0.8	0.25	0.2	
	374	B5	石匙	姫島産黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.4	
	375	B5	石鏃	姫島産黒曜石	0.9	0.8	0.45	0.2	
	376	B5	石鏃	ｶﾞﾗｽ質安山岩	1.4	1.3	0.3	0.4	
	377	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.1	0.3	0.4	
	378	B5	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.2	1.7	0.3	1.1	
	379	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.2	0.35	1.0	
	380	B5	スクレイパー	安山岩	2.3	1.5	0.7	2.2	
	381	B5	石匙	サヌカイト	2.3	4.3	0.65	4.6	
	382	B5	石鏃	サヌカイト	1.7	1.3	0.2	0.3	
	383	B5	石鏃	チャート	1.8	1.3	0.3	0.5	
	384	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.5	
	385	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.6	
	386	B5	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.6	0.3	0.7	
	387	B5	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	0.9	0.2	0.2	
	388	B5	スクレイパー	姫島産黒曜石	2.0	0.9	0.45	0.7	
42	389	C5	台石		11.9	15.9	2.7	910	
	390	C5	台石		19.3	21.9	6.3	3500	
46	454	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.3	
	455	C6	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.4	
	456	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.7	0.6	1.9	
	457	B6	石鏃	サヌカイト	1.6	1.4	0.2	0.3	
	458	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.2	0.3	0.3	
	459	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.1	0.2	0.2	
	460	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.9	0.35	1.1	
	461	B6	石鏃	珪質岩	2.0	1.9	0.4	0.8	
	462	B6	石鏃	サヌカイト	1.5	1.3	0.4	0.4	
	463	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.6	
	464	A6	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.35	0.6	
	465	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	2.3	0.35	0.7	
	466	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.6	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表④

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
46	467	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.2	0.5	
	468	B6	石鏃	姫島産黒曜石	3.1	2.1	0.35	1.8	
	469	A6	石鏃	金山産サヌカイト	3.2	1.7	0.6	2.7	
	470	B6	石鏃	サヌカイト	1.1	1.5	0.3	0.5	
	471	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.3	0.3	0.4	
	472	B6	石鏃	サヌカイト	1.9	1.7	0.35	1.0	
	473	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	2.0	0.6	2.8	
	474	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.8	
	475	B6	石鏃未成品	黒曜石(西北九州産)	1.5	1.1	0.5	0.8	
	476	B6	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	0.9	0.4	0.6	
	477	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.1	0.25	0.3	
	478	B6	石鏃	黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	479	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.8	0.4	1.3	
	480	B6	石鏃	角閃石安山岩	1.1	1.1	0.2	0.2	
	481	B6	スクレイパー	姫島産黒曜石	2.1	1.7	0.4	1.5	
	482	A6	敲石	安山岩(風化した)	5.2	6.0	2.5	100.1	
47	483	B6	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.35	0.6	
	484	C6	石鏃	サヌカイト	2.1	1.0	0.4	0.5	
	485	C6	石鏃	姫島産黒曜石	3.8	1.9	0.5	2.7	
48	486	B6	スクレイパー	サヌカイト	3.4	7.9	0.8	18.8	
	487	A6	スクレイパー	ガラス質安山岩	3.1	5.1	1.1	12.2	
	488	A6	敲石	安山岩	8.2	4.2	4.0	149	
53	557	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.2	
	558	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.5	
	559	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.7	0.4	0.8	
	560	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.1	0.3	0.3	
	561	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.5	
	562	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.25	0.5	
	563	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.6	
	564	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.6	0.45	0.7	
	565	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.2	0.5	
	566	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.9	0.45	1.2	
	567	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.5	0.45	1.1	
	568	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	3.4	2.6	0.5	4.5	
	569	トレンチ2	石鏃	サヌカイト	1.05	1.8	0.3	0.5	
	570	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.35	0.3	0.7	
	571	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.0	1.9	0.4	0.5	
	572	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.1	0.25	0.8	
	573	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	2.1	0.5	3.2	
	574	トレンチ2	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.6	
	575	トレンチ2	楔形石器	姫島産黒曜石	2.9	2.4	0.7	4.3	
	576	トレンチ2	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.1	3.1	0.8	10.8	
54	577	トレンチ2	スクレイパー	粘板岩	4.9	5.5	1.1	33.2	
	578	トレンチ2	磨石	角閃石安山岩	8.9	5.9	3.4	255.7	
	579	トレンチ2	磨石	角閃石安山岩	6.5	5.5	3.9	189.7	
58	609	C7	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.3	0.4	0.9	
	610	E7	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.65	0.3	0.5	
	611	C7	石鏃	サヌカイト	4.2	1.4	0.3	2.3	
	612	E7	石鏃	姫島産黒曜石	3.4	1.75	0.5	1.9	
	613	D7	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.6	0.4	0.7	
	614	B7	石鏃	珪質岩	1.5	1.2	0.2	0.1	
	615	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	0.95	0.25	0.2	
	616	B7	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.1	0.35	0.4	
	617	B7	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.95	0.3	1.0	
	618	A7	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.8	0.25	1.1	
	619	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.3	0.2	0.2	
	620	B7	石鏃	サヌカイト	2.2	1.25	0.35	0.5	
	621	A7	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	2.0	0.3	1.0	
	622	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.4	
	623	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.4	
	624	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.5	0.4	0.6	
	625	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.4	0.25	0.3	
	626	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.6	0.2	0.3	
	627	B7	石鏃	サヌカイト	2.0	2.35	0.4	1.2	
	628	B7	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.8	0.3	0.8	
	629	B7	石鏃	サヌカイト	1.5	1.4	0.35	0.7	
	630	A7	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.5	
	631	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.3	0.2	0.3	
	632	B7	石鏃	サヌカイト	1.35	1.4	0.45	0.7	
	633	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.4	0.3	0.4	
	634	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.6	0.5	0.7	
	635	B7	石鏃	サヌカイト	1.6	1.4	0.3	0.6	
	636	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.6	0.5	0.9	
	637	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.35	0.6	1.0	
59	638	A7	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.35	0.8	
	639	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.6	0.6	1.4	
	640	B7	石鏃	サヌカイト	2.4	1.8	5.5	1.8	
	641	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	1.15	0.2	0.3	
	642	B7	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.0	0.35	0.6	
	643	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	0.8	0.4	0.3	
	644	A7	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.45	1.5	
	645	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.75	1.5	0.4	0.8	
	646	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.95	1.3	0.4	0.8	
	647	A7	スクレイパー	黒曜石	3.1	2.3	0.5	0.3	
	648	B7	磨石	角閃石安山岩	6.3	8.4	2.7	179.3	
	649	C7	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.1	0.2	0.3	
	650	C7	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.3	0.3	0.7	
	651	B7	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.4	0.4	0.6	
	652	B7	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.7	0.4	1.1	
	653	C7	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.8	
	654	B7	石鏃	姫島産黒曜石	1.85	1.2	0.35	0.5	
	655	C7	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	0.7	0.3	0.2	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑤

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
59	656	D7	台石	角閃安山岩	47.3	37.3	16.5	33000	
60	657	B7	磨製石斧	蛇紋岩	6.6	2.7	1.2	39.6	
66	771	D8	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.6	0.5	0.6	
	772	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.6	0.4	1.1	
	773	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.9	0.3	0.6	
	774	D8	石鏃	姫島産黒曜石	2.35	2.0	0.5	1.5	
	775	D8	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	1.45	0.35	0.6	
	776	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.3	0.3	1.2	
	777	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.8	0.4	2.0	
	778	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.6	0.4	1.2	
	779	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.7	
	780	C8	石鏃	サヌカイト	1.6	1.3	0.2	0.5	
	781	D8	石鏃	姫島産黒曜石	2.85	1.2	0.3	0.9	
67	782	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.2	0.4	0.8	
	783	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.8	0.4	1.1	
	784	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.4	裏面は大きな剥離面を残す
	785	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.5	0.3	0.3	
	786	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.0	0.3	0.4	
	787	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.3	0.3	0.6	
	788	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	0.7	0.3	0.3	
	789	B8	石鏃	サヌカイト	1.9	1.7	0.4	0.6	
	790	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.0	0.3	0.5	
	791	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.9	0.3	0.9	
	792	C8	石鏃	サヌカイト	1.3	1.3	0.2	0.3	
	793	B8	石鏃	サヌカイト	1.4	1.5	0.2	0.5	
	794	C8	石鏃	サヌカイト	1.7	1.2	0.3	0.4	
	795	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.1	0.2	0.2	
	796	B8	石鏃	サヌカイト	1.4	1.3	0.3	0.4	
	797	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.2	0.2	0.3	
	798	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.4	0.3	0.4	
	799	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.1	0.2	0.2	
	800	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.5	0.5	0.9	
	801	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.2	0.2	0.3	
	802	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.78	
	803	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.6	
	804	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.5	
	805	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.5	
	806	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.6	0.5	1.1	
	807	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.5	
	808	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.4	
	809	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.2	0.5	0.6	
	810	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.4	0.5	
	811	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.7	0.3	0.6	
	812	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.3	0.4	0.6	
	813	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.5	
	814	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.5	0.4	0.7	
	815	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.0	1.3	0.3	0.4	
68	816	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.9	0.4	1.0	
	817	B8	石鏃	サヌカイト	2.4	1.6	0.3	1.1	
	818	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.9	0.4	1.5	
	819	B8	石鏃	サヌカイト	2.0	1.5	0.3	0.8	
	820	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.5	0.3	0.7	
	821	B8	石鏃	サヌカイト	3.2	1.8	0.4	2.5	
	822	B8	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.2	1.0	0.5	0.9	
	823	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.0	0.4	0.7	
	824	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.0	0.3	0.4	
	825	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.5	0.3	0.7	
	826	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	0.9	0.3	0.5	
	827	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.5	1.1	
	828	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.0	0.3	0.3	
	829	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.0	0.3	0.5	
	830	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.2	脚の可能性あり
	831	B8	石鏃	サヌカイト	2.4	1.4	0.4	0.9	
	832	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.5	
	833	B8	石鏃	サヌカイト	1.6	1.3	0.4	0.8	
	834	B13	磨石・敲石		8.3	7.6	5.4	392.7	
	835	B8	台石		37.2	17.3	7.5	8000	
69	836	B8	敲石	角閃石安山岩	6.0	6.9	3.8	185.7	
	837	C8	敲石	安山岩(風化した)	7.1	5.8	4.8	244.7	
	838	B8	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.3	
	839	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.4	0.4	0.8	
	840	B8	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.5	0.4	0.6	
	841	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.7	
	842	B8	石鏃	サヌカイト	1.3	1.2	0.2	0.3	
	843	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.2	0.3	
	844	C8	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.2	0.4	0.4	
	845	C8	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.1	0.5	1.0	
	846	B8	スクレイパー	姫島産黒曜石	1.9	0.9	0.2	0.4	
	847	B8	磨石		17.2	12.3	4.4	1180	
74	937	C9	石鏃未成品	泥岩	3.2	2.1	0.9	6.0	
	938	C9	石錐	姫島産黒曜石	3.6	1.5	0.6	1.7	
75	939	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.8	0.3	0.4	
	940	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.6	
	941	C9	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.5	0.4	0.8	
	942	C9	石鏃	サヌカイト	2.1	1.5	0.2	0.5	
	943	C9	石鏃	姫島産黒曜石	0.8	1.1	0.2	0.2	
	944	B9	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.8	0.4	0.8	
	945	C9	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.9	
	946	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.4	
	947	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.5	0.2	0.5	
	948	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.2	0.2	0.3	
	949	B9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	1.0	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑥

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕				備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
75	950	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.2	0.4	
	951	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.6	
	952	B9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.6	
	953	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.7	0.4	1.0	
	954	C9	石鏃	黒曜石(西北九州産)	2.0	0.9	0.4	0.7	
	955	C9	石鏃	珪質岩	0.7	0.8	0.2	0.1	
	956	C9	石鏃	サヌカイト	2.4	1.5	0.5	1.1	
	957	C9	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	2.0	0.5	2.3	
	958	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.3	
	959	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.3	0.3	0.6	
	960	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.4	
	961	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	0.9	0.3	0.4	
	962	C9	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	0.9	0.3	0.4	
	963	C9	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.1	1.5	0.5	1.3	
	964	C9	台石	角閃安山岩	36.2	20.3	7.0	6800	
81	1056	C10	石鏃	サヌカイト	3.3	1.8	0.4	1.8	
	1057	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.7	
	1058	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.6	0.3	0.7	
	1059	C10	石鏃	サヌカイト	2.0	1.2	0.3	0.8	
	1060	B10	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.35	0.7	
	1061	B10	石鏃	サヌカイト	1.4	1.5	0.35	0.5	
	1062	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.2	0.4	0.7	
	1063	C10	石鏃	サヌカイト	2.6	1.8	0.5	1.2	
	1064	B10	石鏃	サヌカイト	2.9	1.7	0.35	1.3	
	1065	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.3	0.7	
	1066	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.3	
	1067	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	2.6	0.4	1.3	
	1068	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.7	0.3	1.1	
	1069	D10	石鏃	姫島産黒曜石	3.1	1.75	0.3	1.0	
	1070	D10	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.1	0.3	0.5	
	1071	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.5	
	1072	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.4	0.2	0.3	
82	1073	C10	石鏃	サヌカイト	1.5	1.6	0.2	0.4	
	1074	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.4	
	1075	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.8	0.3	1.0	
	1076	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.5	
	1077	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.5	0.3	0.7	
	1078	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.8	0.3	0.7	
	1079	D10	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.75	0.3	0.7	
	1080	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.6	
	1081	C10	石鏃	サヌカイト	2.7	1.7	0.3	0.9	
	1082	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.4	0.3	0.4	
	1083	C10	石鏃	サヌカイト	1.5	1.9	0.4	1.7	
	1084	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.5	0.4	0.9	
	1085	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	2.1	0.4	1.4	
	1086	D10	石鏃	姫島産黒曜石	2.55	1.8	0.45	1.9	
	1087	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	0.9	0.3	0.2	
	1088	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.5	
	1089	C10	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.4	
	1090	C10	石鏃	チャート?	2.7	1.8	0.5	1.8	
	1091	D10	石鏃	姫島産黒曜石	1.55	1.05	0.25	0.3	
	1092	C10	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.0	
	1093	D10	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.6	0.4	0.7	
83	1094	C10	スクレイパー	姫島産黒曜石	4.1	3.1	1.2	13.9	
	1095	C10	スクレイパー	サヌカイト	4.4	5.2	0.8	17.7	
	1096	C10	スクレイパー	サヌカイト	3.9	5.8	0.75	15.8	
	1097	C10	スクレイパー	姫島産黒曜石	4.6	8.0	0.75	28.5	
84	1098	C10	台石	角閃安山岩	54.5	46.3	12.1	37000	
88	1154	D11	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.8	0.45	0.5	
	1155	C11	石鏃未成品	姫島産黒曜石	4.1	2.1	1.0	6.9	
	1156	D11	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.2	1.55	0.55	1.6	
	1157	D11	原石	姫島産黒曜石	3.4	2.3	1.1	8.4	小円礫
	1158	D10	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.3	0.3	0.7	
	1159	C11	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.5	0.3	0.9	
	1160	C11	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.2	0.4	
	1161	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.2	0.5	0.8	
	1162	D11	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.4	0.5	
	1163	C11	石鏃	姫島産黒曜石	3.7	1.7	0.4	2.0	
	1164	B11	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.2	0.3	0.7	
	1165	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.3	0.4	1.2	
	1166	B11	石鏃	姫島産黒曜石	2.35	1.2	0.4	0.9	
	1167	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.2	0.3	0.7	
	1168	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.8	0.3	1.4	
	1169	B11	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	2.0	0.6	2.9	
	1170	B11	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.4	0.5	1.4	
	1171	D11	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.5	0.2	0.7	
	1172	C11	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.3	0.3	0.5	
89	1173	C11	石匙	姫島産黒曜石	2.3	4.1	0.8	6.5	
	1174	C11	敲石		11.5	13.8	5.8	960	
	1175	C11	敲石		12.0	9.1	6.6	970	
	1176	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.6	0.5	1.0	
	1177	C11	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.4	0.3	0.3	
	1178	C11	石鏃未成品	姫島産黒曜石	3.1	1.9	0.5	2.1	
	1179	C11	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.7	0.4	1.4	
	1180	C11	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.3	0.3	0.6	
	1181	C11	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	0.9	0.2	0.2	
90	1182	C11	スクレイパー	サヌカイト	5.4	8.0	0.9	52.6	
	1183	C11	磨石	角閃石安山岩	9.6	4.8	5.5	326.3	
	1184	C11	台石	角閃安山岩	42.7	33.4	10.0	18800	
	1185	C11	台石		23.9	23.6	7.2	5500	
	1186	D11	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.4	0.6	
	1187	D11	石鏃	姫島産黒曜石	1.25	1.45	0.4	0.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑦

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
93	1217	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.6	
	1218	C12	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.2	0.2	0.6	
	1219	C12	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	2.4	0.4	1.5	
	1220	C12	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.3	0.4	1.2	
	1221	D12	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.6	1.75	0.5	2.3	
	1222	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.9	0.4	1.5	
	1223	C12	石鏃	姫島産黒曜石	3.1	1.8	0.4	1.9	
	1224	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.5	0.5	1.3	
	1225	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.5	0.5	2.3	
	1226	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.1	0.3	0.7	
	1227	C12	石鏃	姫島産黒曜石	1.4	1.3	0.3	0.8	
	1228	C12	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.8	
	1229	C12	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.8	
	1230	C12	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.8	
	1231	C12	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	0.8	0.3	0.2	
	1232	D12	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.65	0.4	1.2	
	1233	C12	石核	姫島産黒曜石	5.7	7.3	3.3	112.3	
94	1234	C12	磨石・敲石		13.7	13.1	10.6	2620	
	1235	C12	磨石・敲石		14.0	12.0	7.4	1350.0	
	1236	C12	磨石・敲石		8.0	8.7	4.0	275.7	
	1237	C12	磨石・敲石		9.8	6.2	4.0	315.0	
	1238	C12	磨石・敲石		13.0	6.3	3.2	383.9	
	1239	C12	磨石・敲石	輝石安山岩	13.0	21.6	14.0	4700	
	1240	C12	磨石・敲石	角閃石安山岩	8.8	7.5	5.0	460	
95	1241	C12	磨石・敲石	角閃石安山岩	8.7	9.6	4.8	520	
	1242	C12	台石		14.5	18.9	3.8	1380	
	1243	C12	台石	風化した角閃安山岩	31.9	34.7	11.1	13400	
96	1244	C12	スクレイパー	サヌカイト	6.6	2.1	0.7	8.8	
	1245	C12	石錘	角閃安山岩	4.3	4.1	2.1	37.1	
101	1318	C13	石鏃	姫島産黒曜石	3.3	1.75	0.45	2.5	
	1319	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.3	0.3	0.7	
	1320	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.8	0.3	1.1	
	1321	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.0	0.2	0.4	
	1322	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.6	
	1323	B13	石鏃	姫島産黒曜石	4.2	1.4	0.4	2.3	
	1324	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.4	0.4	1.5	
	1325	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.5	0.5	1.9	
	1326	B13	石鏃	サヌカイト	2.8	2.0	0.5	2.3	
	1327	B13	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.5	0.5	2.0	
	1328	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.6	0.3	1.0	
	1329	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.4	1.1	
	1330	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.4	0.4		
	1331	C13	石鏃	サヌカイト	1.7	2.2	0.5	1.5	
	1332	B13	石鏃	サヌカイト	2.1	1.6	0.4	1.2	
	1333	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	
	1334	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	2.2	0.5	2.0	
	1335	C13	石鏃	サヌカイト	2.4	1.9	0.4	2.5	
	1336	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.5	0.4	1.3	
	1337	C13	石鏃	サヌカイト	3.2	1.6	0.4	1.8	
	1338	B13	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.7	0.4	1.5	
	1339	B13	石鏃	サヌカイト	2.4	2.1	0.5	2.8	
	1340	B13	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.7	0.5	2.1	
	1341	B13	石鏃	サヌカイト	2.5	1.9	0.4	2.4	
	1342	C13	石鏃	姫島産黒曜石	3.7	1.7	0.4	2.2	
	1343	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.3	
	1344	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.3	0.3	0.9	
102	1345	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.65	0.3	0.9	
	1346	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.6	0.5	1.5	
	1347	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.3	0.9	
	1348	B13	石鏃	サヌカイト	2.2	2.1	0.5	2.8	
	1349	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.3	0.4	0.7	
103	1350	C13	石匙か	姫島産黒曜石	4.0	2.8	0.8	8.8	
	1351	C13	スクレイパー	姫島産黒曜石	3.0	4.4	1.0	12.9	
104	1352	B13	磨石・敲石	角閃石安山岩	10.1	11.2	3.6	530.0	
	1353	B13	磨石・敲石	角閃石安山岩	6.5	6.4	3.3	201.5	
	1354	C13	磨石・敲石		8.6	6.1	4.0	299.1	
105	1355	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5	
	1356	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.8	0.4	1.0	
	1357	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.5	
	1358	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	2.0	0.4	1.2	
	1359	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.3	0.5	1.0	
	1360	C13	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.7	0.5	2.4	
	1361	C13	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.9	0.55	1.6	
	1362	C13	石鏃	サヌカイト	1.2	0.9	0.3	0.3	
106	1363	C13	磨石・敲石		9.2	8.7	5.4	540	
	1364	C13	磨石・敲石	角閃石安山岩	10.0	7.9	9.1	610	
	1365	C13	磨石・敲石		9.6	12.6	3.8	710	
	1366	C13	磨石・敲石		8.0	8.5	4.1	352.6	
107	1367	D13	台石		25.5	34.0	13.0	13600	
	1368	D13	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.45	0.4	0.6	
	1369	D13	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	0.9	0.2	0.2	
	1370	C13	敲石		7.8	9.2	6.5	480	
	1371	C13	敲石		7.9	8.1	5.4	400	
108	1372	C13	石匙	サヌカイト	8.9	4.5	0.6	28.6	
	1373	C13	石匙	サヌカイト	2.6	3.9	0.6	2.4	
	1374	C13	スクレイパー	サヌカイト	4.3	5.6	0.5	9	
	1375	C13	スクレイパー	サヌカイト	6.7	5.8	1.4	60.9	
113	1428	D14	石核	サヌカイト	11.4	5.9	1.9	91.6	
114	1429	B14	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.8	0.4	0.8	
	1430	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.8	0.35	0.8	
	1431	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.4	1.1	
	1432	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.35	1.7	0.35	0.7	
	1433	B14	石鏃	サヌカイト	2.0	1.9	0.6	2.6	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑧

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
114	1434	C14	石鏃未成品	サヌカイト	2.8	1.9	0.3	2.5	
	1435	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.5	0.6	1.5	
	1436	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.1	0.3	0.7	
	1437	C14	石鏃	サヌカイト	3.35	1.6	0.4	1.7	
	1438	C14	石鏃	姫島産黒曜石	3.3	1.8	0.4	1.7	
	1439	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.35	0.4	1.4	
	1440	B14	石鏃	サヌカイト	3.0	1.3	0.3	1.2	
	1441	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	1.1	0.4	1.2	
	1442	B14	石鏃	姫島産黒曜石	3.9	1.7	0.6	3.4	
	1443	B14	石鏃	サヌカイト	2.2	2.0	0.5	2.0	
	1444	B14	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	2.2	0.5	2.7	
	1445	C14	石鏃	サヌカイト	2.5	2.6	0.4	3.6	
	1446	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.9	0.4	1.4	
	1447	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.1	1.3	0.35	0.9	
	1448	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.2	0.3	0.4	
	1449	B14	石鏃未成品	姫島産黒曜石	2.8	1.9	0.6	2.7	
115	1450	C14	スクレイパー	サヌカイト	4.5	6.6	0.8	24.2	
	1451	B14	スクレイパー	姫島産黒曜石	1.2	1.6	0.3	0.6	
	1452	B14	敲石	角閃石安山岩	6.9	5.5	3.5	156.3	
116	1453	C14	台石		15.7	25.3	4.8	2900	
117	1454	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.6	
	1455	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.6	
	1456	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.7	
	1457	C14	石鏃	姫島産黒曜石	3.3	1.3	0.4	1.1	
	1458	B14	石鏃	姫島産黒曜石	3.2	1.3	0.4	1.3	
	1459	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.2	0.2	0.7	
	1460	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.4	1.3	
118	1461	C14	磨石		8.2	9.4	7.0	630	
	1462	C14	台石	角閃輝石安山岩	52.8	47.0	14.1	43000	
119	1463	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.7	0.4	1.2	
	1464	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	2.0	0.35	0.8	
	1465	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.6	0.3	0.7	
	1466	C14	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.4	0.45	1.2	
	1467	C14	石鏃	サヌカイト	1.35	0.9	0.25	0.4	
	1468	B14	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.2	0.3	0.9	
120	1469	C14	石匙	姫島産黒曜石	3.2	1.9	0.6	5.4	
	1470	C14	敲石		7.6	12.0	5.8	670	
121	1471	C14	台石		30.3	30.7	12.3	12300	
	1472	D14	台石		26.9	29.3	10.0	13800	
122	1473	C14	石鏃	姫島産黒曜石	1.75	1.4	0.4	0.5	
	1474	B14	石鏃	姫島産黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.9	
	1475	D14	石鏃	姫島産黒曜石	3.85	1.7	0.55	2.5	
125	1525	トレンチ1	石鏃	サヌカイト	2.5	1.5	0.3	0.8	
	1526	トレンチ1	石鏃	サヌカイト	1.6	1.8	0.3	0.8	
	1527	トレンチ1	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.2	0.4	1.3	
	1528	トレンチ1	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.4	0.3	1.2	
	1529	トレンチ1	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.6	0.5	1.9	
	1530	トレンチ1	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	1.7	0.2	0.6	
	1531	トレンチ1	石鏃	サヌカイト	2.3	1.5	0.4	1.0	
	1532	トレンチ1	石鏃	姫島産黒曜石	1.2	1.6	0.3	0.4	
131	1595	C15/C16	石鏃	姫島産黒曜石	3.9	1.8	0.4	2.2	
	1596	B15	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.5	0.4	1.0	
	1597	D15	石鏃	姫島産黒曜石	2.05	1.3	0.35	0.7	
	1598	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.1	1.8	0.45	1.8	
	1599	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.5	0.35	0.7	
	1600	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.0	
	1601	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.6	0.35	0.5	
	1602	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.45	0.3	0.6	
	1603	B15	石鏃	サヌカイト	1.8	1.4	0.4	0.7	
	1604	B15	石鏃	姫島産黒曜石	3.1	1.3	0.4	1.3	
	1605	B15	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.2	0.3	0.8	
	1606	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.6	0.45	1.0	
	1607	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.35	0.4	1.2	
	1608	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.65	0.35	0.9	
	1609	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	2.0	0.35	0.9	
	1610	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.5	0.3	0.8	
	1611	B15	石鏃	姫島産黒曜石	3.3	1.4	0.5	1.8	
	1612	C15	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.5	0.3	1.6	
	1613	C15	石鏃	サヌカイト	2.9	1.5	0.5	2.0	
132	1614	C15	石鏃	姫島産黒曜石	3.8	1.6	0.35	1.6	
	1615	B15	石鏃	サヌカイト	2.4	1.3	0.5	1.5	
	1616	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.6	1.4	0.3	0.9	
	1617	B15	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.3	0.3	0.7	
	1618	B15	石鏃	サヌカイト	2.4	2.4	0.4	2.7	
	1619	B15	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.2	0.4	1.0	
	1620	B15	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.5	
	1621	B15	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.8	0.6	1.5	
	1622	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	2.0	0.35	1.2	
	1623	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.7	1.2	0.3	0.7	
	1624	C15	石鏃	姫島産黒曜石	3.2	1.3	0.4	1.5	
	1625	C15	石鏃	サヌカイト	2.6	1.4	0.45	1.4	
	1626	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.5	0.25	1.1	
	1627	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.3	2.0	0.5	2.5	
	1628	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.3	1.25	0.35	0.5	
	1629	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.6	0.4	1.3	
	1630	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.05	1.5	0.25	0.7	
	1631	B15	石鏃	サヌカイト	1.5	1.1	0.2	0.3	
	1632	B15	石鏃		1.4	1.2	0.2	0.5	
	1633	C15	石鏃未成品	サヌカイト	3.1	2.0	0.6	4.0	
	1634	C15	石鏃未成品	姫島産黒曜石	3.2	2.9	0.6	6.1	
	1635	C15	スクレイパー？	姫島産黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.9	
	1636	C15	石錐	姫島産黒曜石	2.7	0.8	0.4	1.4	
133	1637	C15	敲石		10.8	11.6	6.1	740	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑨

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量 〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
133	1638	C15	磨石		10.0	11.1	6.7	*920*	
	1639	C15	敲石		6.1	*9.8*	5.8	*295.4*	
	1640	C15	磨石		7.6	25.0	6.0	1620	
	1641	B15	磨石		*36.8*	34.7	5.6	*12200*	
	1642	C15	台石	角閃安山岩	33.5	42.3	15.1	35300	
134	1643	C15	石鏃	姫島産黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.7	
	1644	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*2.2*	*1.65*	0.4	*0.9*	
	1645	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.25	0.3	0.5	
	1646	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*2.5*	*2.2*	0.3	*1.2*	
	1647	C15	石鏃	サヌカイト	*1.7*	*1.5*	0.4	*0.7*	
	1648	C15	石鏃	姫島産黒曜石	1.65	1.45	0.25	0.4	
	1649	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*1.45*	1.8	0.3	*0.5*	
	1650	D15	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	1.9	0.3	*0.8*	
	1651	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*1.3*	1.3	0.3	*0.4*	
	1652	C15	石鏃	サヌカイト	*2.2*	1.5	0.4	*1.7*	
	1653	D15	石鏃	姫島産黒曜石	*2.35*	2.15	0.65	*3.0*	
	1654	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*2.4*	*1.65*	0.3	*1.0*	
	1655	C15	石鏃	サヌカイト	*2.6*	*1.7*	0.5	*1.5*	
	1656	C15	石鏃	姫島産黒曜石	*2.15*	*1.25*	0.35	*1.2*	
	1657	C15	スクレイパー	姫島産黒曜石	2.9	2.5	0.75	5.2	
	1658	C15	敲石		*10.5*	9.1	5.6	*580*	
	1659	C15	磨石		8.0	7.8	5.7	430	
	1660	C15	磨石		13.0	10.2	6.3	1110	
135	1661	D15	台石		27.0	37.0	7.8	9600	
	1662	C15	台石		27.6	27.6	8.2	8500	
136	1663	C15	台石		*17.7*	9.6	3.8	*10000*	
	1664	C15	台石		32.7	57.4	11.5	35000	
137	1665	B15	スクレイパー	サヌカイト	3.6	6.4	0.5	11.7	
	1666	B15	スクレイパー	サヌカイト	7.7	11.5	1.4	65.2	
141	1698	D16/D17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.1*	1.1	0.4	*0.4*	
	1699	C16/C17	石鏃	黒曜石(西北九州産)	2.05	1.8	0.3	0.6	
	1700	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	1.75	0.45	*1.1*	
	1701	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*2.1*	*1.45*	0.3	*0.6*	
	1702	C16	石鏃	サヌカイト	1.8	*1.25*	0.35	*0.5*	
	1703	D16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	1.5	0.4	*0.6*	
	1704	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*2.3*	1.4	0.45	*1.1*	
	1705	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	1.1	0.2	*0.7*	
	1706	C16	石鏃	姫島産黒曜石	2.65	1.2	0.4	0.9	
	1707	C16	石鏃	姫島産黒曜石	3.0	1.7	0.4	1.7	
	1708	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*3.2*	*1.6*	0.4	*2.4*	
	1709	C16	石鏃	姫島産黒曜石	3.6	1.55	0.3	1.7	
	1710	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*2.8*	*1.9*	0.5	*2.7*	
	1711	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.55*	1.65	0.35	*0.9*	
	1712	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.75*	1.3	0.25	*0.6*	
	1713	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.55*	1.5	0.3	*0.6*	
	1714	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	1.55	0.4	*0.9*	
	1715	C16	石鏃	サヌカイト	2.9	1.9	0.4	2.5	
	1716	C16	石鏃	姫島産黒曜石	1.95	1.6	0.3	0.9	
	1717	C16	石鏃	姫島産黒曜石	2.25	*1.25*	0.45	*1.1*	
	1718	C16	石鏃	姫島産黒曜石	3.1	1.3	0.4	1.4	
	1719	C16	石鏃	姫島産黒曜石	2.8	1.5	0.4	1.7	
142	1720	C16	石鏃	サヌカイト	3.65	1.5	0.5	2.5	
	1721	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.5*	1.6	0.35	*0.8*	
	1722	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*3.0*	1.2	0.45	*1.1*	
	1723	C16/C17	石鏃	サヌカイト	*1.9*	1.35	0.25	*0.5*	
	1724	C16/C17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.45*	1.1	0.3	*0.4*	
143	1725	C16	石匙	サヌカイト	5.2	2.1	0.7	9.7	
	1726	C16	スクレイパー	サヌカイト	4.1	2.7	0.3	4.1	
144	1727	D16	スクレイパー	サヌカイト	3.3	7.3	0.9	15.4	
	1728	D16	敲石		9.4	13.0	9.0	1370.0	
145	1729	C16	石鏃	姫島産黒曜石	2.4	1.75	0.4	1.1	
	1730	C16	石鏃	サヌカイト	2.25	1.7	0.3	0.9	
	1731	C16/C17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.6*	2.0	0.3	*0.6*	
	1732	C16	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.5	0.3	0.8	
	1733	C16/C17	石鏃	サヌカイト	2.0	1.5	0.35	0.8	
	1734	C16	石鏃未成品	姫島産黒曜石	3.25	1.5	0.5	2.3	
	1735	C16/C17	石鏃	姫島産黒曜石	2.2	*1.5*	0.35	*0.8*	
	1736	C16	石鏃	姫島産黒曜石	*1.55*	1.2	0.3	*0.6*	
	1737	C16	石鏃	サヌカイト	1.7	1.5	0.35	0.7	
	1738	D16	石鏃	サヌカイト	*1.9*	2.5	0.3	*1.5*	
149	1779	D17/D18	石鏃	サヌカイト	3.6	2.0	0.65	3.4	
	1780	C17	石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.65	0.3	0.6	
	1781	C17/C18	石鏃	姫島産黒曜石	2.9	*1.45*	0.4	*0.8*	
	1782	C17	石鏃	サヌカイト	2.6	*2.25*	0.35	*1.3*	
	1783	C17	石鏃	サヌカイト	2.4	2.4	0.4	1.4	
	1784	C17/C18	石鏃	黒曜石(西北九州産)	1.8	*1.3*	0.25	*0.4*	
	1785	C17	石鏃	サヌカイト	2.15	1.55	0.25	0.6	
	1786	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.9*	1.65	0.4	*1.2*	
	1787	C17	石鏃	サヌカイト	*2.35*	2.0	0.35	*1.6*	
	1788	C17	石鏃	姫島産黒曜石	1.6	1.25	0.4	0.5	
	1789	C17	石鏃	姫島産黒曜石	3.5	1.45	0.5	1.9	
	1790	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*3.0*	1.45	0.35	*1.6*	
	1791	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.8*	1.8	0.5	*1.6*	
	1792	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*1.1*	2.1	0.4	*1.0*	
150	1793	C17/C18	石鏃	サヌカイト	2.2	1.1	0.4	0.8	
	1794	C17/C18	石鏃	サヌカイト	1.85	1.1	0.3	0.6	
	1795	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*2.15*	*1.4*	0.4	*1.0*	
	1796	C17	石鏃	姫島産黒曜石	*2.3*	*1.55*	0.4	*1.2*	
	1797	C17	楔形石器	姫島産黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.8	
	1798	C17	石核	サヌカイト	8.1	12.8	1.9	236.0	
151	1799	C17	石匙	サヌカイト	*8.8*	5.2	0.6	*25.6*	

岩鼻岩陰遺跡出土石器観察表⑩

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	石材	法量 〔斜体は残存値〕 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
152	1800	C17	磨石	角閃石安山岩	7.1	6.2	5.8	365.2	
153	1801	C7	台石	角閃輝石安山岩	15.1	31.7	4.3	300	
155	1814	C18	石鏃	姫島産黒曜石	*1.4*	1.3	0.35	*0.6*	
	1815	D18	石鏃	姫島産黒曜石	1.9	1.8	0.45	0.7	
	1816	D18	石鏃	姫島産黒曜石	*2.0*	1.3	0.35	*0.6*	
156	1817	D19	石鏃	姫島産黒曜石	*2.6*	*2.0*	0.6	*2.2*	
158	1818	排土	石鏃	姫島産黒曜石	*2.3*	1.7	0.45	*1.3*	
	1819	試掘	石鏃	姫島産黒曜石	*1.65*	2.25	0.35	*1.3*	
	1820	排土	石鏃	姫島産黒曜石	*2.2*	*1.3*	0.5	*1.4*	
	1821	排土	石鏃	姫島産黒曜石	*3.4*	1.6	0.45	*2.4*	
	1822	試掘	石鏃	姫島産黒曜石	*3.65*	2.3	0.5	*3.4*	
	1823	SK003	石鏃	姫島産黒曜石	2.7	1.7	0.45	1.9	
	1824	排土	石鏃	姫島産黒曜石	*2.35*	1.1	0.3	*0.7*	
	1825	排土	石鏃	姫島産黒曜石	*2.35*	*1.15*	0.3	*0.7*	
	1826	表土	石鏃	サヌカイト	2.6	1.35	0.3	1.0	
	1827	SK002	石匙	サヌカイト	4.8	4.5	0.7	16.0	

岩鼻岩陰遺跡出土玉類観察表

挿図番号	遺物番号	調査区名	器種	法量 長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	色調	石材	試料番号
146	1739	C16	勾玉	1.45	0.6	0.15	0.3	明緑灰色	滑石	IBIK-002
	1740	C16	勾玉	1.15	0.65	—	0.4	明緑灰色	クロム白雲母	IBIK-009
	1741	C16	勾玉	0.85	0.5	0.1	0.1	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-006
	1742	C16	勾玉	0.5	0.4	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-008
	1743	C16	垂飾	0.45	0.25	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-019
	1744	C16	管玉	0.3	0.3	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-015
	1745	C16	小玉	0.75	0.6	0.35	0.3	明緑灰色	クロム白雲母	IBIK-018
	1746	C16	丸玉	0.4	0.55	0.2～0.35	0.2	明緑灰色	翡翠	IBIK-013
	1747	C16	垂飾	0.55	0.3	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-001
	1748	C16	垂飾	0.45	0.5	0.1	0.1	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-014
	1749	C16	垂飾	0.45	0.4	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-011
	1750	C16	垂飾	0.6	0.35	0.1	0.1	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-016
	1751	C16	垂飾	0.45	0.4	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-017
	1752	C16	垂飾	0.6	0.3	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-004
	1753	C16	垂飾	0.6	0.4	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-010
	1754	C16	垂飾	0.45	0.3	0.1	—	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-005
	1755	C16	垂飾	0.55	0.3	0.1	0.2	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-007
	1756	C16	垂飾	0.6	0.3	0.1	0	暗緑色	クロム白雲母	IBIK-003
	1757	C16	剥片？	0.45	0.4	—	—	暗灰色	翡翠	IBIK-012

写　真　図　版

岩鼻岩陰遺跡全景（南から）

岩鼻岩陰遺跡全景（東から）

岩鼻岩陰遺跡と周辺の地形（南から）

岩鼻岩陰遺跡と周辺の地形（北から）

南半（11～19区）完掘状況

北半（1～10区）完掘状況

調査前の状況

調査状況

篩作業

晩期集中部①
遺物出土状況

14区
焼土6と台石

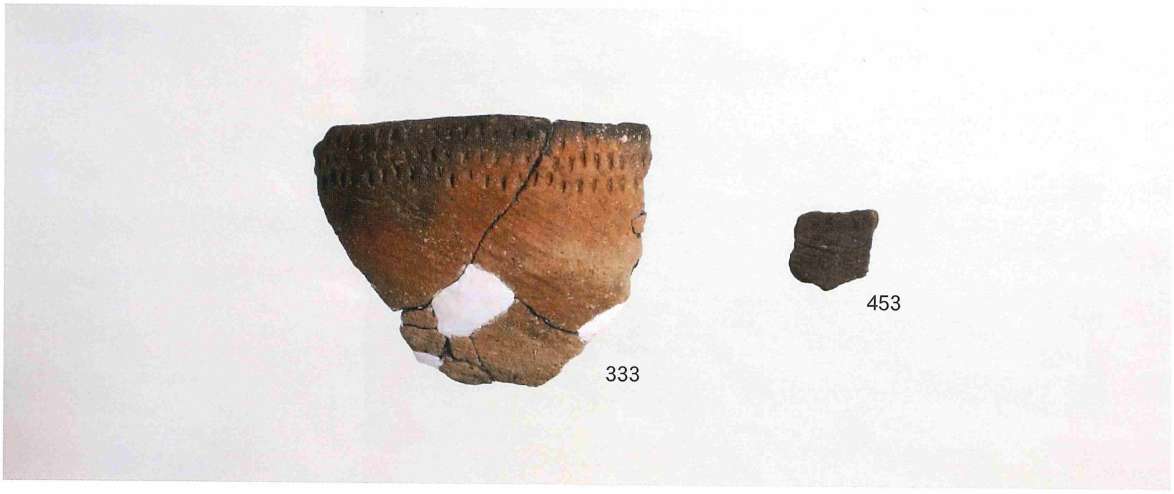
10区
焼土10

10区
焼土9

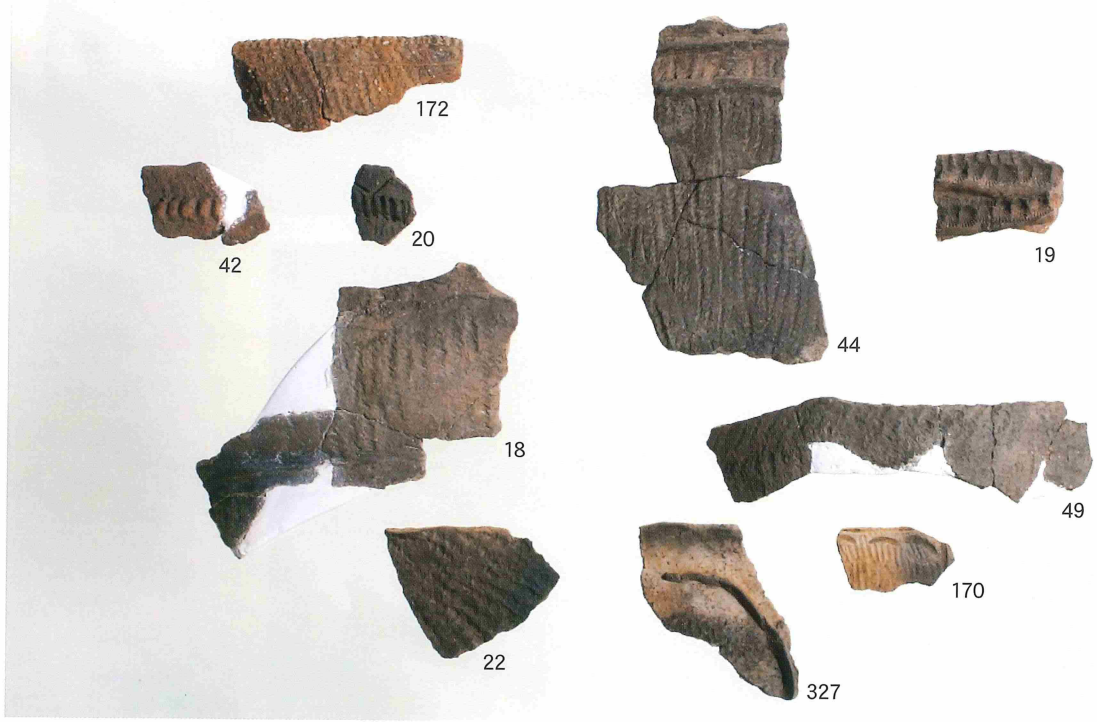
16区北側土層

1区北側土層

縄文時代前期

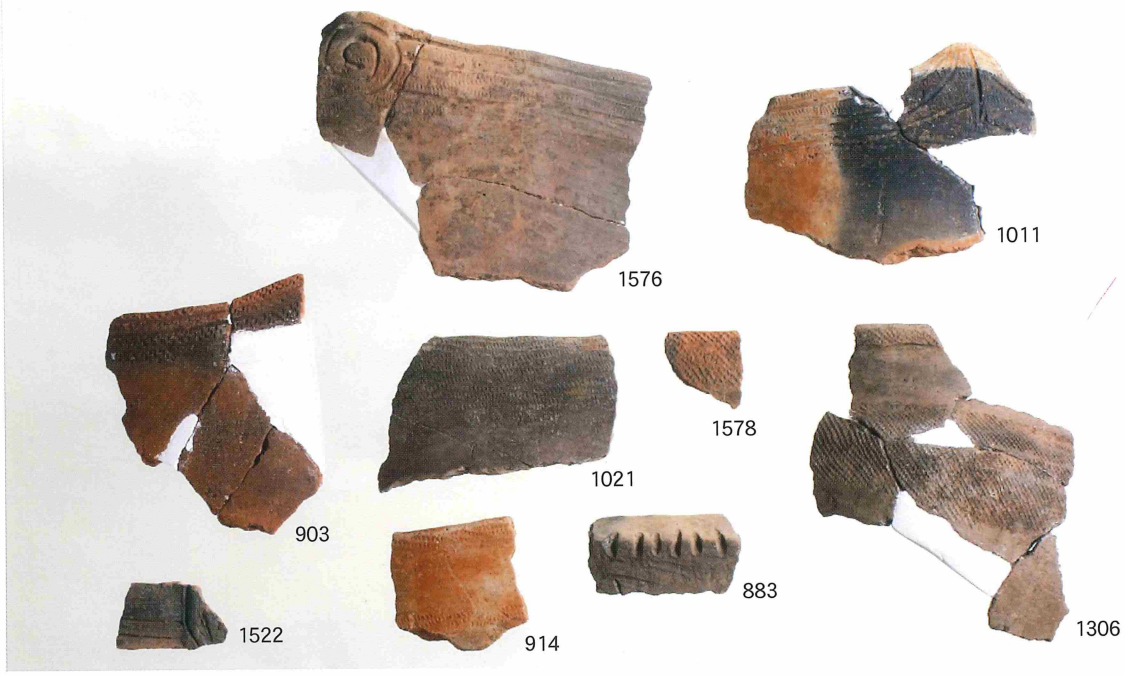


縄文時代中期船元式

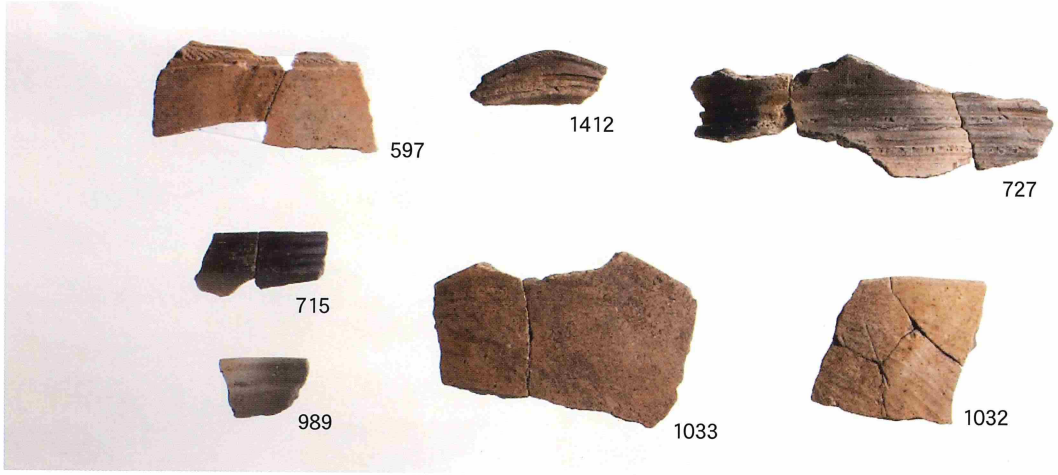


縄文時代後期前半

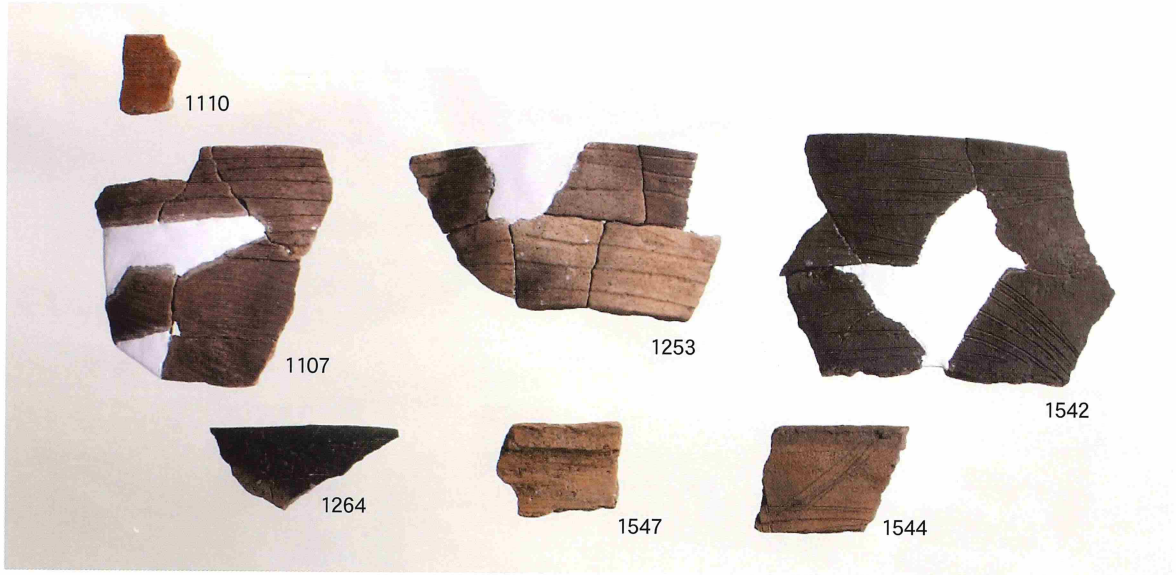
縄文時代後期石町式

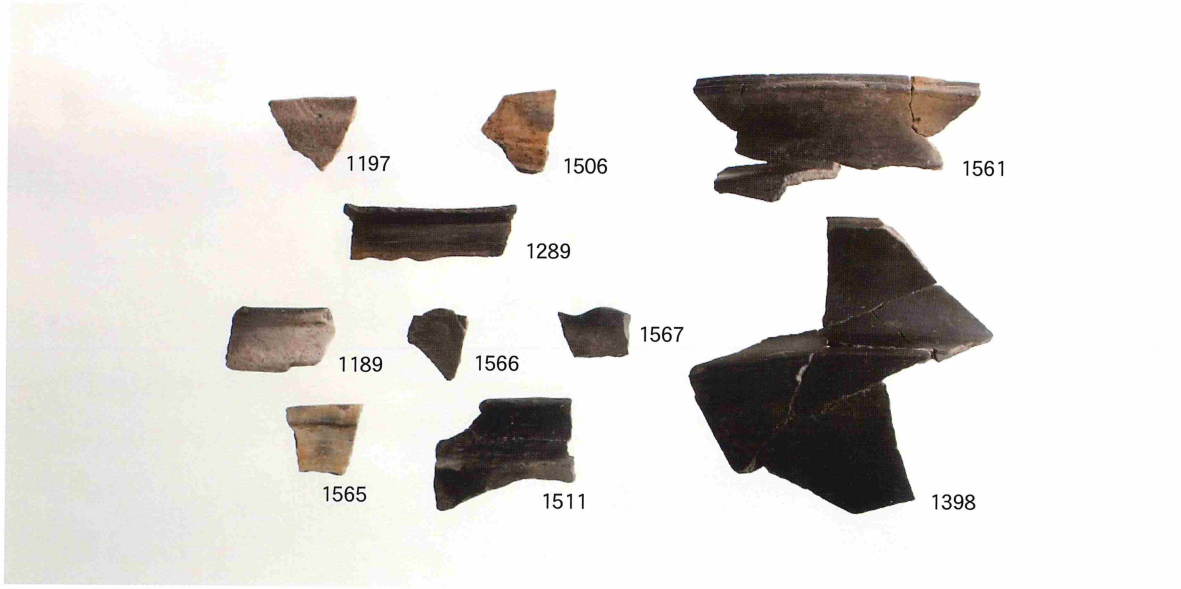


縄文時代後期西平式、三万田式



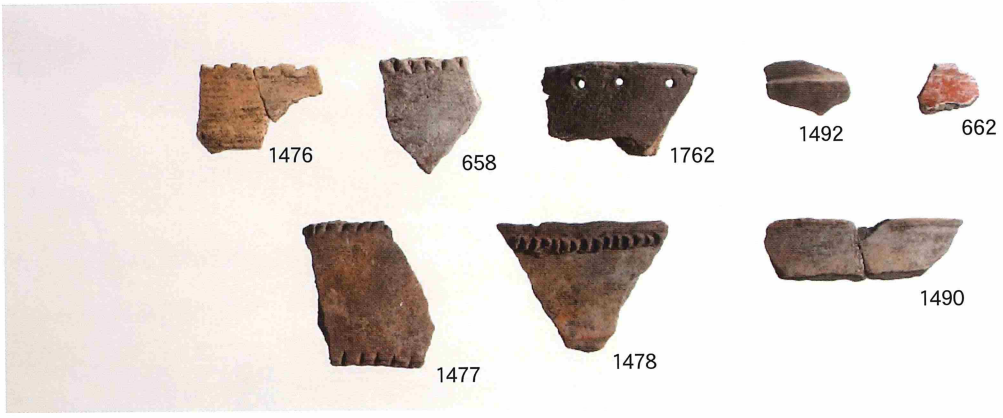
縄文時代晩期前半



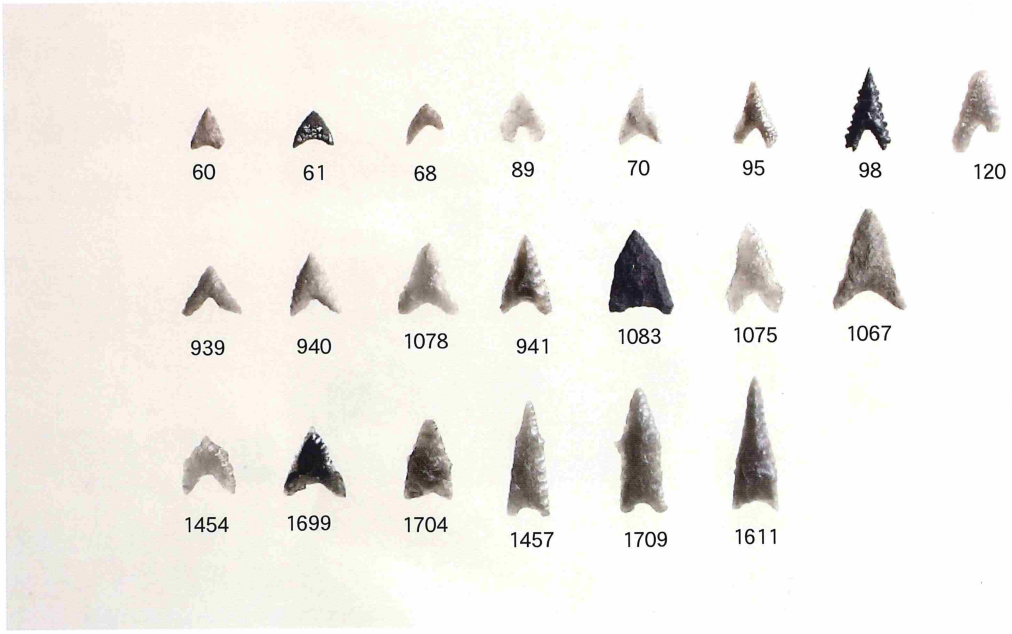


縄文時代晩期前半

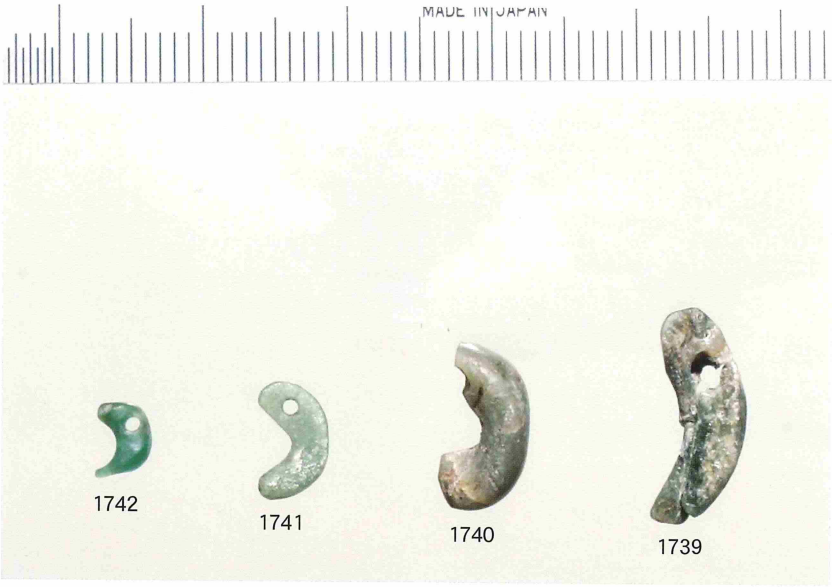
弥生時代早期



縄文時代石鏃（上段：中期　中段：後期　下段：晩期）

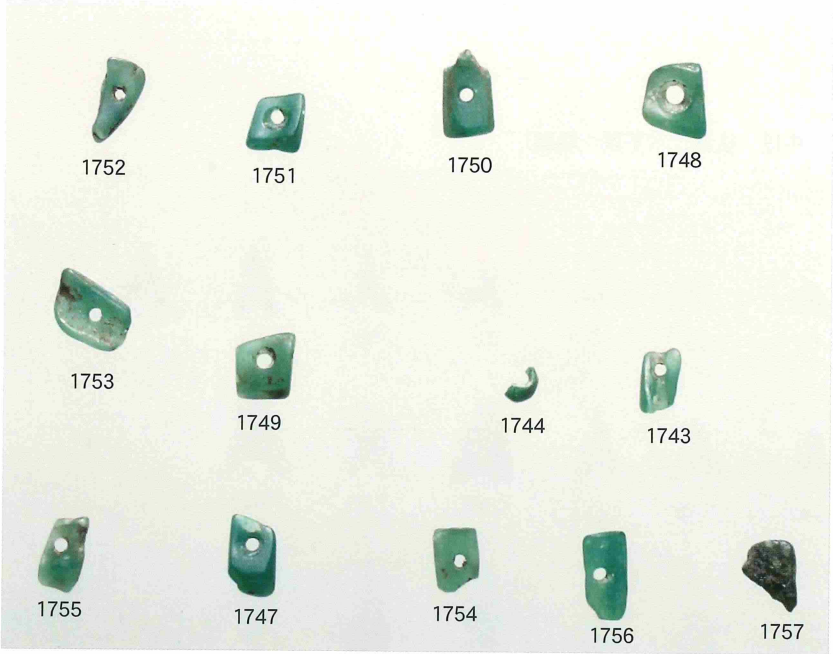


縄文時代石製装身具



勾玉

丸玉
小玉



管玉
垂飾

報告書抄録

ふりがな	いわばないわかげいせき
書名	岩鼻岩陰遺跡
副書名	県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（2）
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第89集
編著者名	西本豊弘　遠部慎　大坪志子　後藤一重
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870－1113　大分市大字中判田1977　ＴＥＬ 097－597－5675
発行年月日	2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
いわばないわかげいせき 岩鼻岩陰遺跡	おおいたけんぶんごたかだし おおあざながいわやあざじぬし 大分県豊後高田市 大字大岩屋字地主	209	193	33°34′52″	131°33′28″	120508 ～ 120920	260	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩鼻岩陰遺跡	集落	縄文・弥生・ 古墳・中世	立石遺構・ 土坑・焼土	縄文土器（前期、 中期、後期、晩期）・ 弥生土器(早期)・石鏃・ 石匙・獣骨	間口約40mを測る 大分県最大規模の 岩陰遺跡

要約	岩鼻岩陰遺跡は、国東半島の中央部近くに位置する。桂川水系の長岩屋川右岸に形成されており、標高は約160mである。隣接して流れる長岩屋川の河床との比高差は、3～4mである。岩陰は東面して開口し、間口40m、高さ3～6mの規模をもつ。雨落ち線は奥壁から1～3.2mで、実際に岩陰として利用できる面積は約80㎡である。岩陰の北半では、本来、縄文時代前期～晩期及び弥生早期の包含層が形成されていたと思われるが、削平・攪乱が著しく、すべての包含層が残るのは一部のみである。南半では、岩盤が奥壁から急激に下がる。旧河道が奥壁まで及んでいたためと考えられ、この部分が利用可能になるのは、河道の埋没が進行した縄文時代後期後半以降のことである。縄文時代前期の遺物量は極めて少ない。中期には、2～3区にかけ遺物集中部がみられる。後期前半は、良好な包含層が残存しないが、後期後半の石町式段階には、8～10区と15区に遺物集中部が形成される。なかでも、8区の立石遺構（ＳＸ００４）は注目される。晩期前半には、12～17区にかけ遺物集中部が形成され、16区からはクロム白雲母製の勾玉や垂飾などが出土した。また、遺物において目立つのは石鏃で、全体で700本以上が出土した。このほか、多数の動物遺体も出土した。

岩鼻岩陰遺跡

県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第89集
平成28年3月31日

発　行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-0011 大分県大分市大字中判田字ビワノ門1977
TEL 097(597)5675

印刷所　株式会社プリメディア
〒874-0923 別府市新港町1番13号
TEL 0977(23)3288